

白露集

明治三十九年

雲の峰大地より吐く赤熱を吸ひつつ生くるものと思ひぬ
もの悲し遠くもきたる出羽の國路の雨きく夜のつれづれに
黄なる花野火の煙ともつれつつ消えゆくごとき四月の夢や
みちのくや草に寝て見ぬ夏の野にあそべる駒と海はしる帆と
初秋や厩のかげに晝顔の花をひきつつ雲見るといへ
水草に白き露立つ水國の文月の朝に生れにしわれ
熟み果てし柘榴に似たる夕雲に毒氣ふくむと悸きてみぬ
大裾野高ゆく風は白雲のちぎれを山にはこびも去るか
青笹の中の五百の白繭に西日さしたる五月晴かな
寒帯や年のなかばは日の照らぬみ國なれども恋知る人よ
わが知らぬひまに我まく光かと遠稻妻を野に立ちて見き
奥飛驒や峽の中にも畑ありて黍をつくりぬ秋立つ頃を
草月夜ちさき鈴ふる巡礼の面影みせよ霧の中に
わが家は燕かくるる海の遠の丹の雲みつつ秋に入りけり
森ゆけば古壺いだきわれをみて淋しう笑める白齒の媪

明治四十年

毛の國は野焼き山焼き火のけむり晝も見てゐるもの静けさよ

ものの音をとらふる如きまなざしに灯見てもだせり春の夜の人

乾草のかをりの中に冬もなほ死なず音になく蟋蟀をみぬ

野焼して煙が急がく大陸の音なう暮るる日をおもひ居ぬ

わが心絶えずはぐくむあるものを疑ふほどに丈のびてきぬ

段ばかり草叢ひらき杉苗を植ゑぬ九月の大山裾に

花火ちる闇にくゆらす水仙のかをりなつかし村鍛冶の家

紅羊齒の伏し枯れ見ゆれ岩山の一角よろふ雪の下より

黎明

明治四十一年・明治四十二年

暴風雨あらしこず雲かさなりても足らぬ暮こそ迫れわが一生に

荒き土たがやしつともつつましう物など思ひ日送る人よ

この鉄路幾里につづくかがやかに日照るが下もとをよるこび走り

ひややかに死をみかへる日不安よりぬけ出しおもひ歎びにみつ

農民は建國の日に愛憎のけぢめもあらず野におかれける

歛うてば力つたはり土に入る音ききなれて老いもえ知らず

街ゆけば何か起らむ前觸れのありとごとくに人われを見る

濁り河にごれるままに水脈みなして海にそそげり海ひろきかな

大き響あらゆるちさきかしましき音を消さなむ日あるをおもふ

ものの影かくれひそみて日はいまし中空わたる我れ君とゆく

冷えし胸をどらぬこころつつみつつ生くるをはぢぬわが日悲しむ

凡人の中にわれ見しおどろきと惨いたむこころと絶えず身をかむ

山裾に人は家やづくりかくて死す死すべきものと疑ひもせず

眼路のはてつづける青に一点の紅燃あけゆやがてひろがり来べし

群と居てまぎれむとするさびしき心地しましたとりなげく

すがれゆく若き心のいやはてのさま見ゆひとり灯にむかふ時
よく語るされどきみしき心をば構へていはぬわれなりしかな
竹林に射す一條の冬の日の光のごともわれ在りぬべし

追ひ及ばぬ人とも知らず追ひゆきて疲れしときに見たる天地
泥ひぢばめる茶碗のかけらものの屑春の光に照らされてあり

黒き土鋤けばえならぬかをりして胸に来るなりさびし我はも
波止場よしその上に立ち百船を送り迎ふる生活たづきもうれし

言こと更にはば互の心はも離るるごとし黙してぞ止む

忘られて生くべくあらぬ思ひふと安しともみるわが昨日今日

人等ゆくわれ忘られてあるべしとおもほえねども何かさびしき

君にだもわがすることをひややかに見てゐたまへといふが悲しき

麥青しそを前にしてけふもまたぬるき光のもとに息づく

曇り空まなこは絶えずその方にそそがれてある春の日の午後

以下八首姉なりし人に

苦き味知れどもとりてはなたざるこの消息を君は知るとや

旅にゆく君が瞳にさすらひの安きよろこぶ色みて泣かる

狂ほしうものかいやりつ大きな室まに寝て君がおもかげを趁ふ

死はむしろわれに賜ひし法力の一とし姉はよそほひぬれど

対ひ居て語る言葉のすくなきも姉にふさはし我れや何なる

君が眼に人の姿と一様にうつるは堪へじわが恋ふ人よ

その細き声のすがれにいひわかぬおどろきをもてまほに君みる

別るる時足らひおぼえし胸のうちいつしか虧かけてあるにおどろく

以下四首故郷にかへりて

故郷に来ればちひさしわが影もわれをめぐれる父母の姿も

いと切せちにわれ待つといふ父母とわれとに何のかかはりありや

あらがはずわがいふことにおん耳をかしたまふ故母よかなしき

この性さがを母に帰さばや幼き日わがあやまちをかばひし母に

いまのこと誠ならずはこの後に起らむこともわれに要なし

わが耳におほくの言葉一秒をおかずひびけどみな忘れ去る

日にいく度たびあふぐ山なりそのたびのことなる感じ君に書かまし

われあるため他ほかの九人にわざはひを及ぼすといふそれもよろしき

知らぬ人わが家に来て妻となり母となる日のおもひさみしき

ああ海見ゆ海にゆくとしてよるこべるころこの時悲しうなりぬ

海の音や遠ざかり山の角まがりし時に市をおもひぬ

以下二首仙台を去るとて

喜びもおほくえ知らず悲しみもよく味はず仙台を去る

再びはこの悲しみを以てしてあはじとちかひ仙台を去る

潮のかをりただならずする海にゆき百合をふくみて死なむと思へど

この岡より展けたるべし野みゆべしかく思ひつつ坂をのぼりぬ

日にほひかげりまたなく外光ほのきの微黄ほのきをしたひ洞出づる時

涙もつ眸はづきに百合のうつり来る八月はづきとなれば生くべかりけり

人とわれと比べて幸のこきうすき考ふるまでいつか老いたり

この外の生活たづきの道のあるべきをほのおもへど詮すべもなし

あはれまるそのこと既にわれとわが領りやうを無なみすることに似て憂し

大正四年

巢鴨の牛

私の巢鴨の寓居と溝川一重隔てて一寸した牧牛場がある。
私はここに居を定めた当座は、暇ある度毎に、その溝川の
ほとりに立っては、牧場に遊んで居る牛を眺めるのを日課
のやうにした

家のうちの鼠しづまりゐたりけりあかとき近み牛なくきこゆ

朝の霧ふかかりければ霧ぬちにかすかに牛の動けるが見ゆ

白牛の垂乳たりちほのかに日光ひにほひ秋の牧場はしづかなるかな

しくしくに秋雨ふればにぎりみづ牧場にたまり牛もあそばず

いらだてる心かなしくなりにけり牛みれば何のもの思もひもなし

ひとすぢに心澄しんみきたり涙しぬあらしの中に牛なくきけば

小夜くだち心なごみてきたれども牧場の牛はなきやまずけり

何に怯えてなくぞも夜半の牛のこゑき居ればいのちかなしくなれり

夜となれば小舎に灯ともり小舎ぬちの大牛の背がくろぐると見ゆ

夜をさむみ牛もいねずしてありたれば月はひそかにのぼりるにけり

野づかさ

弱法師よろほうし

この年の十月、日本美術院第三回展覧會が上野精養軒内で開かれた。その際、下村観山氏は、謡曲から題材をとったといふ「弱法師」を出したが、その洗練せられたる技巧と全局のもつ落着きとは、私に名匠の苦心といふことを思はせた

弱法師俊徳丸はこころばえ弱かりければうらぶれにけり

梅の花しきりにかをる下蔭にっさうくわんに日想観にっさうくわんをおろがみにけり

同じ展覧會に、小林古徑氏は「阿弥陀堂」と題して、宇治の平等院を描いた大作を出したが、これは建築を通じて作者の情感を表現したといふやうな藝術味の豊かなものであった

小雨なし朝の霧ふる彌陀堂に灯はともりながら夜明けたるかな

唐沢山

十一月二十二日、私は私の職を奉じてある中学の生徒と共に、郷國の唐沢山に一日の遠足を試みた

一 途上車中

刈りあとの稲のひこばえほのあをく消えがてにして雨に濡れをり

北の空明るむままにこのあたりに見なれぬ山を見いでつるかも

あな久しく山を見ぬかなとなげかひて山見てあれば眼はうるみ来くも

毛の國の山はなつかしきさやか山の山なりけれどわが目離かれせず

砂地の上鴉むらがりたはむれて直ただには飛ばず朝かけりせり

二 山上

さんさんと日光ひかりこぼれてうらがなし山間やまあひの路せばまりゆくも

山にのぼりてわがさびしさはきはまりなし谷々の隅見えわたるかも

赤松の林のなかはすがすがし間なく時なく秋風わたる

さくさくと松のはやしの道をゆき生徒一列につらなりにけり

伐木

上野公園所見

一心に枝刈りおとす男ゐて公園の秋は更ふけにけるかも

枯木にのぼり枝刈りおとす男あり秋晴のそらは高かりしかも

この朝け鋸のおと秋空のまんなかにして澄みとほりたれ

うち黙もだし人らあふげど木の上の男しきりに枝刈りやまず

枯枝を刈りおとしたる男ひとはいま背のを伸してふかく息づき居るも

新道

とどのはぬ街の新道ゆきなづみきたなき溝を跨ぎこえにけり

新らしき道ひらかれて街中の墓場はいまかわが眼にふれつ

冬日小情

この岡に冬の巷を見おろしつ心うつけてありといはなくに
崖に立ちはらはら土を蹴おとせば真下に青く草の生えたる
夕空に富士まкруくもいかしくもをがまるるからにわが身いとほし
池のべに噴水をみる人ともし冬の噴水ひそかなりけり
夕かけて公園の池を見てあたり池のむかうに人の動くも
御濠の水日ごとへりゆき一すぢのながれとなりてなほ光りたり
ひとつら
一列の雁がわたれば御濠の水いよいよひかりて夕さりにけり
水仙を買うてもどれば夜はふかし大晦日おほごもりのわれの室はも

夕富士

山の手の線路つめたく夕かげに光りそむれば富士くるみたり
郊外にゆふべを立てば爪先の冷ゆるまにまに富士くるみたり

大正五年

梅の花

天つ日のひかりとぼしみ梅のはな真晝をぐらし竹やぶのかげに
垣隔へなり竹やぶのかげに咲く梅の花はそれとしわきがたきかも

梅の花を見て、私が嘗て兵營に居た頃、青山から戸山の射場への行きかへりに、ふと眼にした二月ごろの市ヶ谷監獄わきの情景を想ひ起した

梅の花とぼしけれども囚人はそのさ庭べに土均ならし居り

兵隊のわが通りたれば囚人は土ならしやめてこなたを見たり

葦群

下總國府台附近

葦はらにもゆる焚火のほのほさへ揺れずし空にとけ入る真晝

葦はらに冬のまひるを燃ゆる火のをりをり高き音を爆はぜにけり

ゆらゆらとほのほなびかせ燃ゆる火のめぐりを歩む葦刈り男

葦群あしむらのもえつきぬればほのほ消えあたりいちじるく煙はのぼる

瓦に焼く土挽く白のごろごろと家やの暗がりにひびきはてなし

獨坐

わがほかにこの家のうちに入はなし今こそなれとあずまひを正す
子を抱き妻はとほくも行きたらむこの静けさに坐り居りわれは

雪

溝川の芥のうへに雪かかり水はおもたく流れゆくかも

土手芝は雪にかくろひ濠のみづ水嵩ましたらしおもくよどめる

路傍の雪にはね泥はねちらしわれら一心に雪の野にいそぐ

清らなる雪の上にはねひぢもかへり見ずして雪の野にいそぐ

十方に照りかがよふ光のなかいづこゆか雪の墜るる音す

春の夜

夜目にしるくゆるる上枝のかしこきのきはまりぬれば風の音きこゆ

大空に夜ある雲の春さればわきて親しもわれに近くある

わがかへるこの町裏の小夜ふけにくだかけを聴く久にしありけり

夜ふかく今はと門をとぎしたりみち足らふらむか一夜のねむり
ねむらねばならぬ生く身を愛しみつ今はと門をとぎすなりけり

雉子

雉子なくこの墓地うらのあかときの家にほのぼのめざめけるかも

雉子なく声しきりなり朝床にけだるき体をのぼしつるかも

春日小情

枝川に一羽おりたつかもめどり見てあればさらに水上にとぶ

春されど草もえうすき野中の徑ふむとし思へばなつかしきかも

我が郷国の下野にては辛夷を芋植花といふ

はつはつに辛夷の花は咲きにけり古里人は芋植うらむか

根こぎして車につみしひとつ松車うごけばその葉ゆるるも

蹴たつれば低く舞ひあがる土ほこりいよいよかなしみわが蹴るものか

畑道のしつとり濕めるゆふべなり歩み疲れてひそかにかがむ

武蔵野のさなかに来つつ汽車をおりて秩父の山に向ひるるひさし

若杉の茂みあさけばしかすがに野をとほく来てわが入れりけり

牡丹

五月の初め、本所四ツ目の牡丹園に牡丹の花を見に行った。
ごみごみした街裏のやうな通りをぬけて園の中に立った時は、歩み疲れて多少幽鬱になった私の気分もおのづから展
けて来た

土ほこり立ち舞ふ街を来しわれに牡丹の花はまことに紅し

鉄叩く音もここにはきこえず牡丹の花はおほらかにひらく

廣庭の牡丹の花を見てあるき土をあさく踏むしめれる土を

のびのびと欠伸をしたり大輪たいりんの牡丹の前にしましたたずみ

帰路

よろめきて発動機船すぎゆけり橋の上へに我は笑ひかねつも

よろめきて発動機船とほりたれやがてかぼそく汽笛ふえならすきこゆ

はたたがみ

五月中旬の或日の午後、俄かに空がかき曇って気温が
非常に低下したと思ふや否や雷が烈しく鳴り出し、や
がて大粒な電が降って来た。これが二時間程つづいて
止んだ後は、凄**い**ほど眞青な空が仰がれた

はたた神そらにはためき大いなる電を降らせばかしこきものを

おのづから天あめのもなかに凝り足らひおちくる電のかしこきろかも

電ふりやみはたた神とほく去いにけむ夕づく空のあをみたるかも
時ならず電を降らせる雲のかげをさまりて寒き月夜つぐよとなり

麥秋

六月上旬、学校の生徒と共に終日暮春の武蔵野を歩き廻った

一 井の頭の池

杉の木のみまゆ見えくる隠り沼こもぬのひかるとすれや行々子よしきりなくも

日のひかり葎の茂みにしみ入りつ堪へられねばかよしきりなくも

行々子はおのれ啼かねば寂しさに堪へがてぬかもかしましくなく

この真晝よしきりの声すみてきつわれの嘆きに似るといはめやも

二 途上

切りくづし道つくりたる崖のみまゆあなた五月きつきの野はひかり見ゆ

まさみしく頭の上へわたる日をあふぎ晝飯ひるとき時なれと農夫はかへる

竹林にこもらひ響く風の音麥刈り終へし吾には聞ゆ(農夫の心となりて)

三 多摩川

多摩川はかなたならむと行くかたに水無月ちかき風の音すなり

多摩川の向ひの岸のなだら岡空をかぎりてさみしかりけり

多摩川の向ひの土手を人ゆかず草にすわりて時すぎにけり

四 遠山並

山を忘れ五月の小野をさまよひし日の暮れ方に遠山の見ゆ

五月野をひねもす歩みつかれたりあはれこのとき遠山の見ゆ

むさし野のさなかにありて遠山を見らくかなしも五月のゆふべ

旅の追憶

わが行けば遊びをやめて道のべに吾を見送ると立てる子らはも

天離るひなの長手に遊ぶ子を愛しと思へや見て過ぎにけり

空梅霖

この年の六月はどういふ気候の関係か、空梅霖の日が幾日となく続いた。それが為め、私の健康も思はしくなかつたが、一日、某の講演會に聴講に行った時には、特にそれが強く意識された

ありがたき人の話をききながら居眠るわれのかなしくもあるか

眠けれどつとめて眼ひらきある生きのいのちのさびしかりけり

眠たさをおしこらへむと思へども瞼は合ひて悔しくもあるか

空梅霖のまひるをくやし眼つぶれば扇をつかふ音もこそすれ

白 粥

日頃健康を誇つてみた私も、胃腸を害して数日病床に臥さねばならぬ日が来た

いまははや我が身ほそるとなげきつつ病の床に白粥をすする

白粥のつぶらに白き米の粒湯氣をふきつつ見居りけるかも

ただちには口にはこばず白粥を腹ばひながら見つめて居るも

せはしい生活をしてゐる私には、かうした病床にあることも、一つの恩恵だといふやうな氣がして来た。そしてゆくりなくも幼い頃の郷家の生活を想ひ出した

蚊帳ぬちに汗のほひのみなぎりて曉ちかからしかなかなはなく

草刈りにゆく男らのけはひすれほの暗ければひとときを寝む

曉ちかみかなかなのなく声ききついま一時をぬらくたぬしも

出 水

長雨のゆふべ明るく霽れたれば水見にゆかむこころ湧きたり

夕かけて洪水を見にゆかむとす入り日あかくて堪へやらめやも

大橋に出水を見むとひたすらに急ぐこころはさびしきものを

増水の水の面に高くぬきんでて人こそ通へ千住大橋

いくたびかあふぎたりけむ大橋の親しといふかこの増水に

夜をこめてややに増しくる濁りみづ現しごころに見むとおもへや
大橋の上をいくたびか行きかへり濁りみづ見たりうつしごころに
この夜半の出水のさまをしのびつつ寝ねなむものか家にかへりて

房総半島

八月八日、東京を立つて房総半島巡りに出掛けた。東海岸の
九十九里浜を見てから、勝浦に出、道を南にとつておせんこ
ろがしの嶮を過ぎ誕生寺に詣でて、房州一の名山清澄山に登
った。それから更に南行し、古川から半島の頸部を横切つて
北条に出、今度は西海岸を北上して、鋸山に登り上總湊から
汽車で東京に帰つたのは十四日の夜であつた

一 土気附近

岩腹ゆにじみいでたる山雫まるまるひまを日にひかるなり

二 九十九里途上

こうこうと松のほつ枝をわたる風空にひびけど吾は行きやまず

松山の奥かに澄めるたまりみづわが涉らねば知られじものを

山番の萱屋の軒ゆけむりあがりひとしきりなく日ぐらしの声

三 九十九里

沖よ来てここにきはまる土用浪くづるるときのその光はや

まなかひに寄せてくづるる土用浪われは疲れて磯曲をゆくも

四 勝浦

かぐるなる岬のさきにともる灯のいづこか知らねしまし見まもる

五 清澄山

山河のかたへをつたふ岨路の杉にかくれて末は見えずも

はるかにものぼり来りて山河のきはまる見れば山はかなしも

山川のたぎつ瀬の音とほざかり高きにのぼる一人とおもひて

低山のここだつらなるその奥に清澄の山はありとこそ思へ

この山にひとりならずと思へども何とてかくはさびしくて登る

清澄の山のいただき木を繁み人は木の間に庵せるかも

六 南無谷

夏山のしげきがなかに枇杷の木の新葉ひかりてそれとしるしも

山峡に道はほそりてはるかなり枇杷の新葉のそこここにひかり

七 鋸山

羅漢あるこの岩山にのぼりくれば孟宗藪の眞下には見ゆ

孟宗藪ま下には見れ人のある声のこもりて見えのさびしき

羅漢あるこの岩山のいただきの見ゆとはすなれ霧のたえ間に

八 市岡附近

天つ風吹きをつのりになしきはこの内海うちうみのしら浪の列
 内海の水あさきから白秀しらほなみここださわだつ風ふくなかに
 風のなかに息はつまるとおもへども騒さわぐ白浪の忘らへかねつ
 白浪のさわだちしげし風のなかにわれはこの身を愛はしとこそ思へ
 白浪の立ちのさわぎに海ぞひをひとりいゆきてかくはかなしき

河 霧

夜ふかくかへり来ればわが家かたの方になびくは河霧なれも
 せせらぎの音のさやけさいまのわれは夜霧にぬれて家にかへるも
 溝川への辺に家居してうれしかも小夜ふけぬれば霧ぬちをかへる
 この夜半をひそかに霧きらふ河みぎりの水の面もに足りて路にながれたり
 この夜半を人し行かねば河霧は路にながれてさやりあらずも

大正六年

帰郷感懐

この年の一月、私は久方振り下野の郷家に帰った。淹留うんりゅう数日。かなり長い都會生活に萎え衰へた私の精神と肉体とは、郷家をめぐる單純にして一氣な冬景色のうちに抱かれて、更に新しい力を得て来た

山かげに消けのこる雪をふみさくみいまかへりぬと母まをに申さな
 ふるさとはいたも寒みか山かげに消のこる雪のほのぼのとあはれ
 山かげに消のこる雪の夕されば光もちきたり怪けしくおもほゆ
 ふる里の大きるりにい寄りつつこころくつろげ語り出づるかも
 日の暮れをひそかには降る時雨のおとわれまづききて爐にあたりある
 ふる里の家の門かどみち長ければゆきかへりみつ日の暮れがたを
 夕暮をこぼれ雨してほど経へたり寒き月夜となりにけらしも
 東ひんがしゆ月いでたれば山陰の小田くらくなり人ある見えず
 夕近き山かげ小田にうごく人ますかし見れば土はこびある
 柞葉ははそはの母はめづらしこの夜ごろ孫をいだきて夙とく寝いぬるかも
 たまさかに古里にかへり父母とおなじ家やにねつ寒き夜ごろを
 ふる里のさ夜の小床にひとり寝る心はやせていかにかはせむ

ややありてぬくもりそめし床の中に足ふみのばす寒夜なるかも

ここの家の人の起きあて語る声隣間ゆ聞く寒夜なるかも

ま晝間をひそかにひかる遠山の白雪みつつ妹のしのばゆ

晝見れば白雪かむる遠山の明き夜空にありがてぬかも

春日帰家

この年の四月に衆議院議員の改選があった。私はある用事を携へて、再び郷里に帰省したが、今回は殆ど家にとどまらずに、親戚や知人の訪問に忙殺された

道なかばに日は暮れにけり家人ら野ゆかへる頃を家にか着かむ

丘のべに灯はともりたり家にかへる心いたみてありといはなくに

古里の家に見なれぬ白き鶏わが在らぬ間に生れけむかも

今朝はやく閑つくりしはこの白き鶏にかあらし庭に遊べる

ははそはの母が告らす言ききつ白鶏を見るはうれしきものを

向つ尾の奥の山並春されば雲のそきへに遠ざかり見ゆ

まなかひに見つつ近づけ向つ尾の木立もしるく仰がるるまでに

向つ尾は近づくままにそびえ立ち遠山並をかくしたりけり

以下二首、従妹の家に宿りて

君が家は屋敷のなかに麥つくり日にけに麥の生ひ立ちを見つ

君が家にひと夜をいねつ起きぎまに麥のはたけを見らくたぬしも

兵隊の喇叭 下總江戸川堤上にて

兵隊が息ふきこめて吹く喇叭河をわたりてきこえくるかも

一心に喇叭吹きある兵隊は春日のもとに物思はざらむ

兵隊が息つぎ息つぎ吹く喇叭しばらくはやまずなにかさぶしき

ただに吹き吹きのみやまねば兵隊の喇叭の調子ながらさびし

喇叭の音しばしとだへたり今もかも兵隊はほと息づき居らむ

霖雨閑居

松の葉の尖り葉の露おちもやらず曇りひさしき朝なりけり

幼な子とあそびて居れば梅雨の日のわれの書齋もせまからなくに

雨ふるに外に出でむとてせがむ子をすかしあぐみてなげかわわれは

幼な子をすかしあぐみてさりげなく空をあふぎたり松の葉越しに

き庭への芒がもとの植木鉢この五月雨に洗はれて居り

暁起

雀の子鳴き交しあるあかときをめぐめてきけば雨やみて居り

雨やみしあかとき起きに溝川の水嵩みかさましたる音をこそきけ

豫備兵

この年六月、私は豫備勤務召集に應じて、その二十三日、青山の近衛歩兵第四聯隊に入隊した。そこは過ぐる大正二年私の現役時代の喜び悲しみをまざまざと思ひ起させてくれるなつかしき兵舎であった。今度豫備兵としての私は、自分に愛敬の眼を向けてくれる若い現役兵の多くを自分の周囲に見出した

豫備兵にわれはありけりねもごろに現役兵のものいふきけば

豫備兵にわれはありけりわがために初年兵らはたらく見れば

わがために飯盛りめしくるる初年兵の手つきを飽かず眺めけるかも

わがために飯盛りくるる初年兵を見つつゆらぐもよわが下ごころ

初年兵の盛りてくれたる飯皿めんこの飯かしこけれども箸つけにけり

私のはいった第六中隊の豫備兵は、千葉県のものがその半ばを占めて居た。その多くは私の現役兵時代に寝食を共にした人達であった

妻をおきて千葉の葛野かどのゆいでて来し予備兵の顔見とも飽かめやも

われはもや豫備兵なれど整歩はやあしの号令きけば足をつよく踏む

一日多摩川方面に行軍を試みたとき、兵隊の心安きに路傍の商家に腰をおろして、麥湯の接待をうけた。その家の主婦と話を居るうちに、その子息は、目下習志野騎兵聯隊に入営して居ることが分った

よそにのみ見て過ぎなむをここの家に行軍に来て休みけるかも

習志野

私等は七月二日から十日迄、習志野で野営生活をした。盛夏の苦熱烈しき日の下であの広々とした野原で練兵することとは、かなり辛かったがその間にはさうした生活でなければ味ははれない幾多の興趣も見出された

一到着

習志野にいまは着きぬとおもへかもにはかに足の疲るるあはれ

習志野にゆふべを着きて野のきはみ筑波の山はさがせども見えす

一流汗

うつしみのいのちをもちてこの原に汗ながすもよ豫備兵のわれは

人間の流すべき汗をながしつくし豫備兵われはかなしかりけり

現し身のいのちのかぎり汗ながしふかきなげ哭きはわがもたなくに

この原のあらむかぎりわが後も汗ながすらむ人の子おもほゆ

習志野に汗を流してわがみると遠方人をちかたびとに告げずかもあらむ

三 水筒の水

水筒をさかきにかしげ飲む水のこの味ひを人知るべしや
今ははや練兵をへぬ一滴もあまさじと飲む水筒の水を

四 夏雲雀

天つ日のい照りかがよふこの草原宜^{くさふう}べ習志野と呼ばしまをしき
天傳ふ日の暑けれや夏雲雀草にこもりてふふみなきある

雲雀の子あそぶを見つつ木のかげにひそかには立つ歩哨のわれは
雲雀の子わが眼^まなかひを去りやらず土を歩むはうれしきものを

五 獨逸の俘虜

習志野の原の凹^{ひき}みにどいつの俘虜白きシャツきてはたらけり見ゆ
習志野の原の凹みに作業するどいつの俘虜は妻をおもはむ

六 夜間歩哨

野を遠く人らしきもののかげ動きすなはち瞻^{まも}る歩哨のわれは
木のかげにおろそかならぬ任務^{つとめ}をもち立つとし思^もへば時過ぎがたし
とつぷりと日が昏れたればこの時をおろそかならず思ひて瞻る
まなかひに觸^{さわ}るものなきここの原おこたらず瞻るあかき月夜^{つくよ}を

習志野の月夜さやけみ瞻り立てばわれを歩哨とおもほえなくに

月讀のひかりさやけみしまらくはものを思はな敵は見えぬを
かりそめの惚^{うっ}けごころをたしなめつ野面を瞻るわれは愛しき

ひそまりて瞻り居につつ夕風に顔を吹かせり汗ばむ顔を

七 帰營夜行軍

豫備兵のわれはや通る葛飾の田中につけし一ぼんの道

この夜さをいねずし歩む豫備兵とわれをおもへばいきどほろしも

いきどほる心やうやく落ち居つつだまりて歩む夜の道とほし

夜の道をあゆみ疲れてうつつなし人がだまればわれもだまるを

はしけやし豫備の士官が足弱の兵の銃かつぐ小夜は深けれ

七月十一日深更東京市に入る

夜くだちて大方人は寝ね居らむこの街なかをゆきとどまらず

真夜中のちまたにおこる靴の音おもくみだれて行方知らずも

いつしかと夜は明けたらし並びゆく兵隊の顔をつくづくと見る

夜をこめて歩み疲れし豫備兵の顔は黄なりと人に言はめやも

大君の宮居の芝生この朝をあゆみ疲れしわが眼には見ゆ

夜をこめて歩みは来つれ大君の宮居を見ればなにか嘆かむ

房総半島再遊

八月下旬、私は去年歩きのこした房総半島の一部を廻った。月の二十二日、東京を立って、その頃上総の鹿野山麓の郷家に帰省してゐた鎌田虚焼君を誘ひ、先ず鹿野山に登り、それから西海岸を下り、東海岸の布良白浜朝夷などを経て、北上して天津に至り、清澄山に登って、今度は半島の中央を横断する山道をとって、木更津に出たのは二十一日薄暮であつた

一 木更津近海

内海の潮退きたれば渚とほく馬うちわたす人ひとり見ゆ

内海は風かもあらし渚ゆく黒馬の尾の振りのよろしき

内海の晝の渚にひとり来て汗ばむ胸をくつろげにけり

二 鹿野山

山坂に夕かたまけて立ちどまり向伏す山をうつつに見たり

夕されば草におり居てなく蟬のこゑはこもらふ草の茂みに

ひと度は見むと思ひし鹿野のや九十九谷を今見つるかも

いとどしく吹きながれる夕霧に九十九谷はかくれあへなく

霧立ちて久しくあらぬに九十九谷は埋もる霧の底ひに

かぎろひの夕さり来ればおのづから谷間ゆもるる松蟬のこゑ

山の上のこの島に畑つものさややく生ひぬ秋近からむ

戸の外を霧ぞながるる山の上の宿に酒酌む浅夜なるかも

朝霧に姿は見えぬ山鴉ここだも里へなき下るらし

霧ぬちを里へなきくだる山鴉それの一つが霧ぬちに見ゆ

その群におくれてのこる山鴉杉のこぬれをとびめぐり居り

霧はれていまはあらはなる銚杉の木ずゑにとまり鴉はなかず

晝見れど九十九谷の山の背のはしりきはまる涯は見えなく

晝見れどみとめがたなき谷かげをながるるものか水の音きこゆ

この谷の向うにてなく鶏のこゑわれは高處に眼をつむり居り

三 洲の崎の茶屋

洲の崎のおやゑが茶屋に腰おろしわがすすりあるところてんこれ

洲の崎の茶屋のおやゑはかなしきにぎれ言をいへばましてかなしき

洲の崎のおやゑが語るぎれ言もあだにはきかず旅ゆくわれは

ぎれ言をかたりをはりてしかすがに海を見て居りかなしおやゑは

寛ろぎてぎれ言をいふ洲の崎のおやゑにわれは再あはざらむ

四 平沙の浦

磯原に干ししかじめを吾がふまずよけて通ればうれしきものを
吾子のためもて帰らなとつぶやきて貝をぞひろふこの渚に
うつし世の渚にもゆる茶火を海女はかこみて心安からむ
渚べに火をかこむ海女がうつし身の乳房は垂れてかなしきろかも
磯行けば火にあたり居る蟹あまをどめ乙女たゆき眼をして吾わを見たりけり
沖ゆとほくこの渚べにもゆる火を見にけむ海女がまなざしおもほゆ
燃えつきていまは消なむとするからに焚火にい寄り海女はしたしき

五 白子附近

磯布いそめ焼くけむりなびかひ高塚の山をかくせりなびくけむりは

六 清澄山

谷へだつ向つ尾の上に夕日さし照りぐはしもよそこの杉群すぎむら
向つ尾にいささか明る夕づく日坂の隈みにわが立ちつくす
この坂ゆ谷間の家の夕庭に子ら群るる見えてこゑはきこえず
山坂をおりゆく車の音きこゆ行きあひてより久しとおもふに
山坂ゆ見えてきたれるいただきの木の間の家に今宵かも寝む

夕さりてほのぼのくろき山並もいまは押れたり飯食はむとす

山の端にいまやかたむく八日の月風呂にかがめば窓ごしに見ゆ

山の上の宵あさくなく蟬いとらをきき風呂に浸りて足もむわれは

風呂ぬちに足もみなながらかへりみて友と親しき言葉をかはす

五目並べいまはをへつも夕月は隠りて既にいくときならむ

箱根山

十月十九日、修学旅行として、中学生と共に箱根山に行
った。御殿場から仙石原に越える長尾峠の途上で、一人
の生徒に病まれ、その看護の為おびただしく列に遅れた

腹いたむ子を看護みどりつつ山坂にわが立ち居れば霧おろし来たる

山坂にいまは二人となりにけり腹いたむ子を守りてわが行く

ほうたんの紅き練葉ねりやくを子にやりて坂の平たひらに息づきにけり

子にやりていささか指にのこりたる紅き練葉をわが嘗めにけり

山腹を腹いたむ子とゆきながらうつし身われはうたうたひ居り

霧ぬちにさびしきことはおもはねどいつか黙りて居たりけるかも

その夜箱根の堂ヶ島に泊った。恰度近くの五段の宿屋に齊藤茂吉氏
が静養に来て居られたので、夜かなり遅く、生徒の木曾馬吉と共に
訪ねて、歓談時を久しうした

提灯をともしてい行く石のみち茂吉に會ふと息きらしいそぐ

提灯をうちかざし見るたぎつ瀬に夜ぶかくめぐる水車ひとつ
わが前に坐る茂吉と馬吉をめづらしみ見る山の夜ふけに
玉くしげ箱根の山に十日餘り茂吉こもれど歌はならずとふ
夜ふかく蛇骨の溪の橋の上に三人だまりて耳すまし居り
山の上にこごらふ雲のおのづからこぼす時雨にぬれてうれしも

櫛木立

私の巢鴨の寓居のあたりには沢山の櫛の木がある。冬になると、その葉を振ひおとした小枝は、実にたまらないほどの優雅な繊細な姿を呈してくる

霜霧ふ櫛木立の向つべゆ日はのぼるらし空のあかるさ
露霜の繁しじにふればこの朝け霧らひしるしも櫛木立は
朝にけにつとめをもちていそげども目觸らふものか道の櫛は
はつはつに櫛の梢こぬれうち霧らし時雨はとほる天の時雨は
夕さればけやきの細き枝を透き光りそめくる一つ星あはれ
下かげは暮れいそぎつつけやき木の上枝ほつえしみ立つ空の明りに
事しげきおもひに堪へてゆふべ見る櫛の枝はしづかなるかも
野に来つつ心おのづとへりくだり櫛木立の夕明りみる
しまらくは櫛がおとす影をふみうつむき歩む月夜のみちを

立ち向ふ丘の櫛の幹立もどたちの辺にかたむきて月の大いなる
西空に月は大きくかたむきて幹立しるし丘のけやきは
冬空のたかきをあふぐ眼こやに觸りけやきの枝はこまかなるかも
常緑樹にまじりて生ふるけやきの木枝はひろがる繁葉が上に

大正七年

田園冬情

この一月四歳の長女を連れて郷家に帰った。今迄母の許を離れた事のない長女は、私にのみ縫るのでゆつくりできなかつたが、それでも田舎の冬は私には殊更楽しかつた

つばらかに言は申さね父母の前に坐りて茶をすするわれは

子を抱きてゐるりべに寄る夜のくだち言葉すくなくなりけるかも

ははそはの母が敷きたる小夜床に子を抱き寝る今宵たぬしも

ふるさとの家の交譲木あさなきな凋むを見れば心清しも

雪

おのづからねむり覚めたる朝床に雪ふれりとふ人のこゑきく

ひと夜さに降りおける雪をいまは見てこころ幼くつぶやきにけり

起き出でて今朝はをとなしきわが子どもわれと並びて雪を見るかも

やはらかき雪踏みとほるあのと音をききふかきおもひに觸りたりにけり

わが室にかへり来りて坐りたり庭の雪さへいまは消ぬるを

浅春雑歌

一朝霜

霜しろき杉の木の間路の上を子を歩ませてゆきかそけかり

ここまでは日光とどかぬ木下道身を愛しみつつ霜ふみあゆむ

鉾杉のかげ地にのこる霜白し日向をとめて子を歩ませぬ

二 紀元節

畏こかるけふの吉き日のくもりぞら厳しくは見て道をいそぎぬ

人われもけふの吉き日をことほぐと庭につどへば雪こぼれきぬ

畏こきやけふの吉き日に雪こぼす空をあふぎたりわれ人とともに

三 埃空

埃空いまは眼につきいらただし障子をしめてひとり坐らむ

外の面には空を濁らすほこりかぜ人恋ほしさを堪へて坐りつ

ほこり空見つつ堪へめやいはけなく人をまもりて室にこもれば

四 庭前小景

わが庭の松も檜もよべの雨に濡れとほりたりさびしくはなし

庭におりて垣根のひまゆ川浪のかがよふ見れば春さりにけり

庭の面にはづかにのこる夕明りちりたまる梅の花は白しも

日光のさして風に吹きたわむ庭木の枝つくづく見れば芽をふきてゐる

いつしかと芽のほぐれたる木を見つつわれの嘆きは浅からなくに

春の日の塀そとにする人ごゑにこころゆらぎてくるしきものを

五 春の夜

小夜ふけの坂の長手にわが歩みおそしとなけど人おもひ居つ

思ひ屈し外にいでたれば白雲の夜空をひくく流れたり見ゆ

この日頃言にいださぬさびしきも全く忘れて春の夜をもどる

櫻 草

四月十八日、松村君と連れだって、荒川沿岸の志村といふところに桜草を見に行った。ここはあまり人の踏み荒さな、閑寂な原で、非常に気持よかつた

川曲のまばら小竹藪春の日のしみみに照りさくら草咲けり

さくら草摘ままく入りし小竹藪の小竹の細きに手をやりてみつ

手ふるればすなはちたわむ篠竹に心を寄せてさびしきものを

小竹やぶの晝の明るさ堪へがたみ手握りて立つその細小竹を

小竹藪に腰をおろせばうら安し足さきの辺のさくら草の花

小竹やぶに腰をおろしてしみじみと目かげしあふぐ日の在りどころ

この藪の向うに川のありと知りひそかに居れば水の音きこゆ

途上の噴井

田の畔の噴井の水のときをりに光りなびくは風ふくならむ

田の畔の噴井をみればまんまんと湛へあふるる水田しおもほゆ

五月野

五月中旬、池袋駅を起点とする東上鉄道によって、終点の坂戸町から三里程の吉見百穴に一日の遠足を試みた

一 吉見百穴途上

昨日の夜に雪や降りけむ五月野ゆすがしくも見るましろき富士を

五月野の岡をいくつか越えきたりむらがり立てる人の家を見つ

田のなかを道通へればうつつなく真日をあふぎていそぎけるかも

わが額の汗ばむ程はいそぎ来て濁れる川をいまし渡るも

二 吉見百穴丘上

まぶしけど日向にあればおぼほしきこころは失せぬ岩山の上に

この岡につづく山田のほそみちを来る人見れば待ちがたきかも

この岡にわが立ち居ればかげり来て日光うつらふ五月の小野を

三 薄暮車中

窓のそとの闇の水田に燃えつぐ火おもひふかめてのび上り見つ

木更津行

六月末、下總木更津の社友金坂、堤両君に招かれて同地に遊んだ

一 汽車中

大麥はすでに刈られしなだら丘梅雨ふかくして土の黒しも

なだら丘なだりきはまるその間ゆ梅雨ぐもる日の海はづか見ゆ

わが汽車はいま岡のべを馳するらし青葉に風のさやげるきこゆ

早苗田の水のあきどにおり立ちていやめづらしきその水鳥を

風立てば早苗田あよむ水鳥の脚のはこびのうつつなきかも

二 夏宵小宴

汐かぜのしめりけうとき室ぬちに語りて居れば身は汗ばめり

ひがし空ほの明るめばこころとめ夜かぜにさやぐ庭樹を見るも

夜おそく月のぼりくるたまゆらを心しをたれ庭の面をみぬ

三 夜の渚

小夜ふかくいまだ戸をささぬ店ありて灯はさしぬ汐くさき路に

宿にかへりしづかにも寝む夜の海の潮のはやさ人は人にかたらじ

四 街上散步

晝闌けて日ざしまばゆき街の上^へに人の見えねばわれもいそぎぬ

ひたむきに汐かぜとほる街の上を行きすぎかねて友を見かへる
友と来て汐風くさき晝渚言葉すくなきさびしさに居り

炎熱

朝よりの日ざし明るき庭に向ひけふも暑しとつぶやきにけり

人とゐて言ひつぐことばもたなくに汗をふきつつ扇をつかふ

埃たつ街の家かげとめ来つつわが思ふことのとらへがたきかも

塀そとに人氣たえたるひる一時ねむさこらへて机にむかふ

晝寝よりいまはさめたりこの日ごろ消息書かぬさびしきわくも

夕はやくをちこちに點る家の灯をこの原に来て見まもるわれは

月讀の光あふげば汗あえてつぶやきしこともいまは忘れぬ

夜のくだち耳につきなす鳥のこゑうつつにききていままかも寝む

夏日帰省

八月上旬、簡閑點呼をうくる為め、今年四歳になる長女を連れて下野の郷里に帰省した。その途上の歌

一 上野停車場

晝あつき待合室に人とゐてかはす言葉も少なきかいまは

汗あえて待合室にわが居れば慌ただしくも入りくる人を

足音の間なくしすれば子を連れて待合室にゐる身はさみし

二 汽車中

言別きて家離り来しをさな子を日ざしにとほき窓によらせたり

をさな子が吾にいひかくる片言もききのがしがたし家離りくれば

蓮田に葉がくり咲ける白蓮の花とぼしけば吾子は見ざらむ

汽車ぬちに人のいきれをまがなしみ見上ぐる空は雲おほくゐる

松山の松のこずゑをおし傾け吹き通る風は窓にさやりつ

三 ふるさとみち

立ちとまり我を見あぐる幼な子を賺し歩ます路は長しも

をさな子になぐさめ言をいひながらおのづからさみし木蔭の路に

古里の家ちかづきぬいそぎ啼く蛸のこゑをさびしとはきけ

日光山中雑歌

大正七年八月九日、松村、小田切の両君と共に、日光中禅寺の山奥にある湯元温泉に一日の清遊を試みた

一 戦場ヶ原

この原ゆただにそばたつ男体の山をかしこみ草に坐てあふぐ

男体の山を高めか天わたる雲はなづさふその山腹に

雲の行き著くしあれや男体の山のかげりのややに動く見ゆ

この原をいかこみ立てる群山に目をうつしついまはさみしき

群山のひくきところ路求めて奥の金山に人は通ふとふ

二 湯元温泉

湖の向うの山の山窪は日にかぎろひてうちけぶり見ゆ

眼なかひに青垣山の迫り来て湖盡くるところ湯は湧きて居り

真玉なし湯の湧きいづる水口にちか寄せてみる顔はあつしも

赤羅ひく晝なりければ外湯には人おほく居ず湯の香こもるも

鉄管にこごりて白き湯の華をはがしつ居れば汗かきにけり

汗あえて搔きはがしたる湯の華を手にとりもてばさびしくなりぬ

湯の宿の廊下はながし通よりわがのぞき見る晝し深しも

三 中禅寺湖畔山中

男体の山の清水を家に引き朝にけに飲む人の羨しも

山なかの物売る家に夕されば焼酎を買ふと人の来にけり

大正七年

初秋

ひむがしに雲のかがよひ著ければ人の恋ふしき今朝の寢覚かも
朝日子はすでに高からし家のすみになきほそりゆくこほろぎのこゑ
庭の面のあつき日ざしも家ぬちにはふかくとどかず秋さりにけり
厨には晝もなきゐる虫のこゑこころにとめてきけば高しも
藤豆の蔓からまりてたわみ伏すすきはふとき穂をはらみたり
おほほしくゆふべ明るむ庭の面にひときは目立つ紅芙蓉の花
夕まけて埃おさまる街の上に真向まっかうに射す日はあつからず
雨やみて雲ぎれしたる西空の蒼めるままに暮るとするか

二子山

二子山ふもと木原の木を疎あらみ透きては見ゆる山はあかるし
二子山ふもと木原にまじり生ふる漆ははやくもみぢせりけり
外套の襟を立てたり二子やまいまは見えざる谿間をいゆく
秋の水い照りあまねき二子山すすき光ればうつつなしわれは
上二子の山の麓をめぐりゆけば現はれきたる下二子の山

旦暮

山腹のそこにもここにも熔岩の日に照りてくるき二子山あはれ

草群にかくれあへざる熔岩は山のなだりに日にくるみ見ゆ

坂の上ゆわが見かへれば二子やま眼交に立ちて觸らまほしき

鹿野山

この駅におりたる人の乏しけば友を顧みしたしき湧くも

停車場をはなれて直ぐに刈小田の中道ゆけば心すがしも

峡ゆけば刈小田にゐてわが方を見まもる牛にこころは和ぎぬ

山峡は夕づくはやし刈小田に稻扱く音のいまだきこゆる

山坂をのぼりつくして見る谿はふかからねども夕霧立てり

朝土間に流れ入り来る山霧の眼に立つなべに寂しくぞ居る

山の上ゆ見ればあかるきはざまみち昨宵のぼりたる道にかあるらし

山の上の宿の障子のてりかげり心おのづと敏くなり来る

大正八年

身边近事

十二月某日、郷國の父より米俵を送られて

かへり来ればはや夕づける玄関に米俵ひとつおかれてありけり

東京の生活つらからむと郷國の父がおくり越したる米俵ぞこれ

郷國の父がかたくかけたる米俵の繩の結びは解きがてなくに

夕土間に米の俵をほどきつつさびしくなりて郷國おもひ居り

父のもと離れてひさしく東京に住みたりと思ふこの夕べかも

米櫃に米あけかへてしまらくはつぶらに白き米を見てゐぬ

俵より櫃にうつせばこぼれ落つる米はたたみの上に真白き

父の手に編まれたりけむ米俵いまこそは燃せ夕かげる庭に

この俵編ましましけむふる里の父をしぞおもふ俵燃しつつ

夕庭に俵燃しつつゆれなびく火村へだてて妻にも言へり

藁灰を掻きあつむればたまたまに出で来る米はみな焦げて居る

藁灰を火鉢に入れてこころ美し今宵あきらけき明星見たり

今年二歳になる長子生憎足を腫らして

あなうら
蹠を腫らしし吾子はちさき足爪だてあよむ狭き室ぬちを

おさな子を懐ふかくかきいだき腫れたる足をなでさすりやる
ましろき繙帯まけるおのが足をつくづくと見る幼な子あはれ
繙帯は白かりければ幼な子を膝の上のせて足を撫でつも
繙帯に足つつみたるおさな子はただに坐り居おもちやもて遊ぶ

俊一に与ふ 赤羽工兵大隊に居る宇佐美君に

さむき野に練兵しつつをりをりは真日をあふぎてこころ惚ほくらむ

常ならばおほよそに見る天日てんじつをこころ傾けあふぐ日もあらむ

うつし身の冷えきはまれば大空にかかる天日をただに頼まむ

しみじみと身体冷えては日を讚へし遠世の人の心とならむ

世の中のことは忘れてもつばらに練兵するときけばれうしき

父母にのらへかねたるくるしさを下にもちつつ練兵やすらむ

兵舎に居て心にあまることあらば手帳の端に書きつけておけ

軍服を脱ぎたる汝とうちむかひ語りあふ日のはやも疾く来ね

外濠 二月一五日、三好先生の葬儀に列する途上にて

外濠の向ひの土手を水際みきはまで生ふる常盤木は雪かかぶれり
葬式にゆくとわが乗る外濠の電車より見ればあそぶかもめを
葬式にゆくとはおもへ心せかずあそぶ鷗を見てゐるわれか
いそがしく電車をおりて人はとほる濠ばたちかく鷗あそべり
外濠に鷗あそべり幾台の電車やりすごしわれは見てゐる
外濠にあそぶ鷗とやや離れ一羽ゐる鴨を見つけてさびしき

○

降る雪のいまは止みつつ斑らにも庭石のもとにのこれるさむし
雨樋を雪とけおつる音しげし書ふみよみ疲れ晝日中なる

三浦半島

浦賀港

港内に泊はててを揺るる船ゆ見れば岸の家並に眼はさだまらず
雨まじり風ふきあつる磯山のさくらふふめり今日のさびしき
外海またに再も出づるとわが船の錨まき上ぐる音ききて寝し

下浦

船の揺れ大きかりければ荒磯ありそべ辺の家はひととき傾きて見ゆ

三崎

島陰に船は入りつつ沖見れば白木綿しらゆふはな花と浪たちさわぐ

島山の木々をまぢかく見し時に浪のうねりはのろくなりたり

晝の間にわれらをのせて来し船は灯をかかげたり夕風ぎの海に

打ちむかふ城ヶ島山たひらかに畑のあをきは麦やつくれる

島山の廻轉燈はこの迫戸せとに夜をさやぐ浪を時をり照らしつ

島山の迫戸に向きたる浜辺には家ならび立ちて朝日さしたり

小網代湾

入海のここにし盡くる一村ひとつむらの家の背戸にはあかき蛸壺

わが舟の舳先はむかふ山鼻に松にまじれる山ぎくら咲けり

潮合しほあひに群れとぶ鳥はくろきから入海わたす舟よりわが見つ

入海にともしくは注ぐ田の水をまたぐとすればその音きこゆ

油壺附近

入り海がここまですづく山峽の小田のま晝を蛙なき居る

この先は入り海ならし新芽立つ楢山越えて帆檣の見ゆ

荒磯辺にわが行く前を飛びうつるこの鶴鴒は大きかりけり

葉山附近

ゆふべの海音をしづめたり砂畑に人は豌豆の実をもぎ急ぐ

母なき家

ふるさとにて

この家にかへり来らばかならずや母に會はむとたのみつるものを

帰り来れば母なき家は事を繁み父は水田しろに代掻きいます

さびしさをひとりに堪へて晝小田に代掻きいます父にし泣かゆ

一株の菖蒲のこして田のくろの泥塗りたるは父にかもあらむ

亡き母もともに蒔きけん畠の麻いまは伸びつつ人の身丈せをかくす

うかららと墓参りしてかへり来れば大き家やぬちに父ひとり待てり

寂しさはまぎるる術なし常日ごろ言葉ゆふげ少なき父と知りつつ

いくたびか母あらぬ嘆きするものぞ夕餐ゆふげの膳に一人缺けたり

精霊棚たまだなにうつしまゐらす亡き母の位牌はいまだ真白くありけり

精霊棚に夕べをともる灯に照りて母の位牌のつばらにも見ゆ
ちちのみの父に別れはいひながらおのれ母なき嘆きせりけり

望郷

いまはひとりの父によくせよと弟に手紙書きつつ筆洩りたり
かくばかりわが恋ひわたる故里の家には母のましまさぬかも
事しげく世には生きつつこの日ごろ母なき家のましてしめ偲しのばゆ
ときをりは生命さびしくおもひ至るこの世に生きていまや母なし
故里に手紙は書けどつつしみて亡き母の上に言ひ及ぼさず

印旛沼

わが下る坂の隈回くまみに立つ木々の向う明るし沼にかもあらむ
沼尻ゆ流るる水は橋下におもくよどみて光なきかも
沼の辺をゆき通ふ道は平らにして眼交の崖に紫陽花咲けり
沼べりのここらの家は土間ちかく噴井戸湧きて家やぬち明るし
土手下の芦生のなかをゆく水は梅雨曇りふかき沼につづけり
岸ちかく道通へれば沼の上をこ榜こぎちがふ舟に人語るきこゆ

沼の上を舟榜こぎてゆく人のうごき現しくは見え水に光なき
この岡の麓の小田は沼を近み沼の水ひきて苗を植ゑたり

塩原の山

途上―夜道

東ひんがしにかがやきしるき明星あかほしのうするるなべに霧たつ見ゆ
野づらには霧立ちくらし夜深きに明星のひかり全くかくれぬ
足疾めて夜道ゆきつつみかへれば生徒の群はくろくうごき来る
山ちかくわが歩みきて驚きぬ霧はれて見ゆる目のまへの山
朝霧のはるるすなはち眼の前にぬれてかがやく山をさびしむ

山中

もみぢせる山のなだりにあらわれて落ちくだる水は白かりしかも
岩の間を激ちおち来る山水の淵に湛へて大きくうねる
雲切れして東の間あかる向つ尾のもみづる木々はおのおのも照る
ゆく道のきはまるやがて眼の前に展く谿間は紅葉あかしも
山川の清き瀬みればこの日頃せはしく生くる空しさを知る

旅籠屋の背戸よりつづく山腹の級畑しなばたみれば人の世愛かなし

宿を出でてひとり来てみる山峽の棚田の稲ははや黄ばみたり

旅舎

夜くだちてひとりおりゆく湯殿には湯をつかふ音のさみしくきこゆる
稍々に身体ぬくもる寂しさを泳へて浸る夜の湯槽に

わがこころたよるものなし山の湯の谿間の空の朝焼けの色

早朝帰路

温泉ゆの村を朝立ちくればゆくゆくもひくまる山に日光ひがあたり居り

みんなみに展くる谿間のひとところ木々まだ青く朝日さしたり

山並に朝日子さすをいつくしみ峽路を来れば谿ひらけ見ゆ

大正九年

上総の海

大東岬

外海にむかふ傾斜なぞへは岩くえて海のひかりをい照りかへすも

御宿

汽車おりて人等むきむき歩み去れり砂山ごしに海は見ゆるを
砂丘にほてりのこりて寂しきにあかき夕日をわが見たりけり

大原

明らけく夜は晴れながら空と水と相合ふ辺には星をらずけり

磯岩にすずめ飛び移りひそみたりわが眼はおよぶその草の間に

よく見れば磯岩の上の草の間にあそぶすずめは一二羽ならず

日光ひのあたる磯岩の上は草を疎みあそぶ雀をかくし餘せり

昨宵よべに来てけきは離れかゆくこの浜にてりみつる日光ひを見つおしつ愛めり

八幡岬

この岬は突端はなにむかひてたかまれり歩みつぐほどに海ひろく見ゆ
この岬にいくつか通る細径のひとつにあつまるその突端にゆきて

ほそぼそと通ふほそみち行きつくし岬の突端に出でたりわれは
深海に急になだるる岬に立ちいっばいにあたる日光をさびしむも
弓なりにつづく砂浜見放くるや太東の岬に盡きたりにけり

御宿

砂がちのこの島に生ふる麥は伸び細くして砂に支へられつ
砂丘の風除粗朶を垣とせる冬菜の畑を見らくさびしも
夕明りはつはつのこる砂浜に玉藻つぶし居り一人と知りつつ

答案調べ

いっしんに書きたるならむ鉛筆の走り直ぐなるに眼をこらす
日ごろわが教へしことが答案によく書いてありこれのうれしき
ひと目みてよしとおもへる答案をよく見返してこころ豊けし
答案を調ぶるペンを時にとめ生徒の顔をおもひうかべつ
あまりにあやまりおほき答案を見し現らめて寂しくなれり
出来わろき答案見つつ昂ぶれるこころに觸りてひそかに恐れつ
出来わろき答案見つつ人の子を教ふる難きなげきをわがしつ

夜更ちて答案しらべまだ済まずペンもつ指の冷えて居にけり

筑波山 五月十三日、学校の生徒と筑波山に登る

山頂ゆ霧ちぎれ飛ぶ山裾の小松がなかにうぐひすのなく
道のべにはこび出したる大石のずりたるあとは松山につづく
小筑波の山原なだり運び出せしこの大きい石に雨ふれるかも
山霧のふき霽るる時わが立つは頂の岩と知りて寂しも
霧はれて真日さし来る頂の雑木若葉はぬれて光れり
眼の前の木原明るむ時の間を空にちひさき日を見たりけり
筑波嶺を男峯女峯と距てたる尾根を吹き越す霧の脚はやし
山腹ゆ頂かけて生ふる木々の若葉もりあがる空に向ひて
山腹の深山ざくらは時すぎて若葉のなかに花菱びたり
ふもと辺の赤松林ひとところ傾ぎ生ふれか赤き幹見ゆ
筑波嶺に葦穂加波山うちつづき二つに分つ常陸国原
この見ゆる山のかぎりは筑波嶺の尾根につづける山ならぬなし
頂ゆ立ちて見放くる国原の果を流れて光る河あり

雨雲のおり畳まれる西空にまぎれて光る水は利根かも

岩の秀に立ちて見おろす廣沼狭沼あらはなるから見つつ寂しき

国原に深く入りこむ大湖霞が浦は見のままに見ゆ

わが乗れる汽車の退辺に遠ざかり小筑波嶺呂はいやきやに見ゆ

低山を前にして見れば筑波の山今日のぼり来しと思ほへなく

従弟を悼む

白木の棺のなかに汝を見むとかへり来たりし我にはあらぬ

今生にふたたびは見ぬ死顔を瞻りはかねて棺に蓋させぬ

このなかに従弟は居ると思ひつつ棺にむかひ面伏せにけり

この日頃われにまさりて身長たけのびしあたら男の子を死なし果てしか

離り住みて言交すことすくなかりし従弟と思へばまして嘆かる

たのめなきいのちと思へこれの世に生けらくわれの嘆きはするも

これの世に寄するいのちは苦しくとも生きてしをらば共に堪へましを

伯母の語るをききて

東京ゆおくり越したる種物の封も切らずて死にたりといふか

偶感

これの世に直く生きむと人皆が乞ひ禱むほどの政を布け

うちつけに苦しき言はぬ国民の心悉皆知り政を布け

米の値は高くともよしこの国に生くる誇りをわれに有たしめ

働きて家支へかぬる貧しきに人は何時まで堪へむと思ふや

富むものは貪り飽かず貧しきはこころ尖れりわが生を寂しむ

貧しさをひとり楽しみしいにしへの聖人の道は人踏まずけり

恒のこころ有ち難しとぞ古への人も歎きけりまづしさのため

大正十年

ふるさと

遊ぶ日のともしき我や故里の家にかへりておもふことなし

この家にかへりくること稀になりて珍らしみ見る背戸の杉山

連れ帰りし吾子珍らしみ遊びに来る村の子供にしたしきおぼゆ

遊びにくる子供の頬にすこやけき血潮みなぎり見れど飽かぬかも

奥の間に子を寝かしめてゐろりべに父と語る夜は更けずもあらなむ

小夜床にめぎめてきくやその声の室内やぬちにひびく霜夜くだけ

真夜中をたまたまめぎめ故里の吾家わがへと知りてまた眠るかも

その葉みな霜に摧けしあぢさゐの茎立の芽は青みそめたり

柚子ゆずの樹の霜除笹の葉は萎えてたまたま見ゆる柚子の葉の光

霜ぎらふ林のなかに火を焚きて吾子をしみじみ温もらせつも

ふるさとに吾子を率みてきて心うらたぬ樂し弟の子とあそぶを見れば

夜となればさすがに遊び疲れたる吾子は寄り来もわが膝の辺に

ゐろりべに父と語りてわが生活くらしうた訴へ申さむ心それたり

家人がすでに起きたる声のして今朝の寢覚めの寂しくはあらぬ

雑詠

日本地図に題す

壁の上に日本の地図をかかげおきて寂しきときは立ちて見にゆく

地図の上を眼もてつたへば青山に青山並び見らく遙けき

深山の峽つらぬきて人間がつけたる道は見らく寂しき

峽の奥荒磯ありその辺にも家居して人住めるかもこれの國內くぬちに

この國をいにしへ人も吉よしといひわれも然思ふ然にあらじか

いづべにも土はあらめどこの國のかぐるき土のわけて親しも

見が欲しき國さにはあれど住むべくはおのれ生れし此の國をわれは

武蔵野遊行

武蔵野の畑のなぞへの一つ松退辺そくへに富士をもちて高しも

背後そがひにし富士の山もつ群山の秀つ嶺の巖に雪光りをり

河原より高まりつづく草土手の向うの家は屋根のほか見えず

川下の畑に舞ひ立つ土埃日光ひに照らされて明るみて見ゆ

はなあはせ（机上戯作）

三十路すぎて何すといふにあらねども花合せしつっ生けらく思ほゆ
世に生きて酒のむわぎをわれ知らずいとまある時は花ひきて遊ぶ

人の世の憂ひ喜びこのなかにこもると言はば笑はれやせむ

以下窪田先生に呈す

先生の花ひく見れば面白し先生の歌のおもほゆらくに

わが勝たば人は負くらむわれ負けて人の喜ぶ見るに如かずけり

花ひけばいねての後もまなかひに花札うかぶ負けし時はなほ

水郷早春

潮来十六島

眼の前の真菰の緑清しみと舟の舳先を突き入れにけり

つぎつぎと舟の後より起きかへる真菰の緑滴たらむとす

牛が鋤く出島の小田の堅土のかぐるき土は舟の上ゆ見る

いちにちの田たしごと為事をへてかへり行く農夫の舟は妻が漕ぎけり

與田の浦に舟漕ぎ入れば舩ふなべりに立ちさやく波の音の寒しも

学校へ行き来くとしてはこの橋をかならず渡る子等の愛かなしも

旦 暮

加藤洲の堀江の水にひとところ日光ひかりのさす見れば夕ゆふべ近しも

日にふたたび堀きに潮しくる水を汲みこころの人は米研ぐといふ

潮来町

あはあはと夕日さしたる大き江を漕ぎよこぎりてわが舟泊てつ

家裏の堀くまみの隈回くまみに舟寄せて潮来の町におり立ちにけり

眼交の河岸に凝りたる朝靄あさぎりのながれはじめて天明てんあけにけり

霞ヶ浦

あかときを舳へに立ち見れば大空にまだ明けきらぬ筑波山浮けり

あさぞらに筑波の山を見定めてわが舟はゆく湖の上を

浪の上につらなり浮ぶ鳩どりのちさきあたまは見らく愛しも

志度崎

渚まなさきゆくわが眼先まなさきにわづらはし日光ひかりの中ぶとを蚶はたけの群れとぶ

まなさきに蚶はたけむれとびて春あさき渚の道を行き疲れたり

折本芳衛君宅

裏木戸を出づれば見ゆる湖は冬田を越えて光りたるかも

わが舟が経めぐりて来し芦の洲はへだたる並なべに崎なせり見ゆ

潮来拂晓

古町の家並どよもしなくかけ鶏のこゑは土よりおこりけるかも
水の辺は夜明くるはやし軒並にこもごもおこる鶏のこゑ
水の辺に来ればほのぼの朝明けてにはとりのこゑいまは聞えず
渡し場の人のねむりや深からし電燈ひとつもりてあるも
大河は水張りきりてあかときの光あらぬ空を映したりけり

拂晓舟行

土手にさす朝日のひかりしみらなり船ぬちにあてなぐさめ難き
枝堀に舟やる人はかれがれのあらら芦生を透きて見えけり

志度崎(二)

この磯へさきに舳先あきを向けて来る船を見し現あきらめて待ちをりわれは

土 牢 護良親王を懐ふ

明日知らぬいのちまもりて皇子すめみこがこもりしむろを今に見るかも
このむろにいのちおと殞ししすめみこは今のわれより若かりしかも
日光ひのささぬ岩屋の奥にすめみこは逸はやる心をおさへかねけむ

すめみこは父みかどの帝の統べたまふ世にかへさなと思ひ立ちにしを

こころざし成ると成らぬとよしゑやし思ひつめたる皇子尊と

たまきはる命をかけてこれの世を頼みたりけむ皇子尊と

雄心をやらむ術なみ幾夜さを寝ずて明しけむ皇子尊と

牟呂の上の木立にさやぐこがらしを堪へてききけむ皇子尊と

とりよるふ鎌倉山に樟の葉のわけて輝く夏さりにけり

御旗山みはたやまに生ふる若松新芽立ち仰ぐわが眼に山明るむも

鎌倉の低山しなばたかげの級畑しなばたに麦をつくればその穂瘠せたり

鹿島灘

今朝ほどは家に在りしと思ふだに遥かなるかなや海にむかへば

荒磯辺にひとり坐りておもふこと素直なるからに涙ぐましも

鹿島灘の風をいたみか砂山に萌えて青きは浜苦菜はまにがなのみ

砂山に根這ひもとほる浜苦菜萌えて目に立つ夏さりにけり

寄る浪は高からねども磯ちかく相衝ち碎け乱れつつ寄る

たちかへり浪は見たれど浜つづき砂山かげの家を羨しむ

浜づたひつづき起き伏す砂山の遠きは隠る雨雲のなかに
箒の上に割きて乾したるうろくづの白ひさびしも日は曇りつつ

潮来出島

旃檀の花をたかだかとあふぎ見てわが舟行るも狭き堀江を
濠の上をおほひて茂る旃檀の花ほのかなりあふぎ見すれば
梅雨霽れて出島の空の廣みかも光をふふむ雲多みかも
與田の浦を漕ぎたみ行けば思はぬに帆を傾けて大き舟きたる
與田の浦がもてる細江は日にてりてさぎなみばかり光りけるかも
かしましく鳴く行々子のこゑ宛めて葦の葉交にその小鳥見つ
水の辺のこの小高みを羨しみと人が築けむ墓どころかこれは
水の辺に築ける墓を近く見て人の生命を寂しくぞおもふ

磐梯山

若松より喜多方への途上

磐梯は孤つ山ながら裾を廣みここだ小村をもちて畏し

磐梯の山の背向に立てる白雲盛り上り 愈 光る五百重白雲(旋頭歌)

山麓にて

眼交に立ちはだかれる磐梯の山の尖りは雲に入りけり
磐梯の山いただきを時にかくし時にはなれてあそぶ雲かも
磐梯の山のまうへに凝りつつぞ入り日を懐くひとむらの雲
磐梯の山のまうへに居る雲のささべり紅し入り日を懐きて
一村が底にうもれてありといふ磐梯の湖を畏みわが見し

北口登山

熔岩の壊えし裂目に根を張りて立ちの短かき赤松くぬぎ
熔岩原ふみなづみ来つ思はぬにわが面向う磐梯の山
磐梯の山の岩間に湧くみ湯のかくはさびしき音を立つるものか
削ぎ立てる岩山の上は雲垂れてそことし思ふ頂を見ず
足もとの岩間に沸る湯の音のほがらなるきけば山深く来し
麓べゆ吹き上ぐる霧のちぎれ飛び眼の前をゆくは寂しかりけり

秋元湖俯瞰

ここにして隈なく見ゆる山の湖に正しく浮けり一つ岩島

そのかみは村の高処にありけらし見えて羨しき湖の上の島

夏さりて草茂れれや湖の上にかしらを見せて青き岩島

湖の面をつばらに見れば見えきたるちさき岩島は二つ三つならず

波立たば隠れやすべき岩島のはららに見えて朝しづかなり

一村は湖の底ひに埋もれありとふその湖の青き光を目陰して見し(旋頭歌)

所懐

この頃の日本の歩み急調子なりいづこを指して行くにかあらむ

みづからに都合よきとき神かんながらの國柄を説く人々を唾棄す

この國をただに頼みて在り経れば憤ることのなしといはなくに

年まねく頼みたりけるこの國をいまだも頼む吾命わぎのちを堵かけて

軍艦いくさふねあまた造りてよしゑやし大御宝を飢ゑしむなゆめ

読書

善し悪しは我に分かねど読みもてゆくカルル・マルクスの書ふみの親しき

外国とつくにのカルル・マルクスが書きし書ふみ讀み親しみて我の苦しき

水郷初冬

与田の浦

日のさしてひとところ明る洲の葦を眼交に見て舟行やるわれは

與田の浦の岸に並み生ふる枯葦に西日うすれて風立ちそめぬ

西空におしひろごれる夕雲のさむき影おとす刈小田の上に

さむざむと入江におつるくろ雲のかげりのなかに舟漕ぎ入りぬ

冬ざれの出島の小田をほそぼそと行き通る濠みくさは水草埋めたり

加藤洲

家裏のをぐらき濠の向うには刈田ひらけて冬の日させり

新島村

打ちわたす冬田のなかの野づかさに四五本の松の照りのさみしき

横利根の岸の葦原刈りそけて拓ひらきし畑は荒土の畑

榛名山

谷間あひに低く並なみ立つから松こぬれの梢けぶりて日はまだささぬ

相馬山が朝ひく影は原を越えて榛名の嶺呂の裾におよべり

原の上にくろぐろひける山影の日のぼる並べに短かくなりぬ

湖のべの草山かげの家居には障子あかるく閑してありけり

草山の裾曲をいゆく湖ぞひみち尾根をのぼりて見えなくなりぬ

大正十一年

常陸北浦

田為事にゆく舟ならし朝づく日かがよふ湖に散ぎて見ゆ

入海を隔てて見ればたたなはる丘の青葉のいろ深けにけり

湖の上の夜空に低くあらはれて月の出ごろを明る雲かも

朝されば出洲のあなたに見えきたる香取の森のなか親しき

稀にある今朝のねぎめの静かさや日先が照る湖に向きて坐るも

武州御岳道

山葵田のわさび掘られて敷き並めし石は乾くも秋の日ざしに

山葵田の石のおもては乾けども間がくりゆく水の音さやけし

真向ひの山の杉生に明りある日のいろ見れば夕べにちかし

いづも

父われに夜は抱かれてねむる子のひとり遊ぶぞ愛しかりける

こころよくはこぶ筆かもわがそばに遊ぶ子どもは忘れてありけり

をさな子をいたく叱りて後悔ゆるころはひとり守りて行かむ
まのあたりいさかふ子らを見て居つつ裁きかねたる父かも我は
子どもらと遊ぶひまなきみづからのくらしを時に寂しくぞおもふ
ともどもに遊びてやらばいかばかり喜ぶらむをあはれ子どもよ
床に就けばただちに眠るをさな子の愛しきからに籠る夜ぞ多き
いさかひて弟を打つ上の子の克二はいまだ四歳よっに満たずも
子どもらにわづらはさるる為事をもち慰まぬ日のこのごろ続く

大正十二年

転宅

暫くはこの家借りて住まはなと心決きむれば寂しくありけり
妻子らと新しき家に移り来てなにか落ちぬ心をもてり
病み臥るをさな子もてば冬の日の温ぬくくさす日はただに嬉しき
移り住むこの新しき家さへやわが為め人の建てしにあらず

時事所懐

いささかの土地を劃りて自しがものと誇らふ人は呪はれてあれ
後の世に生れ来む人が住みよかる世の中としもなきすべむ術すべもが

雑詠

庭前早春

庭さきの槿の根かたの盛り土のしろく曝れつつ春ならむとす
せはしさに朝は見すごす庭の面をこの晝見れば土の乾ける
霜よべばしらいたくはたたぬ庭の面に昨宵よべのなごりの風ありにけり

庭の面に日光がさしくればたはやすく土の凍みとくる春さりにけり

八王子藤田園

裏山をどよもす風に揺すらるるくぬぎ雑木は芽ぶきそめたり

夕まけて畑にちり来る山ぎくらは畑には紅き新芽芍薬

ここに来て落居しならむつつましく言葉かはせるをとめ子のとも

あそぶ日の乏しき知らにをとめ子がたもとほる見ればこの岡よしも

片岡のふもとの家に時過ごし山の入日に会へりけるかも

身辺近事

愛し子が摘み来し芹を茹でて食べ今宵あやしく揺らぐこころか

山の手の家にかへると小夜ふけてたしかにききし蛙子の声

後備兵

四月二十日より五月十日迄勤務召集に応じて青山近衛歩
兵第四聯隊に入隊す

軍服を着ればすなはち心ばせ益良夫さびてさびしまれつも

軍服を着つつおのづと頬にのぼる苦き笑ひは人に見せまじ

しみじみとおのが生活を語りあふ後備兵はみな妻子をもてり

暇ありて同年兵とざれ言をいひあへる間はこころ暢びたり

ここに来ていまだ日は経ね世の中をうるさくも思ひ懐かしくも思ふ

銃器を愛著する兵卒のこころを

渡されし銃を握りてうつつなしこの銃身はゆめ錆びさせじ

銃こそは吾命なれと十年前言ひ聞かされし畏しこの銃

事しあらばこの銃とりてみいくきに出でたたむものか益良夫われは

剣佩けばからだ緊り来銃とれば心張りくる後備兵われも

関東地方大震災

地の上をたのめ難しとおもふ時人なるわれや人恋ひにけり

しかすがにたのめ難かる土をおきて頼むものなし悲しやも吾は

屋外に寝て

夕さればわが居る辺まで明り来る空の火照をおどろき臆る

生くるものつひに悲しも筵敷き麻蚊帳吊りて地の上に寝る

直土に筵を敷きて寝たればちさき地震すら腹に泌むかも

屋の外にいぬる今宵を蚊帳越しにま近く見えて照れる星かも

屋外に寝て嬉しきものかなかなかに眠らぬ子らは叱りかねつも

子どもらをとこ定めて寝させし蚊帳の裾辺に我は坐るも

東京の冬

おり立ちし駅の歩廊に屋根を無み都の空のひろきに驚く
屋根あらぬ駅の歩廊に冬日さし人は皆がら日向ぼこせり
人多に群れては行けど眼の前に常見し家のなきがさぶしさ
百日経てまだ片附かぬ焼跡の土の色よりさぶしきはなし
焼跡の堆土の上に登り立ち紙鳶あげてゐる童は獨り
子どもらは遊ぶところに事欠かず焼土の上に騒ぎ遊べる
路も狭に露店並めて賣るものは寒さを凌ぐ飲食の料
バラックに遊ぶ室無み子どもらは通に出でて今宵遊べる
冬の日は暮るるに早しバラックに灯ともる見れば心重しも
夜をこめてバラック店を建て急ぐ音ぞ聞ゆる暗き彼方ゆ
バラックにともるあかりのほのぼのと夜霧降り来る冬近づきぬ
下町の夜空に高く照る星のこの冬ばかり明らけく見ゆ

大正十三年

手賀沼 五月上旬、友の畫家なる友田治夫君と手賀沼に遊ぶ

遠く見て青葉がなかと思へりし村に入り来つこの明るさや
風荒るる沼に傍ぎ出で傍ぎなづむ人をよく見ればまだ子どもなり
吹く風に土の乾きやはやからし畔にあげたる泥は曝れつつ
向う岸の柳のかげに路あらし人さへ風に吹かれつつ行く
沼の面に騒立つ浪のうねり入り間なくし揺るる岸の蘆むら
昨日かも葭や刈りけむ田を越えてはつはつ見ゆる沼の明るさ
沼なかに向う岸より差出の枯草土手にさす日温とし

信州松原湖畔

けき聞きて今宵また聞く郭公はひとつ鳥ならしおなじ方になく
小倉山眺望

向ひ居て親しき山の名を問へり知らでもあらばありぬべきもの
ハヶ岳八つ尾連並めあを空にたたなはる見ればまこと高やま
頂をそことおもへど裾山よ眼にたどり見ればいや遙かなり

連なるとおもへる峯の峽の間ゆ雲湧くなべに立ちわかれ見ゆ

筑波山吟行

筑波駅前

わが立つは小筑波嶺呂の一尾根がなだれ尽きたるその裾辺なる

見あぐれば男峰の尾根がひく裾の傾き著く萱生ひ茂る

筑波嶺をまともにあふぐ山の門に鳥居を立てて齋きけるかも

筑波町

みんなみに裾ひく尾根がなだれ合ひて谷をつくれれば美杉生ひにけり

いちはやく霞ひきはえたそがるる山の杉生のあやに美しも

筑波山頂上

ほの明る横雲の間に富士のやま浮べる見えて天に杳かなり

群山を雲の真下に押し退けて立てらく山の富士は寂しも

女体頂上

日ざしつよき岩群が上に腰おろし暑さに堪へて国見すわれは

晩秋雑詠

をりをりに

昼ながらひらきつくさぬ朝顔の蕾を見れば秋更けぬらし

西風吹きていたく曝れたる庭土に早や照りそめし夕月の光

夕月の光に見れば井戸の辺の三和土は風にいたく乾きし

晴るる日の夕かたまけて凝る靄の眼に立つほどは秋も更けしか

わが庭のいくらもあらぬもみぢ葉におく霜みつつ幾日経にけむ

この頃の日和つづきの夕空をうつして明る池の水かも

戸をあけてあふぐ夜空に星淡し今宵の月はのぼれるらしも

多摩川附近所見

秋の日を照りさやけみとどの家も籾を乾したり扱きたての籾

庭の面にさ筵敷きて干す籾の干しあまりてか路にまで乾す

門先の槻の高木がおとす葉の眼にはとまらぬ籾の上に多き

干してよりいくらも経たぬ籾の上に槻の落葉のすでにたまれる

大正十四年

雑詠

山色連天（勅題）

冬さりていよよ澄み来し山のいろ見てあるほどに空にまぎるる

露と芹

散りたまる竹の葉凌ぎ萌え出づる露の臺見ればまさしくも春ぞ
田の畔に萌え出る芹のことさらに眼に立つ今日や春めきにけり

さくら（旋頭歌）

島山の崖の上に立つひとと桜、風ふけばその花こぼす青淀淵に
わが行くは工場の脇の煉瓦塀道、道の上に咲き垂るる花は小手鞠桜

身辺近事

門の辺にかへり来し子が声きけば兄か弟かわれにも分かぬ
町住みのあはただしきや秋更けて鳴きほそる虫に今宵気づけり

尾張犬山城にて

秀吉がいくさに負けしあとどころ小牧の山は野の中にあり
けふはじめてわが見る木曾の御岳は峽の退方の遠山にして

野営生活

富士裾野の滝河原廠舎にて中学生と共に野営生活を送る
嘗て兵隊たりし予は感慨無量なり

すこやかにわれは目覚めぬ寝るまへは南京虫を恐れたりしが
朝起きて兵隊ならぬ身の安さしばらく富士にむかひ居にけり
兵隊が常食ふ飯をわれも食ひ心に思ふことのなしとにあらず
兵隊にわれありし時けさのこの豊けきこころつゆ持たざりし
兵隊が庭作りすと山川に石をひろふはおもしろきかも
山川の浅きに下りて兵隊があげたる石かまだ濡れたる

須走口より中学生と共に夜にかけて富士登山を行ふ

暮迫る偃松かげの白きもの石楠の花は時すぎにけり
石道を踏みしめのぼる足もとに朝日しみにさしてあるかな
岩のほかに倚るものはなしよりし後見放くる空に朝日出でたり
山上の空気はまさに薄からしあふぐ真日さへまぼしからなく

箱根

深谿の底ひに激つ早川の水の乏しき覗き見すれば

秋山を清しみ行けば電車の軋み山の上にしてすぐ止みにけり

ここ過ぎて湖尻へくだる道ならむ芒が蔭を行きて隠れつ

箱根路の旧街道の石畳踏みくだるわが頭に応ふ

大正十五年

甲斐の山村

迫りあふ高岩垣をよろしみと橋はかけけむ珍の猿橋

けふたまたま町に出で来て自動車に驚きやすき馬にあるかな

そこここに家が屯す山傾斜一と眼に見えて夕日さしをり

この見ゆる山のなぞへの家はみな夕日さし添ひ暖げなる

遠世人心羨しも夕日さすなぞへを選りて村を作りし

冬の日のうつろひ早き岩山を遠々に見てしまし歩めり

春来る

この真昼軒の垂氷の凍み解くる音たえまなし春は来むかふ

夕されば山もとかけて立つ霽のやはやとして心は足らふ

櫟生の枯葉にそそぐ雨の音こまやかにして春さりぬらし

ひそかなる今宵の雨や小夜床に足伸ばし寝て寒くはあらぬ

○

かへるさに鬱金ざくらを見にければ花見心のほそりつるかも

松山の松にまじれる山ぎくらははれと思ふひとり来りて
落葉松の芽ぶき遅るる高原に流るる雲をわれは見にけり
正午すぎおほに煙らふ空遠くまぎるる山を我は見にけり

師

わが心よく知りたまふ先生に無沙汰してゐて寂しからなく

武蔵野の或る町 十一月下旬野火止村に近き志木町に遊ぶ

一すぢの町なりながら通りには細き流が音たててゐき

道すがら友と語りてせせらぎの音も大方聞かず来にけり

大槻がおとす木の葉の屋根に散り樋にたまりてその色のよき

鳥さへも勢ふとならし大槻にこの朝群れてむきむきに鳴く

町なかのこの大槻に寄る鳥の高音を張りてほしいまなる

いづこゆか飛び来てここの大槻になきし懸巢の暫くもゐず

をさな子

いつの日に活動写真俳優の名はおぼえけむをさな子がいふ
をさな子が常聞き知りていふことの面白くして夜をこもりぬ

夕飯ををへて始めし子どもらがメンコの遊び何時までつづく

昭和二年

春より夏へ

芽生え

笹鳴きをわが聞きとめて透かし見る藪の中には芽ぶきたる木あり

春嵐どよもし吹けるきのふけふ河岸の柳は大方芽ぶきぬ

朝な朝な研とぎ水ながす井戸の辺の山椒の木も芽ぶきたるかな

浅間山麓

浅間嶺がけふ吐く煙のま白くて凝りゐ沈めば雲かと思ふ

高原にとびとび立てる家のまへ中仙道は行きはる香けかり

樹々いまだ芽ふかぬ山にいち早く咲き出て寒き木こぶし夷白花

小鳥

日の暮に背戸の垣根を飛びうつりほのかなるかもみそさぎいの鳥

家やびさし廂をかきこそ歩く雀子の足音きけば今日も晴なり

梅雨ごろ

下草よべに昨宵かも散りし野いばらの花びら白く眼に觸れにけり

あら草のおどろが上に降る見ればこの五月雨に心ゆくなり

旦 暮

水道橋駅

おり立ちて我も驚きぬ郊外より運ばれて来しこの人の群よ
争ひてここにおり立つ人見れば今日のつとめを皆もてるらし

お茶の水風景

自動車も迂りよからし仰ぎ見る聖橋の上を夙く行きにけり

銚子附近

利根河口

川口にここたく泊てし船さへも片寄る見れば広き川かも

まむかひの常陸の国の波崎まで七町が間水張り満てり

犬若眺望

わが見るは壁なしつづく断崖にうねり寄せある浪ばかりなり

浪を見てさびしみ居ればまむかひの丘の陰より煙あがれり

この浦にわづかに人の住みつきし名洗村は浪越しに見ゆ

犬吠海岸

ここの沖を行く船乏しまれまれに行くくらむ船を待ち瞻りをり

すぐ下は巖むら立つ磯つづき宿屋の庭におり立ち遊ぶ

初秋雜詠

大和

田の中に残る礎石いしづゑのおのおのもへだたりもてり
大き寺の址
卑きはしき際にあらぬがこの丘に葬られければ跡とどめたり

国民文学漫談会席上

下総の堤青燕来たりけり久しく見ねどすぐに分りぬ

この我のおこたり責むる純平が声はればれしうべなひて聞く

隠すなき心もてばか純平がものいふ声はほがらかにして

国旗（旋頭歌）

幼くてよしと思ひし日の丸の旗、いつ見ても白地に赤の日の丸のよき

日の丸の国旗にまさる単純はなし、単純は遠みおやつ御祖の徳にしありけり

越ヶ谷

御獵場に群れてや騒ぐ鳥が音の喧かしましくして寂しかりけり

御獵場を彼処と見れば百鳥の声鳴きこもる常磐木の森

河の洲にくだらむとして白鷺が垂れたる脚は長くありけり

水の辺に歩みを運ぶ白鷺の翼がうつくし水に映りて

人避けて川のまなかに泳ぎ出し鴨はいささか流されにけり

枯芝に夕日うるる土手の道筒袖を着て子ども来りぬ

鴨どりにたまたま交る鶴ぼんの鳥鴨は洲にのぼり鶴は水に浮けり

鴨は皆水をあがりて居並べり今日も夕ゆふへとなりゆふへにけらしも

昭和三年

折々の歌

初秋

伸びすぎし鉄道草のたはやすく風に吹かるる秋さりにけり
庭におりて家内見れば昼ともる電燈さへも暑からなくに
蚊帳吊らぬ今宵の室の広く見え寝ぬる子どもも寒きが如し

病臥

うつうつと昼さへ眠り枕辺の書よむ慾もなくなりけり
仰向に寝ねて脊筋は痛めども横になるさへもの憂かりけり
病み臥して五日となればはらばひて粥すすするにも飽き果てにけり

氷雨

庭の上に積みし白雪降りかはる雨にも融けず冬も最中か
降る雨に水を含める小夜の雪ころに思ひ我は寝むとす

総選挙

かく書かば無駄か知らねどころ決め加藤勘十と書きにけるかも
八人の無産党員選まれたりわが世明るく思はざらめや

庭前初冬

散りぎはになりてもみづるさ庭べの稚木の楓いろからびたり
今朝もまた庭の紅葉にさしそむる朝日子見つつ家出づるなり

浅間高原

八月末二児を伴ひて浅間高原に遊ぶ

あけ放つ二階の室とわが見しは窓際までも蠶を飼へるなり
古宿の家並はすぐに出はづれて道はまた行く高原のうへ

街道をゆきつつ見ればこの原の傾むく裾に村ありにけり

いくばくの銭にかならむ汗かきて人が背負ひこしこの袋の繭

香掛

日の暮にわづかに晴れし浅間嶺の麓の宿に今宵寝むとす

ここにして見れば日が入る西空は浅間の裾の背向なりけり

追分

原なかに小学校が立ちてありここに通ふ児らの家はいづらぞ

清澄山

八月十三日、松村、堤、山口、安田四君と共に清澄山に登る
下りは旧道を通りしが、我には初めての道なり

向つ尾につけたる道は山奥の老川村に行くといふなり

谷ひとつ隔つる山にある人はしきりに草を薙ぎてあるかも
草かげにわづかに見ゆる細谿をわれは頼みて山くだるなり
椎茸なばの苗場近くまで降りしとき細谿川は音に出でつる
谿ふかく呼びあひゑらぐ人ごゑは若者にしてあされるらしも
繁しみ生ふる若杉の木が頂まで鉾立て並ぶこの見ゆる山に
里ちかくわが出でけらし道ばたの木に鳴く蟬の数ふえにけり

野球競技

年久しくわが見来りし野球競技を

三つながらスローカーブを投げ入れて三振とりし腕の冴えはよ
ときをりに交ふる球はひよろひよろのスローボールにしてみづからも笑ふ
ピッチャーのグラブ掠めて飛びし球中堅に及び二塁打となりぬ
見事にも三塁線に浴ふバントなり打者迂りこみて一塁に生きぬ
遊撃手が掴みし球と我は見きはや一塁手の手にありにけり
大凡おほよそは安打と見えし難球を迂りてとりぬあはれ左翼手
迂りすぎて刺されしと思ひしランナーの片足はまさに塁にかかりをり
直球の眼にもとまらぬを遊撃手横さまに跳びてむずと掴みぬ

背進また背進して二塁手が見事受けとめしテキサス・リーガー
追ひつきて捕りしはずみにまろ転びつつ球は離さぬ中堅手はよ

昭和四年

雑詠

一月下旬越ヶ谷より野田に遊ぶ

あからひく昼も鳴きある山鳩を農家の背戸の木に見いだしぬ

尾長鳥飛びかくろへる川の辺の木群こむらがなかは明るかりけり

河の洲をあがればそこは街道なり下駄を蹴立てて泥を落しぬ

深ぶかと向うの岸を流れある水を見かけて橋渡りゆく（江戸川）

上野公園

十二階がなくなりてより浅草を彼方と教へまどう事あり

藤の花。子規の歌に似たれども

花瓶の藤の花房けさ見れば短かきはやや起きかへりたり

盛夏

ビルディングのうしろの空に正午ひる過ぎてむらかれる雲は光ふぶ含めり

西空に昼より立てる雲の峰月夜となりていまだ見えをり

宵の程街空ひくく行く雲はサーチライトに照らし出されぬ

犬吠岬 八月十二日、家族を連れて銚子犬吠に遊ぶ

風下かざしもに押しうつりゆく海霧は外川とがはの村に吹きつけてをり

燈台を裏にまはれば目の前の霧笛鳴り出でめんくらひたり

燈台の暗き階段幾めぐりめぐりのぼりて方位ほうゐ違へぬ

夏になりてうるさく人の来る故か燈台守も今日は説明せず

寄せてひく浪のあとより現はるる磯の傾むき大いなるかも

あはび取水にくぐるを見てあれば足逆立てて沈みけるかも

この海にいのちおとせし人の為石の地蔵を立てたるもあはれ

ツエペリン号

八月十九日、独逸飛行船グラーフ・ツエペリン号東京に飛来す。これより先、霞ヶ浦臨時出張所より放送せられし第一回の飛行実況のラジオを聞きつつ

ラジオにて述ぶる歓迎のドイツ語をエツケナー博士空より聞きけむ

北空にたたまる空の下辺したべより雲とまがへてツエペリン来る

楕円形と見えしツエペリン向きを変へ真一文字に空に据わりぬ

大いなるツエペリンなり傍を飛ぶ飛行機を鳥と思はしむ

ツエペリンの偉大なる力いまここに空間距離を短縮したり

この原を指して寄りくる人みな視線あつめてツエペリンは行く

昭和五年

雑詠

三月下旬、内山君と野田町近くの利根運河に遊ぶ

運河に落ちこむ水があるならむ土手のどこかに音がしてをり
見かへれば運河にかかる高橋が夕空を背に浮び出でたり
橋の上に村のをとめら語りをり日の暮どきは何かせはしく

ボートレース

背延びして川下見れば漕ぎきたるボートのオール時に閃く
わが前を漕ぎ過ぐるとき向ふ側のボート見るみる迂り出でたり
こころよく迂るボートかそのままに離れしぬべき軽快さなり
監視船ぶねに乗れる一人がメガホンもておらべる声は水にこだます

避暑地風景。八月末千葉県大原に遊びて

避暑に来て日ごと食べたる米代を払はで去りし人もありとか
夏のうち人に座敷を貸さむため改築したるこころを嗤ふな

伊豆遊行。十月下旬伊東に行く

初島は共産村とぞ実朝が沖の小島と詠みたる島なり

島が根に寄せゐる浪をうつくしと見つつ行きしが程なく飽きぬ

売るものに米は作らぬこの国の海への小田を朝よりぞ刈る

海べ田にあした稲刈る鎌の音行きずりわれの神経に響く

雁の列また渡るよと先行きし列を探せど既に見えずも

夜 番

悪夢よりきめたる我は拍子木を夜番と知るにいとまありけり

わが家の前通るとき夜廻よまはりは咳しはぶきにけり寝覚めてきけば

遠おざかる拍子木の音を趁おひながらいつしか我は眠りたるらし

歳 暮

槻多き屋敷町ゆき鳥の糞前に落ちしが仰がざりけり

世 相

米野菜よく出来ながら百姓が困るといふはあるべきことか

国のうちに米は余れどその米を食ひ兼ねるものありといはずや

豊作に何故困るぞと疑はぬ百姓はつひに呪はれてあらむ

田舎より来る人々がする話農村恐慌に及ばぬはなし

百姓が困る話をいくたびか我が聞かされて疑はぬなり

世界経済恐慌が起す大渦に巻きこまれつつわが日本もあり

支配階級並にその一味を

言ふことをそのまま聞けば彼等みな労働者農民の友達の如し

資本家といふものを

資本家はおのれまろべば他の者が踏み越えてゆくを誰よりも知れり

昭和六年

旅の歌

寄居附近

低山を四方にめぐらすと平山^{たひら}辺に寄りてこの町はあり（小川町）

秩父への入口ながら川水のすでに清しきに心おちつく

中央線にて

左手に見えて流るる釜無を川上に来て横切りにけり

八ヶ岳の雪かつぐ峰遠くより見えてをりしがその裾過ぐる

遠々にのぼりつめたる高原や田のある峽は遥か目下^{ました}なり

おもむろに汽車くだりゆく諏訪平の西は明るき湖の上の空

霞ヶ浦舟遊

筑波嶺をここより見れば峯二つ勢^{きは}ひ並立^{なみ}ち厳しき過ぐる

棹をもて舟をあやつるわが友の巧みさ賞めてわれは舳にをり

銚子通ひの蒸汽船も今はなくなりしとききて

銚子より湖渡り来る蒸汽船をはじめて見しはいつにありけむ

加波山登山 同行、長谷川、菊地、隅田、須賀田の四君

岩の面を迂り落ちゆく谷水の寒くはあらずけふの日和に

山の上の平を占めて建てし坊の大き構へもすでに古びぬ

みむなみへ下りとなれる日あたりのここの芝生にいつまでか居む

富士山麓

登山者もいまはとだえし須走の街道ゆきて広くおもひぬ

富士山よりおり来し人の腰の鈴この境内に暫く響く（吉田浅間神社）

屋根の上のせし千木^{ちぎ}さへ年古りて人はいつより住みつきにけむ（西湖畔根場）

渡らむとして思ひとどまりぬかくばかり明るき湖は嘗て見ざりき（河口湖）

御坂越えの路ひろぐると青山を崩せしあとかまさやかに見ゆ

湖の上に出づれば見ゆる裾野らを蔽ふ樹海は沈めるに似つ（精進湖）

富士山の頂ちかく湧く雲よけふのあひだはひろごらであれ

旦暮

家居

妻子らを海辺へやりて朝なさな戸をわづか開き新聞を読む

子どもらは寄せ書をして手短かに海の楽しさをいひて寄こしぬ

朝炊きしぼろぼろ飯の胚芽米を昼も夕べもわがひとり食ふ

深川埋立地

路面より高くかかれる橋いくつこは深川と思ひて渡る

深川の埋立地ゆき野球する生徒を見れば何かたのもし

埋立地よぎる人々の大方はしばらく佇ちて野球見てゆく

埋立地の草高からず逸れゆきてまろがる球はすぐに眼に入る

躑 音

このままに過ぐべきことかわが国のいづこを見ても行き詰りたり

新しく興る階級の躑音を遠くにききてわれ疑はず

おもおもしろく伝はり来たる足どりはいかにも新興階級のものなり

身辺雑事

朝顔の蔓ひきぬきて夏の間は隠れてありし笹を清しむ

日の暮に雨戸を閉すと庭べに散らばれる葉を寒くもぞ見し

四谷駅に電車とどまる窓近く燃えし雁来紅もいつか素枯れぬ

市ヶ谷駅出はづれてより外濠にこの朝来居る鴨を見むとす

昭和七年

旧東海道筋

一月三日島田支部の諸君と共に

深山といふにあらねど山の背の道遠く来て旅と思へる（小夜の中山）

ゆく道は下りとなりて西空に山あらはれぬ三河の山か

山峽に街並なせる日坂は午後三時といふに既に昇れり

太平記に名の見えてよりこの宿をかなしきものに吾は思ひし（菊川）

田の末に煙をあげてとどろける汽車はトンネルに入るところとふ

青波とまがふ茶原の起伏を見てゐる我も揺るるかに思ふ（牧の原茶）

雑 詠

冬の日

縁側の日向を追ひて書き物の机移さむ日のかげるまで

松本より貫ひ来りし春蘭に冬を越させむ心づかひや

夜の更けてわれより先に寝る妻が今年の冬のぬくときをいふ

教室に誰が撒きけむ年越しの豆は靴にて踏みつぶされぬ

早春

川べりに屈みて何を見るやらむ人の姿なりさへすでに春なり

日の入り処いささか北に移りゆき和む光を見るはうれしき

時事漫吟

国きはこぞり人勢ふときなにゆゑの戦ぞやと思ひ見るべし

たはやすく戦をいふこの人は死を他人事ひとごとと思へるらしき

戦がが起きて幾月「生命線」「權益」といふ語も聞き慣れにけり

沈黙

黙しつ々はたらく父をうとましく思ひし我はまだ若かりき

言繁き日の夕暮は悔ぞ湧く黙して我はあるべかりける

霞ヶ浦舟遊

五月一日、春季散策会の一行と共に石岡支部の人達の案内にて霞ヶ浦舟遊を行ふ

蓮根を足もてさぐり掘る人の漬っかれる水はまだつめたからむ

岸ちかく船ゆく時は隣村に越ゆる山辺の路も見えける

湖なかに出でて見放くる磯づたひ走るバスさへ珍らしくして

湖づらの波折なをりの末に香取の岡われは見れども友はいかがあらむ

次ぎつぎに小溝にのぼり来る魚の楽しくやあらむ時にさ走る

船の上は喉の乾きの早ければ友が酌む茶をむさぼりて飲む

渚おもべに舟のりすてて面はゆし佇ちて見てゐる村人にあふ

水村すゐそんのうしろの岡にのぼり来て見おろす湖はかくも静けき

常陸行

水戸にて

友の知事を送りいだしてをりしもや降り出し雨を庁舎にて避く

ひと時に雷雨に洗ひいだされし清しき砂利を踏みて帰らむ

高浜にて

田の中の道はいくらも歩まぬに自転車にバスに追ひ越されたり

水中に鳥居を立てて齋いつきたる石の祠ほくらは蘆原のかげに

水戸に隅田君を訪ふ

歩み来て靴の底より沁む水を気にしつつ友の玄関に立つ

おのづから伸び茂りたる雑草あらくさを見るものにしてこの庭はありけり

郷里にて

幼きよりわが知れる人のまだ老いず農村疲弊を説きて語気の鋭き

越後行

八月二十七日高田に赴く

へうじきつ

標示札に防雪林とある崖の上の木はいたいたし稚木落葉松

スノーセット

防雪設備を出づれば汽車はとどまりて停車場のさきに町あるらしき

高田市外五智園分寺

堂のうち耀くばかりに五体のみ仏立ちていますを仰がざらめや

北陸道すぐ裏をゆきこの寺を更になしきものたらしめき

しよ

暑に病みて道行き疲れこの寺に筆及ばざりし芭蕉おもほゆ

二十八日、高田市より春日山へ

がんき

雁木の下をゆきつつみ冬には雪に埋もるる街とおもほえず

刈稻を秋は掛け干すたもの木のほつほつ見えてなほつづく道

山の上に城築きしとき掘りにけむ大きな井戸は今だ埋もれず

二十九日、赤倉温泉より野尻湖へ

庭さきの卯つ木うつきに群れて山の小鳥何にいきほふ朝はやくより

関川を石荒き瀬と眼には見つ自動車にして通り過ぎたり

信濃路に路は入りつつ秋蕎麦の花の白きをいまぞ見にける

柏原にて一茶の旧址

刈りこみて粗あらくなりたる檜葉垣の秋めくけふはふけて目にたつ

柏原小学校の野球

ネット裏あらくさの雑草なかに萩が花衰ふる見て球さがすなり

箱根の秋

深谿の石はみながら赤錆びて大湧谷につづきたるかも

土ふかく槽をうづめて湛へたる湯はおもたぎと沸りあるなり

いとどしく湯げむり噴きてある谷のまうへの山はもみでたりける

先を行く馬の匂ひの時ありて木蔭の路にしるくだよふ

外輪山眼交に立ち中腹の路走るバスまさやかに見ゆ

早川はいづこを流れあるならむ眼に入るはただ草山にして

山原をおり行きし人いま見れば谷の畠への辺を歩みをり

芒野を近道すると踏み入りて露けくもあるか竜膽の花

山原に足をとどめて見かへれば眼をさへぎりて穂芒ゆらぐ

仙石原くんだり来りてはじめて見る早川の瀬は音たてにけり

葛飾の冬

荒川放水路

水の面に束の間音はとどろきて電車は鉄橋を渡りゆきける

放水路の川上にもまた川下にも鉄橋見えて川下のは遠し

西空に並ぶ煙突夕べにはうすき煙をあげてゐにけり

暮れきらぬ空をうつして放水路に湛へし水は底なきが如し

小菅刑務所附近

田の畔くろに立てる榛の木そのままに街路樹となれる舗道を歩む

川べりをコンクリートの塀に浴ひゆきて囚人の事は忘れてありき

家かげに素枯れて残る枯葦や汚なき水もともに見にけり

中川沿岸

新宿へ橋わたるとき川上に筑波の山は果して見えき

夕空の縹はなだいろう色さへ映りゐて佇ちて目守れば動く流れや

水わたり百舌鳥の鋭声とこもは聞えしが更に鳴かねばいづこと知らず

川むかひ見るから大き槻は立つ堤をおりて憩ひて行かむ

土手の上に洗ひあげたる白菜はトラックの来てゆふべ積みゆく

川下しもにさだかに見えてゐる橋にまだしと思ふ電燈ともる

立石本田附近

街裏はすぐに冬田につらなりて見渡しひろし葛飾田圃たんぼ

日の暮に若き職工と前後して街ゆきしかばやけおや氣圧されぬ

冬庭

軒下に棄ておく鉢のさくら草は青きまま冬を越すにやあらむ

大あらしにさいなまれたる鶏頭の葉はからびきりて冬来たるらし

掃きよせて落葉は焚けど乏しもよ杉の枯葉も拾ひてくべむ

霜柱けさは目に立つ庭隈に四季咲薔薇はまた蕾をもてり

霜降りてややに色づく紫陽花の青葉のさかり久しかりにき

武蔵野

道よぎる用水にあひて珍らしきものの如くに眺め入りにき

武蔵野に水の乏しきは知りながら用水を見て思ひ出でけり

道のべに荻窪駅へ引返すバスは待てども乗る人ぞなき

大東京もここまで来れば道のべに語らふ人の訛に気づく
返り見て櫂並木は飽かねども青梅街道をなほ行かむとす

昭和八年

東京近郊散策（一）

上野原附近

上野原へ畠なかの路をつれ立ちてゆく人々は共に汽車をおりしなり
街の先に見えてをれども遠からむ枯芝の山も斑雪降りたり
山郷より人ら出でて来て賑へる大晦日の街に落着きのなし
鶴川の瀬にくだるらむ街道は楢山の間をしばし行きつる
峡間より河原に出でてひろごれる水の上には夕日しづけし

中川上流

川に泛く釣舟をあまた見つつ来て岸に釣る人はめづらしくあり
埼玉の冬田の眺めひろびろし新堤防に道はかかりて
向う岸にもやへる舟に昼闌けてをみならのゑらぐ声はうとまし
刈るあとより束ねられつつ葦茎の清々しきは眼にぞ沁む

東郊江戸川界隈

土手下の枯蘆かげのたまりみづ流につづき水揺るるなり
西日うるる向ひの土手の晒布人の出でて取りこみはじむ

地図見れば埼玉県となりてある草枯土手は少しゆかむ
沼といへどここは平野の河跡の明るき水に暮れて釣る人
稀に来るバス待ちてあるきさらぎの村のつむじをゆく人もなし

水郷葛飾

堤ゆくわれを追ひぬきし自動車は橋にかかる迄見送りてみき
松戸側の堤に見ゆる水門に冬の夕日はうつろひにけり

いにしへは河心なりけむ沼をまた二つに断ちて道築きたる

ある家の庭の日向に早咲きの菜の花は見しが再または見ざりき

戸ヶ崎の村に日暮れて古利根ふるとねの堤づたひに来るバスを待つ

日の暮にバスに乗りこみ来たれるは昼見し沼に釣り暮らしし人か

戸田橋界隈

大鉄橋を半ばわたりて見おろすや古き木橋は見すぼらしけれ

浦和より二里あまりの路を子どもづれ橋見に来しと聞けば笑ましき

枯芝の土手に鶺鴒ひたきを追ひ立てて河原に降りぬわが子とともに

水の辺に猫柳は芽ぐみそめにけり子らに見せしが折らで来にける

この年ごろ水漬きしことはあらざらむ草枯土手の日向に憩ふ

河川改修に堤のうちに囲まれて残る畑には冬菜乏しき

草原の枯木を立ちてゆく鳥は鳶にありけり眼に残るなり

川づらに夕靄立てどまだ見ゆる戸田橋を子らは羨しがりつつ

赤羽東北本線

うち仰ぐ鉄橋はとどろきはじめたり電車はいづれの線路を来るぞ

荒川放水路

放水路の堤を行けば葉の匂ひ流れて来るか近き工場より

放水路の橋袂に来て引返す男女の連はやや年老ふけし

川口の見えて来たれる土手の下夕潮あげて岸に音立つ

放水路河口

草の上に坐りて母子おやこもの食めり深川あたりに住む人ならむ

草なかに稀らに生ひて短かきは摘みのこされし土筆なるべし

二川ふたがはが挟む堤は海に尽き水漬みづける石に青海苔ぞ生ふ

潮退ひきて今日は見えある突堤いしじの石敷の上に海月三つ四つ

この岸より南にあたる沖べには陸くがなしと思もへど陸らしきもの見ゆ

安行植木村

電車よりバスに乗り継ぎ来しかども安行は東京の郊外に似つ
幾千個も皐月の鉢の並べるは見事に過ぎて厳しと言はむ
既にして流行の時期は過ぎにける皐月の苗の夥だしきを見よ
一鉢を購はむ錢ここにもてど見てゆくのみこころは足りぬ
われより先に植木園にありて去る時もなほ皐月を選れる人は富むらむ

南国産の草木育つる硝子戸張の温室は道ゆきて見ゆ

芍薬の花はうつろふ畑過ぎて村役場小学校はすぐま近なり

東京の夜店にて見る苗木にはここに育ちしものもあらむか

安行の植木村は見ぬ戻りには草加に出でて煎餅を買はむ

古利根河畔

河沿ひの昼しづかなる町に来つらチオを聴かむ店見当らず
行々子は堤を越えて畑なかの榛に来てまで啼くぞかしまし
向う岸を渡頭にくだる径は見ゆ青草原に白く乾きて
代搔きの馬を曳入て洗ひある浅処の水は流るともなし
見るかぎり堤の草の秀立は日暮になりてかぎりひて見ゆ

旦 暮

秋川峡。七月一日五日市より檜原村迄秋川の山峡を溯る

街なかとおぼゆる道に軒端まで刈麦を積む家は見にし
流よりややへだたりて埃づく道ゆくときも河鹿は聞こゆ
川砂に半ば埋もるる巖には根這ふ野茨の花ぞ真白き
村に来て火を警むるポスターをあまたたび見るは何かおぞまし
谿深き青葉がくれに山川の二つ落あひて水激ちたる
栗の花咲き腐てるはあはれなり青嶺がうへに昼の月見ゆ
山道のあるところにて真向に夕日さしこむ谷を見放けぬ
けふ一と日秋川峡をゆききして河鹿の声は聞き飽かなくに

身辺雑詠

日が沈むとともに一日吹き荒れし風をさまりて淡き星空
わが家の春蘭は咲きおくれたり信濃の山に生ひしからにか
春蘭は咲くべくなりて花梗を俄かに伸ばすこの二三日
枯れがれて莖は立てりて見し萩の四月おくれ芽をふきにけり

資本主義機構を一気に覆へさむとして囚はれし人らに悔あらしむな
自があとより起たぬともがらを齒痒がりし井上日召の心をあはれむ
共産党事件に囚はれし者の一人二人は其名聞き知り顔も見たりき
資本主義社会の後に興るものは何ぞと問はば人おどろかむ

昔は眼光紙背に徹すといへり。今は

新聞は活字の面を見てゆきて行間にこもる意味を読めとや

上越國境

四月二十九、三十の両日窪田先生に従ひて假屋安吉、
田中和平両君と上越國境に遊ぶ

利根の本流と湯檜曾川の會流地点にて

開門はけふは開きて一と溪の水なだれ落つ淵もとどろに

眼下には利根の川水とどろける断崖のうへの岩ざくらの花

夜後といひ藤原といふ村の名をききて利根の水源をいまさらに恋ふ

河原柳芽ぶく上手にかかりたる湯檜曾川の木橋はまだ新しく

谷向ひは枯山ながらひとところうすく芽ぶくは日当りよきか

一つのトンネルを出れば土合信号所なり

土合の信号所に来て湯檜曾川細くなりつつなほ激つなり

山裾に埃かむりて雪残りりトンネル一つ越えしばかりに

國境の清水トンネルにて

一万メートル近きトンネルを進みゆく汽車にけふ在りて國境は踰ゆ

入口の光は次第に遠ざきて地平をのぼる月と見れば見ゆ

入口の光は月とまがひつつ距離の觀念を既に失ふ

入口の光ははじめ月のごとく次に点となり忽ちにしてなし

入口の光消えぬと振向きき行手を見ればおほに明るし

礫なしわが顔を撲つはトンネルの天井に凝りて滴る雫か

越後湯沢にて

停車場より宿場に出づる道のほど國境ふ山の雪は見飽かぬ

上野にて嘗て歩みし三国街道は峠二つ越えてここに出づるか

利根川沿岸

萬葉地理調査の為海上村三宅に行く。堤、関根、川口三君同行

屯倉跡の空濠は記憶にありといふ島田香苗氏はわれより若く

門浜と名には残りてこの岡の裾曲の田居はふかく入りこむ

岡の下の狭間田^{はざまた}見れば千年前海が入りこめるさま明らかし
過ぎし日に電にいためる麦畑にけふのぼり来て風を清しむ

利根川も鹿島台地も見えをれど刈野とおもふ方は霞めり

同日堤青燕君と水郷笹川町に遊ぶ

ぞくぞくと葦生の葦は萌え立てど枯葦の丈にいまだ及ばず

枯葦にすがりて啼ける行々子^{よしきり}の中には白き腹をば見せて

水門ちかき土手の草より立つ雲雀羽振ひながら高くあがらず

鹿島詣でのかへりといひぬ砂丘より小松を採りて来る人に逢ふ

渡船にていたく静けしと思ひしは行々子の声啼きやめてより

下野行

七月三十日隅田君同行にて宇都宮より烏山に行く

よき友とバスに坐席を占めにけり七八里がほどは夜道もよけむ

遠くよりバスの中まで聞えたる太鼓囃子のそば通りすぐ

太鼓囃子習へる村の若ものを荒れたる堂に見るはふきはし

軒並に提灯ともり夜祭の宿場の道を人は往き来す

旦 暮

一人おり二人おりゆきて終点に近づくバスに言減りてみき

日光竜頭の滝

激つ瀬は二分れゆく大岩の苔おとろへて日ざし淡けれ

滝壺に片寄り立てる巖には縦ぞ生ひたる四五尺ほどの

盛夏

雲

雲の峯家並を越えて立つ見れば安房の海辺ぞ恋しかりけり

西空に昼より立てる雲の峯月夜となりて未だ残れり

東京の雷

恐ろしき雷の記憶はうすらぎて故里の夏をすがしみ思ふ

正午^{ひる}すぎて日光の方より鳴り出づる雷は大方烈しかりにき

故里の烈しき雷にくらぶれば東京の雷は品劣りたり

東京の雷は地雨^{ちあめ}をともしなひてうとましきものに妻はいふなる

雷といへばいたくおびゆる末の子をあはれと思へど時にをかしき

空三題

梅雨季^{つゆどき}は降るこそよけれ今朝もまた見あぐる空ゆ雨零れをり(梅雨空)

晴れわたる夏の天空見てをれば天行く日さへ小さく思ほゆ（夏の空）
山の上に今宵宿りて見る星の浄らけくして夥だしけれ（山上の空）

苗場山

八月十二日、田中君と越後の苗場山に登る

ただきの平はゆるく傾きて草生のなかにいくつもの沼
天然の壺庭つぼばといひて針椏がかこむ草生に巖並び立つ
くろぐろと梢並立つ針椏の樹海といふをただに見下ろす

信越国境の尾根傳ひに赤湯に下る

しばらくは信濃越後の国境ふ尾根路行かむ木の暗くの路
山の上に日は照らせれど信濃側の谷々はすでに靄もりたる
尾根路をくだりにくだり谷間に砂地の見ゆる頃に日暮れし

翌十三日、三国街道を歩む

凍しもつよき冬をぞおもふ高原にあかく枯れ立つ落葉松の苗
ゆきめぐり裾わの谿を出はづれて筍山たけのこに今ぞ対へる
道に浴ひて草がくれゆく山水はしばらくありて道をよぎりぬ

原すぐちなかの直路をゆきて曲りなば浅貝しゆくの宿は蓋し見え来む

三国峠頂上にて

上野かみつけの方を見放けて立つわれの頭の上を鳥群れて過ぐ
鳥さへも低所ひくどを選りて飛べるらし峠の空を群れて過ぎける

東京近郊散策（二）

粕壁町

橋際に鰻食はする家ありて川下とほく水ひろがれる
伏し靡き水草生ふる古川を橋わたり来て見おろしにけり
水草のちぎれて流れゆくも見ゆおもおも動く流にのりて
標柱に用水組合の名は書きて水に関はるころを示す

奥州街道を歩む

道たまたま村居を過ぎて並槻の高き梢は見上げてぞゆく
外風呂かまの竈かまに燃え立つ火のいろは忘らえかねつ道とほくきて
暮てなほおほに明るき道の上雲に滲みて月の見えくる
踏切番の小舎はあはれに一間にて親子三人が飯食へる見ゆ

五位驚とおもふ一声聞にして越ヶ谷ちかく歩みあたりき

武蔵忍町。忍町は関東平野の中にあり

忍町の城跡に来てのぼり立つ土堤どての低きもところからにぞ

小崎沼の跡に碑を建てし忍の城主阿部なにがしはここに住まひき

万葉集に残る一首を羨しみて碑は建てにけむ君がこころはや

十一月二十三日、埼玉県行田町及び小針沼に遊ぶ

町はづれの行田院といふ寺に入り墓地越しに見る刈田つかぞひろき

墳つかふたつ刈田の果に見えながら一つはまさに瓢形にて

水田より刈りあげて来て積む稲は高き堤の道をせばめつ

この見ゆる刈田の溝に魚釣りてひねもす飽かぬ人もあるらし

夕づく日かくるる雲の下べより汽車のとどろく音ぞきこゆる

桑畑の畝に時じく咲くすみれほのかなるかな日暮に見れば

村道にバス待ちかねて問ひ寄れる店のあるじは口の重たく

東京近郊散策 (三)

下総関宿附近

関宿の町は寂びれていにしへの泊とまりのあとをいづこにか見む

草枯るる土堤をくだりて利根川の長き舟橋を徒行かむとす

舟橋をわたり馴れたるをとめらか三人並びてうち語りゆく

舟橋をわたり来たりていばらきの町に食ひたる蕎麦うまかりき

江戸川にそそげる水は水門のひとつに激ち夕かげに見ゆ

古利根沿岸

荒々しくすすきの原に落ち入りし雉子の羽音は耳に残りぬ

葉落しし梅の畑は明るくて寒肥かんごえをすでに施せるらし

十二月四日、與瀬より小佛峠を越ゆ

岩の面は日和つづきに乾きたり垂れさがる蔦の葉も素枯れつつ

枯谷からたににひとつ舞ひ立つ黄の蝶は高く飛ばねば見おろしにけり

昼闌けて霜の消残ける沢辺より路はたちまちのぼりとなりぬ

峠路を汗かきのぼり朴の葉の大き落葉は目につきやすし

尾越おごしの風時のま吹きて眼交に空ひらけ来ぬ武蔵の方に

午後はやく向ひの山の影落つる峽の家村やむらを過ぎて身は冷ゆ

日の皇子の春

この朝のラヂオが告ぐる喜びはわが行く道の街に溢るる

日嗣の御子あ生まれましにけりいついとわが待ち設けましこの年の暮

騒がしき今年も暮にちかづきてこの喜びは何と申さむ

ひがしの海ゆさし出る日のごとく日嗣の皇子は常いませ

国民が仰ぎまつらくつぐのみやあきひとしんかう継宮明仁親王の御名も畏かしこし

昭和九年

東京近郊散策（四）

一月六日、相模川沿岸の川尻附近に遊ぶ

畑なかにまた兵寄りに家はあれどいづち向きても桑畑にして

道の上に日暮は落つる桑の木影淡々しこころせきたつ

竹林の多き村かな沿ひのぼる溪の向ひに家を構へて

宿駅うまやにて既に下りとなる道に清き川瀬を眼に描きつつ

河原までバスはくだりておろしたる人ら渡りゆきぬ長き板橋

日の暮に河原に遊ぶ子どもらよ砂利篩ふ人より遠くは去らず

河原より仰ぐ台地を地図に見れば道はかよへり行かむ日もがな

長橋をひきかへし来て橋際の岩群が上にしばしおり立つ

荒川堤上

荒川の河跡といふ水の辺に茂る竹村いまにゆたけし

廢川の薄ら氷とけて遠べにはさざ波ぞ立つ日に光りつつ

堤にてまどろめる間に廢川に立つさざ波は光らずなりぬ

のぼり来るモーター船は一つにて草枯土手に音をはずまず

ひむがしの空に散りばふうす雲の色にまぎれて昼の月は見ゆ

伯父の死 一月二十七日伯父八十一歳にて逝く

苦しまず死にたる伯父の面わには起き出でぬべきけしきさへ見ゆ
瘠せやせてこの年頃はありしかど病みしことなき伯父と恃みし

回想種々

弟の生れて後は独り身の伯父に夜なよな抱かれて寝き
連れられて男体山にのぼりしは十の歳なりき伯父も若かりき
手の職を伯父はおぼえて独り身のこころ安きに家を明けにき
後つひに妻を娶りて落着ける伯父の生活はこころに沁みき
ひとり子を兵に召されて一年のあひだに伯父はいたく老いにき

早春観梅

三月七日武州越生の梅見にゆく

高麗川の水の乏しく砂利採れる跡いたいたし薄日に照りて
梅林をわれひとりして見あるきて絵をかく人にあふぞ親しき

下土したつちにうつれる影はくねりみて梅の老木をあふぎ見にけり

谿川の岸に一もと咲く梅はそよぎて光る篋を背に

空樽に水汲み溜めて梅が枝をここたく挿せり咲きたるもあり

二階にて碁を打てる人ら谿川に水の乏しきを惜しみ言ひあふ

庭さきを流れて細き谿川は眼にありながら縁に蕎麥食ふ

三月十八日山下清氏と青梅町より吉野梅林に遊ぶ

並みよるふ多摩の山々眼交にしばらく見えて町に入りゆく

多摩川の崖の上にして井伊大老が隠居処といふ家は古りたる

山水に遊べるときの井伊大老を思ひみるだに今日はうれしき

深溪こがらに小雀らをりて立木より岩に飛びうつりゆくは静けき

名を聞きて石割梅を覚め来れば巖群がる山寄にして

日あたりに梅は含みてかたはらの土蔵にうつる影ものどけき

下土にうつれる影はくねりみて梅の老木を仰ぎ見にけり

養魚池にさざ波ひかる正午過ぎて梅のはやしはほぼ見をはりぬ

病臥

面疔と医者が一と言ひひしとき額ににじむ汗をおぼえき
稀れなる病にわれは罹れりと苦笑ひしぬい寝つつありて

三日四日は背筋いたみて常日ごろ病み臥す友に思ひは馳せき

わが病みてありしあひだに交りは淡かりしかど友の死にける

この幾日いくか粥するさへたどたどし口を大きく開きは兼ねて

日の暮は医者に行くとして起きいづることにも慣れてこころ平らぐ

この病癒えて働くことさへも思はずなりて十日ほど経し

わがいのち取止めたりとおもへどもしみみとして胸に触れ来ず

面疔に人の死にたる話をば三度も聴けり癒えての後に

早春

福寿草

をどどし庭におろしし福寿草は咲きて気づきぬこの春もまた

江戸川区風景

土堤の上を海まで行かず母と子が草摘みきほふ畦に下りぬ

春さむき枯蘆の洲に人のゐて泥を掻きつつあさるものは何

海苔しびの立てる沖より相連れて船の入りくる水脈みは細けれ

板橋は高くかかりてわたりゆく子どもの紅き足袋は眼に沁む

小名木川風景

掘割に入りて間もなくしび竹をたかだかと積む船に会ひける

船室に疲れてをりぬくぐりゆくいつもの橋の名は聞かずして

西空は大川口のみまかひに夕焼くるころ船をあがりぬ

東京近郊散策（五）

下総三塚御料牧場

大君がもと乗りましし白馬の吹雪は老いぬここに静かに

つややけき栗毛の馬に隣りして老ゆる吹雪を見れば静けし

馬舎まやぐち口の札には駄馬と書きてある馬は見るさへ親しかりける

ある馬舎に母馬に似て額白ぬかしろの仔馬も居りき額を並べて

大方の馬は春野に出でぬらむ空しき馬舎まぐさに秣ぞ匂ふ

馬舎の方に二たび聞えたる藪うぐひすの声はつづかず

五月六日散策会で新緑の秋川谿谷に遊ぶ

まれまれに鳴ける河鹿は谷間風吹きすぐるとき声消されつつ

春の日は照りてぬくとき岩の面に仰向に寝てしばしだに居む

海棠に花咲き満ちて散りたるは池の水際みぎはをくれなゐにせり

一と山を買ひて伐り出すといふ流木は橋の下に来て瀬に乗りにつけり

山腹に芽ぶく楡にうちまじり咲きて散りたる山吹の花

新芽立つ雑木がもとに山百合を掘りつつ思へば春も闌けぬる

真清水に虎杖の芽を浸したる茶店を過ぎて滝見えそめき

荒川戸田橋附近

鉄道草蔓くさの類たぐひはびこれる堤の下を疲れてゆきぬ

草茂る河原を越えて川上に見ゆる流は鈍く光れる

夏草に半ばうもれてはたらける人らを見つつ今日はうとみぬ

篁は岸に繁れる廢川に入り来て泊てし舟に音なき

濁声だみごえにみじかく啼きて葦むらをかいくぐり飛ぶはよしきりの雛か

入りてゆく塚のむかうに田の草を取りつつ語る人々の声

明日さへや梅雨は明けなむ入りぎはに雲を破りて紅し夕日は

夜道 五月九日深更、世田ヶ谷街道を夜道することありて

電燈をつけてい寝たる家はあれどかへり見ることもなくて行きゆく

行きゆけば暗さに馴れて夜半すぎしアスファルト路に歩みはかどる

夜道して空のひと隈明れるをいづこの灯かと思ふはさびし

眼の前に電柱のさき浮き出でて自動車のあかりうしろより射す

多摩川に近づきぬらし田の見えて犬吠え立つる家のまへ過ぐ

緋月ほそと金星とふたつひむがしの空より消えてこの夜明けぬる

川しもの橋のあかりはうすれつつうごく電車はまだきより見ゆ

夏日鎖閑

きのふも今日も暑き座敷に野球放送のラヂオを聴きぬ明日も然しかせむ

燈火管制

燈火管制に防護団員が触れ歩く声ものものし雨夜くだちて

警報解除の声は夜ふけて聞きしかど起き出づることもなく眠りぬ

富士山麓探巢行 六月二日、三日、野鳥の會主催の探巢會に加はる

代掻きて澄める田水は時霽れの空を映して寒けかりけり

山藤の花はおとろふいくつもの草藪を見て須走近し

雲すぎて残れる雲の光れるは富士山の三四合目にやあらむ

道々に名の聞えたる人たちと一つ家に寝る今宵楽しく

佇めば浅間神社の境内に鳴きうつり来る鳥が音しげし

裾野らの木を伐りし跡を咲き埋めてれんげつつじは紅に燃ゆ

かかへもつ膝の上にて揺るるなりうすくれなゐの敦盛草の花

風の吹く方に向ひていつもいつも山椒喰は巢に籠るとぞ

巢に籠る山椒喰の尾は長くしてはみいでて見ゆ木の間に高く

楯の木の瘤と見まがふ柄長の巢梅の木苔を木に真似て着く

手を伸べて触るる柄長の巢はあはれやははとして温みさへもつ

二茎ふたくき三茎秀き立つ萱はまだ短し古株の間の巢はあをじ蒿雀とか

道のべの羊齒の葉がくり小瑠璃の巢に卵五つありかがみて見れば

石龕せきがんに四十雀は巢をいとなみて苔敷き詰めぬ四五寸がほど

木の空洞うろに二つの卵見たりしが親の鶴鴉は近く飛びたり

落葉松の突き出し枝に巢がありと聞きて仰ぐは小雨びたきの巢か

わが覗く巢箱のなかに孵りたる日雀ひがらの雛は七つ寄りあふ

こがら小雀めが枯木の幹に穿ちたる巢に出で入るは静けかりけり

草かげを指されて見たる卵より眼を離す間に見失ひける

山椒の枝に眼白の巢はありて小藪のなかは雨あがりたり

積み棄てて枯れし小松の枝の上に頬白の巢も卵も濡るる

足柄越

八月四日、駿河竹の下より足柄峠を越えて相模関本に出づ
岩田栄次郎、佐野鎮衛両君同行

御殿場をさしてのぼりとなる汽車の音ぞとどろく遠き狭間に

足柄の峠に見れば箱根路の山脈は三重にたたなはりたり

ここに見る愛鷹山あしたかは低くして富士の裾野に一つ起き伏す

この谿を溯りつめて住みつきし家群はありぬ山くだりくれば

蓑に編む萱刈り乾せる家のまへ過ぎつつぞおもふ山の生活くらしを

出はづれてふりかへり見る峽の空矢倉ヶ岳はさへぎり立てり

今日われらが越えし峠さかを峻しみにしへ人は書き残しける

かの山を明日は越えむとこの村に宿求めけむ古へ人は(関本)

川崎杜外君を弔ふ

窪田先生がこころにかけて詠みましし歌を見ずして君の死にける
病床に松村君をまち侘びて青き林檎を買ひおきしとぞ

この年ごろ氣負ひつつ歌は詠みたりし君がこころはほぼ知りにつけり
若かりし日の記憶には窪田先生と友どちの如く語りぬし君
やや老^ふけし兵士姿をいま思へば二十^{はたち}歳あまり三つに君はありしか

旧友 八月十九日、二十年振りにて長野市に縣知事岡田周造氏を訪ふ

若き日の面かげのこる親しきよ高原列車よりおり立てる君
東京にありて幾とせ君を見ず知事となりし今旅にして訪ふ
いそがしき君にあれやも応接間に半時あまりわれは待ちつる

この国に知事としなりて大き鉢に高山植物を君は培^{つちか}ふ
対ひみて語りつつをれば相会はぬ二十年のへだたりはなし

君がいふ山々の名はよく知れりそこにスキーに行く^と聞けば羨しき
明日の朝宮殿下をば迎へむと松本に行く君と連れだつ

老いづきて友の恋しき年ならむきのふ川崎氏を悼み今日は岡田氏に逢ふ

梓川溪谷

八月二十日、中野栗山両君並に大沢夫人の案内にて梓川
溪谷を稲核まで溯行す

鉄管より吐き出す水は横さまに島々川を堰きて激ちつ
島々谷さかのぼりゆく山みちはここにおこりて今日ぞ見にける
ま裸の子らはつらなりてやすやすと川を涉^{わた}りぬ見つつある間に
ゆゆしくもなだれしものか旧道の跡もとどめぬ赤禿げの山

水上の空はひらけて見ゆれども入りゆかば山のたたなはるらむ
稲核^{いねこぎ}の家居の見ゆる橋の辺にしばし遊びて歩みをかへす

上高地よりくだり来る自動車に中学生の居眠るは何かあはれなり

帰省

故里の家は賑しこのわれを伯父^{おぢ}と呼ぶ子らの育ちゆきつつ
終列車とほるとどろきを宵々に寢床にききてわれは育ちき

盃蘭^{うらばん}盆会に帰りておもふわが村はいつの頃よりか麻をつくらずなれり
朝しばし晴るる日光連山を子らに見せしむ家の裏に出て

故里に幾日とはみぬわれながらこころ弛びて昼寝をぞする

奥利根

九月二十三日、湯檜會にて中秋の名月を見、翌日利根
溪谷を宝川温泉まで遡る

おもむろに尾根を掠めてゆく雲のささべり明し月は見えねど

山の間は雲多くして中空にのぼれる月の照りいでにけり

昨日きぞ降りし雨に濡れぬれて草屋根の昼も乾かぬこの谷岨は

郵便夫もまじりて何か話しある村の人らは道のうへにて

地均しの胴突ひびく狭間には製材所がやがて建つといふなる

沢あれば利根の河瀬に滝なして水の注げる崖の上ゆく

この先には温泉小舎の他に家のなき利根の水上を恋ひて来にける

露天湯に浴むるおうな媪の連ならむ岩に弁当を開きある小父は

榛名山行

十月十五日、表口より榛名山神社に詣で、湖畔を
経て伊香保に出づ

烏川の瀬に立つ浪のしらじらと見ゆる頃より山にかかりぬ

着飾れるをとめ子を道に追ひ越して入りゆく村は秋祭なり

道のへに幟を建てて祀れども社ははるか下の谷にありとふ

山路来て妙義の嶺呂を見かへれば前山の上に聳えて立てる

年を経て人の泊とまりも少なからむ門前町は行き過ぎかねつ(榛名山町)

下行きてあふぐ楓のみぢ葉は谷にさしこむ日に透きて映はゆ

峠にて買ひし野葡萄は酸ゆきかも草なかに種を吐き棄てにけり

東京郊外散策 (六)

西武蔵風景

くろ土になほくろぐると影つくる田の架稻かけいねよけふの日和に

いちはやく枝は束ねし桑畑の間ひまより見ゆる甲斐秩父の山

並樹木のもみづる路を幾むれにもなりて帰りくる小学生徒ら

つぎつぎに枝移り来て柄長らはたたずむわれの前を過ぎれる

柄長らの飛びてゆきたる方見れば日ざし明るき雑木もみぢば

武蔵野に残る林を他たしもの所者が入りて拓くと聞けばきびしき

長かりし林のなかの路なりき村の四辻つむじに日はうつろひぬ

岩槻越ヶ谷附近

冠木門の上にさし出づるもみぢ葉に町筋ゆきて足とどめたり

白梅は返り咲きしてほつほつと枝に見ゆれど十片とひらに足らず

川千鳥むれて下りたる洲の上のこの日かげもたちまちにして
越ヶ谷に来馴れて今日も川魚の煮附を添へて茶漬飯を食ふ

冬 田

冬田より立つ白鷺は大空に高くは飛ばず堤に下りぬ

冬小田の刈株の間に薄氷うすらひの昼さへ解けず寒き今日かも

日の暮に冬田の道にゆき逢ひしバスは見るみる遠ざかりゆく

落つる日を背にして来たる人の顔見究め難し冬田の道に

東京近郊散策 (七)

十二月八日、相模川上流の村々を歩く

雪解ゆきげみづ屋根よりしづきある家の裏を折れゆく道は濡れたり

松の木をしづるる雪は眼に見えておどろが中に落ち入りにけり

峡の空渡る鳥の見えてより日かげはいたく薄れゆきたる

この道の行手に立ちて黄葉もみぢたる木の下辺には草屋根も見ゆ

わが立てる崖に向ひてながれ来る山川の瀬のさざらぐ聞ゆ

坂のうへに見おろす峡は一と目に見ゆ村の中道を行くトラックも

山川に突き出て高き岩むらに生ふる木々ありてもみぢしにけり

三日まへ降りたる雪は山々の巖に光りみて目に泌みるなり

家の裏にのこれる雪を踏みしめてひとり遊べり村のこどもは

岸に生ふる竹を伏してせせらぎを隠す下より水ながれ出づ

橋下を飛びぬけたるは魚狗かほせみか磧の杭に棲まれる見れば

日の暮になほ山おくにゆくバスを道に避けつつ安らぎおぼゆ

山葵田につもる落葉に冬あをき山葵の葉さへ見えかぬるまで

つぎの村へ山路越ゆると浴ひて来て羨しかりにし川にわかれぬ

杉群に見おぼえのある城山かげともの影面に出て今は暮れぬる

暮れてより自転車の人をいくたびか追ひぬくバスにひとりをりける

荒川内間木村附近

冬枯るる河原の道に見えざりし水はふかぶかと流れつつあり

荒川に獲してふ鯉の桶にしてあぎとふ見ればややおとろへぬ

今し方おりて来にける高台の木立には冬の霏ぞたなびく

船頭の生活くらしはゆたかに見えねども籠に飼ひたる二羽の子雲雀

打間木の渡船場に飼ふ子雲雀のきへづる頃にまたも来て見む

一坪ほどの土をおこして蒔ける菜は萌え出てあをし渡船小舎のまへ

篋のゆたけき見れば広川を面影に立ちて水ぞ流るる

粕壁越ヶ谷附近

ひきかへす電車は立つに間のありて傾ける日は背後より射す

よろこびて電車に乗れる子どもらは次の駅にておりて行きたる

おのおのに紙飛行機を手にもちて町より帰る子供なるべし

線路よりおどろき立てる山鳩は田におりぬ間にうしろになりつ

子どもらが抛つ石は届かねば洲にみならびて日を浴むる鴨

遠く見て何か降りたる薄生に近づけば雉は荒く飛び立つ

屋敷木の大き榎に群れさやぐ雀のこゑは空にあふれて

釣止めて道にあがり来る人にあひしばし連れだつ釣の話して

伊豆遊草 十二月下旬、松村君と伊豆を巡る

伊豆山

わが友の実朝名歌評釈もたづさへて来ぬ伊豆の山べに

伊豆山の茶店に入りて憩ふ間もわが忘れぬや沖の初島は

みやしろの裏山にのぼる路はあれど庭の白梅にこころは足りぬ

神主の家とおぼしき庭にして熟れて黄いろきくわりんが二つ

喬木より声おとし来る鶉鳥は長き石段をおりつつ聞けり

日金山うち越えきたり走り湯に浴みけむ君は若かりしかな

いにしへの走り湯は室にみちびきて宿ぞ建てたる波うちぎはに

なかなか見えこぬバスを待ちつつぞ今日の宿りを思ひ楽しむ

みむなみにこころざしゆく旅にしてけふの間は初島をば見む

南伊豆

うしろべの嶺呂に薄日はさしそめてなごり風ふく枯山の道

火山岩積みあげて道はきづきたる枯山なかに海を見放けつ

鶉が一つ波間におりて浮べどもバスより見つつ眼にとめがたき

眼にちかく豌豆のはな見てすぎて傾斜の畑の青きをあふぐ

かぜ風ぎし朝明にきけばひむがしの海のとどろきは空つたひ来る

湯けむりは朝はゆたかにひむがしの海よりさせる日にぞかがよふ

鶉はしばしば飛べる田のくろにすでに萌え立つ曼殊沙華の茎

警笛はひととき鳴りて河むかひ山腹道にバス現はるる

下田街道に架けたる橋を横に見て湯ヶ野に入ればぬくし冬日は

谿の水二分ふたわかれして懸りたる初景滝しよけいだしといふを眼下まなしたに見き

のぼり来て谿はきはまる杉むらに斑雪はだれは白し杉の葉ごとに

天城山北に越えつつ一昨日おとつひの夜半に降りたる斑雪踏みゆく

並木々の幹に吹きつけて凝りこたる雪おもしろし山をあをげば

榊葉を道のなぐさに折りもちて天城の谿を出でてゆくかな

大森区森ヶ崎海岸

まぢかくに海苔しびは立ちて見ゆれどもその先にゐる船は霞めり

流れ寄る海苔は多くもあらなくに女は又手またにをりをり掬ふ

飛行場よりしばしばあがる飛行機は海の上に出でてやうやく高し

飛行機の爆音は空にとどろけどモーター船のひびき気ぜはし

海苔洗ひをはりて帰りゆく船か友舟の間を縫ひて見る見るはやし

品川の海をいで来る汽船あり煙は陸くがに流れたるかも

海の辺はあたたかからしゆれゆれて陽炎立てる石垣のうへ

何船か船体を白く塗りたてて曇れる沖に一つのみ見ゆ

電車往復

小説は電車の中に読みなれて常もち歩く雑誌ありのたぐひ

小説を読みさしにして電車をば乗換ふることのけふは幾度

電車にて読みさしてをへぬ小説を夜い寝るとき思ひ出でける

久地梅林

薄照りのひるすぎに来て梅が枝の影はしたしき荒土の上

盛り過ぎておもほゆれども白梅の散れる花びらを下土に見ず

枯々のふるき幹より秀ほきたちてひこばえはびしびし花を着けたる

古木の梅横さに枝を張れるにぞ下くぐりつつ見めぐる我は

カンバスに描く枝みくらぶりと見比ぶる老木の梅に花は乏しき

児をいだき梅の花園見てまはるをみなは連におくれて行けり

さし交す梅の梢を眺むればうしろの空に雲うごくくなる

古寺の奥にも梅の園ありてはばかる如くわれは入りゆく

多摩川の砦わたしの渡頭ちかからむそこに行く道を人たづねをり

明治神宮内苑

ここに来てけふ名を知りし楸ひさぎの木我家の庭にありて久しき
名を知りて楸は見れどみ吉野の清き河原は眼に浮び来ぬ

奥高尾縦走 四月二十一日案下より陣場山に登り高尾山に縦走す

峡みちをバスゆきめぐり枯山からやまの陣場にふたたび三たび真向ふ
終点にてバスおりし女をみなは家に入りわれ一人して山路にむかふ
谿水のかたはらに下りて弁当を食ひあるわれのしづけくもあるか
わが先に峠に憩ひみし人らおのおの起ちて甲斐の方にくだれり
上野原よりをとどしの暮ちかぢかと降れる斑雪をこの山に見き
冬の間は雪に圧されてありけむか一方に萱のなびき伏せるは
大岳と聞きしばかりにこの山と高さをきほふ嶺を見てみき
山ざくら咲ける木小舎は上野原にくだる山路に見えつつもとな
よそほひのゆゆしき人らときをりに吾を追ひ越して尾根路をゆく
尾根路に埃をあげて人はゆく下谷より風の吹き来たるとき

尾根路の岐るる隈に山草を地に植ふ並めて売るがあはれき

雲と山ひといろに霞む西空にほのぼの見えて残るしら雪

高尾山はけふ祭にて浅川の賑へる道におりて来にけり

古今集と貫之 偶々紀貫之の歌を評する事ありて古今集を読む

勅もちて編める古今集をいま見れば万葉集にいたく劣れり

古今集は万葉に次ぐものとして代々に崇めて今日に及びぬ

位ひくくありける君あじもが率ひて編める歌集と聞くだにもよし

正岡子規は嘗つて「歌よみに與ふる書」の中に

古今集はつまらぬ歌集貫之は下手な歌よみと子規は罵のらひき

紀貫之の歌を読み

古今集の千余首の中におのが歌百首を入れて勢ひける君

凡おほならば見過ぐしぬべき事さへも奇あやにつくりて君は詠みける

おもしろく才にまかせて詠める歌つづけて見ればはやく飽きたり

君が歌才は余りて見ゆれども飽き易きかな心添はねば

ありのままを詠みたる君が歌見れば型になづみてここに触れず

古今集には紀貫之の志賀越の歌二首ほど見ゆれば

京都より近江に出づる志賀越の道の歌読めば君と親しき

貫之はまた土佐日記の筆者なり

をみな子の筆と憚り何しかも土佐日記をば君は書きけむ

仏法僧を聴く

五月二十五日「佛法僧を聴く會」に加はりて上野國迦葉山に赴く

沼田は岡の上のまち紫雲英げんげさく麓田を見て坂のぼりゆく

山の間^に低くし見えて雪のこる谷川岳の耳二つとぞ

いささかは巖そばたち木の芽みだちおくるる山を見放けてぞゆく

芽ぶきおそき山にはあれどあやしきまで白けて残る山みぎくらはばな

弥勒橋みろくかかれる谷の上手かみてにてきくなだりに水は岩すべり落つ

いそいそと膳はこびくるみ僧たち今日のわれらを喜べるらし

夕がれひ寺の座敷しみたにいただきて仏法僧の声を待つかな

眼にはただ杉の繁立しみたつ谷間より仏法僧のこゑぞ聞ゆる

仏法僧鳴きはじめたる谷間には杉生も見えていまだ明るし

仏法僧ひとつ鳴きてより山の上はそこはかとなき暮れてゆきたり

知る知らぬ人とつれだち仏法僧なける深山みやまにこの日暮れたり

日の暮れて仏法僧のいくつもの声のきこゆる山の上の寺

谷々に仏法僧は鳴きいでて時惜しむがにわれは聞きをり

夜もすがら仏法僧は鳴かめどもここにとどまらむ我ならなくに

峡の道くだりゆくときすぐ上の杉に鳴くらしき仏法僧のこゑ

ここ過ぎなば仏法僧は鳴かぬとふ山門の跡を去りがてにせり

山郷

六月二十九日、野鳥の会の人たちと武蔵野鉄道にて子の権現に至り一泊、翌日は名栗の谷に下りて棒の嶺に登る

河鹿鳴く谷をゆく間もハツパかけて岩崩す音のしりへに聞ゆ

河原よりひろひあげたる滑石なめいしを売るさへ侘びし店に並べて

大岩とこかけの常陰にしてゆきのした群がり咲けるあたりも過ぎつ

谷の道のぼりつめて大きな家ありぬ柴犬の出で吠えかかりたる

下谷の杉の木立にまつはりて霧のうごくをしばしだに見む

谷間たにあひの雲居沈みて湖と見まがふまでに山は昏れぬる

山の上に暮れのこりたる高台を夜鷹かとおもふ鳥のとび過ぐ

山寺に一夜は明けて鳴かざりし仏法僧のことは忘れぬにけり

よべ遅くほたる舞ひとびみし庭を朝明けてみれば岩垣の庭

軒裏に吊れる山駕籠を眼にとめて声あぐる友よ朝のめざめに

うぐひすの飛子のむれはつきつきに枝うつりして谷にとびたり

夏草の茂れる尾根をよぢのぼり棒の折山もまろき草山

遠くより御前鋸とかぞへ来て大岳御岳はちかぢかと見ゆ

川苔山まともに見つつ草やまに遊びてをりぬ一時がほど

けふの日も暮るるにちかしかの見ゆる名栗の谷にくだり行くべし

御坂山脉縦走

六月十五日、河口湖畔大石村泊、翌十六日御坂山脉を縦走す。植松、田中、三枝、滝口四君同行

鶉の島の木立に懸る月を見てゆふべ明るき磯におり立つ

山寄りに一つ離れてともる灯を舟より見つつ思ひ沁むかな

立ち掩ふ木群は透きて明るく見ゆ大淵谷をのぼりつめしなり

山鳩は鳴きてをりしが飛びたてる羽音荒々し谷越えて飛ぶ

西とぎす雲の切目に南アルプスの雪のいただきはしばしば見えしが

大石村ひと目に見ゆる尾根に出て村に附く田畑の広きもうれし

スコップに触るる小石の音はしてわれは掘りほる敦盛草の花

十二ヶ岳節刀ヶ岳越えてなほ黒岳は遠しけふの尾根路

尾根路ゆ縦たさに見えて山かひの村は夕日に霧らひわたれり

尾根路をのぼりおりして面白う黒岳の秀を霧掠め過ぐ

いただきは天のまほらに見えながら一日雲居りき富士なかの中らは

富士ヶ嶺を思はぬ高き空に見てけふはひねもす尾根を歩みき

深谷を鳴きめぐり飛ぶじふいち十一の声はさやけし日暮になりて

御坂山越ゆる峠はたちまちにくだりとなりて草にかくろふ

新国道ひらけてより人は通はぬか石現れて清きこの路

夕刻縦走を終へバスで甲府盆地にくだる

座席より投げいださるる思ひしてバスの中に心きほひて居けり

山坂をかなりくだり来てこの谷の奥の奥の家居は見えそめにけり

乗りこめる道路工夫いへつとが家苞ようらくの瓔珞躑躅はいまが盛りか

いつよりか川に浴ひつつ走りみて御坂の山もいまは見えぬかも

夕かげる南アルプスを低く見き甲府盆地におりゆくバスに

甲府盆地をへだてて高き山村に何を焼く火か夕べ赤あかと燃ゆ

汽車の来る半時がほどを惜しみてぞ馳走の鮎をむさぼりくらふ

雑詠

日常吟

このわれに電話かかること稀なれば教室を出でてこころあはてぬ
小石川にて仏法僧をききしといふ記事を読みかへしぬその人を知れるものから
いつしかと親力よわりてゐることを昨宵よべに気づきて今朝も思ふも
山を行きよべは岩のかげにいねしといふ友の音信たよりにわれは負けたり
争ひはここにもありき将校が上官を刺ししニュースを読めば

叔母 七月下旬、郷里に病める叔母を見舞ふ

亡き母のはらから二人ながらへて一人の叔母のいまは病み臥す
あまたある子を嫁とつがせて静かなる老の境に入りし叔母はや
おとろへし眼をあけてわれを見る叔母には常に若きわれかも
瘠せやせて病み臥こやる叔母に思ひ来し亡き母のことは言はでやみなむ
なぐさむる言葉もあらず枕べに叔母のうまごらのかずをかぞへつ
けふここに別れて去なば生きてまた会はざらむ叔母に心残るも

夏日居常吟

暮 高山を恋ひつつありてけふもまた野球放送をききて暮しつ

ラジオにてこと足る今は思ほへば甲子園にゆかむねがひも古りぬ
グラウンドに日が差しきぬと放送の合間にいへどこは雨なる
精根をつくして昨日きぞはたたかひし早実さうじつのナインあへなく負けぬ
芸の上に至れる人の随筆は読みて飽かねば夜ぞ更けにける
短くしてこころこもれる随筆のひとつふたつは我も書きたし
夜学より疲れてかへり物ものしき神兵隊の記事は読みおほせてき
事毎にはかりごとくひ違ひゆき捕はれたるはあはれなりけり

初秋居常吟

日けなら並べて雨ふりつづき秋口の暑さをかこつこともなかりき
穂芒を用意せぬ妻叱りしが夜すがら曇る十五夜の月
習志野に行きたることを忘れゐて子を呼びたてき夕飯どきに
大言海の著者に酬いのうすかりし国とおもへばいきどほろしも
ささやかなる画の展覧会を觀に来たりわが年輩の人は居らずも
法師蟬しわがこゑ蹴しわが唄れて鳴くきけば生き残りたるひとつなるべし
最後まで身をいたはりし三成のこころをぞ思ふ寝ぬる間に

海沢谷遡行

十月十七日、植松、田中、飯屋三君と梅沢谷を遡行して大岳山に登る

川上に注げる滝は見えながら雨の中に橋をわたり行きたり

この峽に荒びたりけむ水のあと草はおしなべて泥かぶりたる

ひと思ひに踏み入りてより谷水をかち渉りゆくはむしろ楽しき

岩かげに紅茶を煮パンを食ふ人らこの谿にしてけふ初めて会ひぬ

岩の面を三段みきだに落つる細滝がつくれる釜の水の碧きはや

滝の辺の崖よぢのぼり釜ごとにおり立ち見つつ飽くこともなく

木に懸けし藤蔓を伝ひ攀ぢゆける友を見上げぬ岩の下より

滝壺の水口みなぐちちかく遊び出て岩魚は一つ大きかりけり

匍ひのぼりて見出でし路ゆ見おろせばこの草山はただにかたむく

ひる過ぎより雲うすれつつ谷すぢの近き山々見えわたるなり

逝く水の乏しくなれる谷見れば滝をはなれてより遠く来にける

山葵田を落ちくる水はひびきをり海沢川のみなもとの谷

くれなるにどうだん躑躅の照る見れば霧の中にてさきを急がず

大岳にかかるころ比ほひ湧きいでし霧はそのまま霽れずに暮れき

人ごゑは霧の奥にてひびきしが尾根に出でてもつひに会はずも
この谿をあとさきになりてのぼりたる人らを思ふ日の暮にしも
山小舎に二人相寄り火を焚ける人夫らは今宵泊るにかあらむ

幸
木

昭和十年

日原谷

雲取に尾根づたひゆくといふ青年に今宵会はむといひて別れき
川海苔を簀の子に干せる家見れば川乗谷の名は知りてゐき
ほそぼそと流に浴へる道は見ゆしばらくは見ゆふかき溪間に
谷の上の空にも風はあるらしも散りゆける葉の舞ひあがりたる
山の上に見ゆる家群に日当れりひと日のうちのよき時はいまか
米俵ひとつ曳きのぼるリヤカーを村の口にて追ひ越しにけり
谷筋を見放くる道の隈に出て立てるイむ村の子どもら
麦播に炭焼に村はいそがしく連れ立ちきたりあそぶ子どもら

十二月小吟

夜々冴えて盈ちきたる月今宵しも中空にして暈をかむれる
賜りしつくり菊の花は玄関の出入に見て足るべかるらし
つくり菊素枯るる頃に萌えいづる稚き芽生は花よりも親し

丸の内にまれに出でて来て気がつけば胸を張りて吾は歩みおしなり
山の話^まを友としきりにしてをりぬ或るビルディングの八階の間に
注^まされたる盃^さがあまた並びたりこの会^{くわい}にありて年嵩^{としかさ}のわれか
夜の更ち消防自動車のかへり来てとどまるガレーヂの前をゆきけり
草枯^くるる多摩川の土堤^{どて}を前^{まへ}に見て朝ごとにしげき道のへの霜

大丹波川源流

昭和十年十二月二十五日、有馬谷より日向沢
の頭を越え大丹波川源流に出づ

行き^{ゆき}ゆきて身^みは冷^{ひや}ゆる谷^{たに}の岨道^{そぼみち}に日^ひの差^さすところありて憩^{けい}ひぬ
山吹^{やまぶき}の茎^{くき}あをあをと群生^{むれお}ふる沢^{さわ}の辺^{へん}来れば寒^{さむ}き水^{みづ}おと
谷^やの上に枝^{えだ}さし張^はれるひともとの冬木^{ふゆぎ}のさくらありて見^みにけり
黄^{わう}に照^{てい}れる枯^かくき尾根^{おしね}は棒^{ぼう}の嶺^{れい}につづく萱^{かやと}処^{ところ}か山^まの間^まに見^みゆ
涸^{から}沢^{さわ}にのこる斑雪^{はだれ}をあやしみてのぼり来し路^{みち}は雪^{ゆき}にましろき
北空^{きたかみ}にゆ^{ひと}ふべ一^{ひと}ときうかび出^いでうす茜^{あかね}さしぬ雪^{ゆき}の山脈^{やまなみ}
防火線^{ぼうかせん}を切^{きり}明^あけし尾根^{おしね}にくろぐろとむらがる岩^{いわ}を踏^ふみこえてゆ^ゆく
下谷^{しただに}に犬^{いぬ}の声^{こゑ}こそおこりたれ木暗路^{このくれみち}をくだりてゆ^ゆけば
日向沢^{ひなたざわ}の水源^{すいげん}地^ちはすでに凍^こりゐて傾斜^{なぞへ}の雪^{ゆき}とつらなりにけり

雪^{ゆき}の上^{うへ}を行^いきし獣^{けもの}の足跡^{あしあと}は日向沢^{ひなたざわ}をのぼりつめてより見^みき
西空^{さいかみ}にたたなはる山^{たかね}の高嶺^{たかね}には雪^{ゆき}ぞ降^ふりける雲取^{うんとり}の山^ま
か^かの見^みゆる雲取^{うんとり}山^まに雪^{ゆき}の来^こぬまへののぼりぬけふの二人^{ふたり}と
眼^{まなこ}の前^{まへ}の尾根^{おしね}のうしろに見^みえをりて蕎麦粒^{そばつぶ}山^まはちさき枯^か山^ま
多摩^{たま}の入り大丹波川^{おほたばがは}のみなもとは巖^{いはほ}の下^{した}よ水^{みづ}ながれいづ
山葵^{さんき}田^{でん}は檜^{ひのき}の葉^はもて掩^{おほ}へれば日暮^{ひぐし}に過^すぎて心寒^{こころさむ}々^々し
谷^やの上^{うへ}の空^{そら}は暮^{くれ}れても明^ありあかるきうち路^{みち}をいそがむ

昭和十一年

二月小吟

東京に春をまだきに来る鳥のうぐひすを今朝はわが庭に見つ

雪山をこころゆくまで迂りたる夢を朝明におもふ侘びしき

いとどしく雷鳴りしころ降る雪は尺あまり積み夜半にやみにき

雪のあとを飢うる小鳥かむら消の土堤の枯生を伝ひて飛べり

河なかくくだる四五羽の鶴を見ればかはるがはるに潜きけるかも

上野山清貞氏油絵展覧会

北国に三月こもり丹頂を描ける人ぞ羨しかりける

遠く見て丹頂を描ける油絵は雪ある山を背景とせり

おどろきて歩み逃げ去る丹頂は頸さし伸べて描かれにけり

水郷風景

江戸川は曲りて流れ川上の橋は黄に枯るる土堤越しに見ゆ

浦安に船をあがりて堀沿に子ら群るる見れば駄菓子屋のまへ

水桶を昇きゆく人に逢ひたれば堀の辺に来て水船を見つ

幸 木

町裏の海苔干すところ覓め来れば冬田のうへを風鳴りて過ぐ

帰るさは今井の橋に風出でて中洲の蘆も見ずに渡りぬ

深川にバスも小蒸汽も通ひる新川端に紙鳶見つゝをり

田のうへに家群のうへにあがりたる紙鳶おびただし遠くはた近く

我もかぞへ友もかぞふるおびただしき紙鳶の一つが近く唸れる

三月雑詠

中学に自が子を入るる時の来て落着かぬ友よ我も然りき

末の子を女学校に入れしばしだにこころ落ちるてわれ老いむとす

ある夕べ温度あがりて塀かげに積める雪より蒸気の立ちたつ

十日まへいつ融くるぞと嘆きける雪は跡なし彼岸に入りて

妻として彼岸のあかき入り日をば見送りにけり聖橋の上

雪割草庭に咲きいで去年の春地におろししこと思ひ出づ

宵のうち雲ににじめる月かげの晴るれば緘し三日月にして

夕餐のあとわが子と五目並べして負越しとなるにいきまきてぬ

三月二十八日、宇都宮に赴きて

町^でに出て家を興^{たか}しし亡^いき叔父の後^{あと}ありてけふ婿を迎^{むか}ふる

亡^いき叔父の孫の婚^{よば}礼に招^まれ来ていぶかしみ見るスキーは誰^{たれ}のか

スキーもし油^{あぶら}絵も描^かく青年を婿に迎^{むか}ふと知りて笑^{わら}ましも

スキーもする年若^{わか}き婿はこのわれを叔父のごとくに思^{おも}ひてをらむ

常^{つね}うとくありし従^い弟をおもひ出^いでけふ相見ればいたく老^{おい}いたり

桂川津久井溪谷 四月二十六日、春季散策会に加はり津久井溪谷に遊ぶ

思^{おも}ひ来し清^きき川瀬にあかぐろくみなぎる水に音^ねなかりけり

山^{やま}に來れば杖にする木を樂^{たの}しみて伐^きり呉^くる友を待^{まち}つが樂^{たの}しも

枯^{かれ}生^{せい}にて春のりんだうを掘^ほる友をいたくやさしと言^いひつつ待^{まち}てり

五^ご月^{げつ}雛^{ひな}わづか並^{なら}べて売^うる店の晴^はがましきよ田舎^{いんが}町にて

道^{みち}にあひてひとおちをせぬ花嫁^{よめ}のやや老^{おい}けてみしを誰^{たれ}となくいふ

道^{みち}志^し川^{がわ}うねり流^{なが}るる川隈^{がわ}をひらきてつくる麦^{あわ}青^あ々^々し

一^{ひと}とせまへ歩^あめる尾^お根^ねを山^{やま}の際^{さかい}に遠^{とほ}く見^み放^{はな}けてけふはかく行^いく

溪^{たに}の上^のにそぎ立^たつ山^{やま}は木^きの芽^こどきいま通^{とほ}り来^きし路^ちも見^みゆるなり

四日間

夜^よおそく声^{こゑ}ひびき來^きるラヂオより知^しり得^えたること^{こと}のあはれ乏^{すく}しき

ラヂオにてさきほど聴^ききしそのま^まの記^き事を号^{ごう}外^{がい}の上^のに見^み直^{なお}す

七^{なな}百^{ひゃく}とも九^く百^{ひゃく}とも伝^{つた}ふる兵^{へい}士^しらは今^{いま}宵^よいづこに如^{ごと}かにしてゐ^いむ

人^{ひと}に聴^ききあつめしニユー^ニス^{ュー}をま^まとめあげて歴^{れき}史^し家^かの如^{ごと}く我^{われ}はうなづく

重^{じゆう}臣^{しん}ら暗^{あん}殺^{ころ}されし日^ひの夜^よ半^{はん}に何^{なに}に昂^{たか}りて眼^{がん}覚^{かく}めたりけむ

誰^{たれ}彼^{かれ}と首^{くび}相^あ候^{こう}補^ほ者^{しや}をかぞへゆき一^{ひと}人^{にん}の上^のに胸^{むね}衝^つかれたり

新^{しん}聞^{ぶん}により少^{せう}しづつ異^いなれる記^き事は朝^あ起^ききて息^{いき}つめて読^よむ

愈^いよ^よに事^{こと}は決^きまりぬといふ噂^{うわさ}は電^{でん}を見る思^{おも}ひして聞^ききぬ

蹶^{けつ}起^きせる青^{せい}年^{ねん}将^{じやう}校^{がう}らは三^{みつ}日^{にち}経^{けい}て反^{はん}乱^{らん}部^ぶ隊^{たい}となりをはりたり

東^{とう}京^{きやう}市^しと隣^{りん}接^{けつ}地^ち域^いの汽^き車^{しや}電^{でん}車^{しや}とどまりぬと聴^きけばまして静^{せい}けき

伝^{でん}え聞^きく上^{じやう}野^の山^{やま}にた^たかひありし日^ひの街^{まち}の静^{せい}けきはけふに似^にたりけむ

機^き関^{かん}銃^{じゆう}の音^ねきこえなばその方^{かた}の物^{もの}か^かげに居^ゐよと声^{こゑ}ひびくなり

兵^{へい}に告^つぐる声^{こゑ}はラヂオに幾^{いく}たびか繰^く返^{かへ}されぬ朝^あ闌^{らん}くるま^ま

馬^ば上^{じやう}より兵^{へい}を諭^{ごん}しゐる将^{じやう}校^{がう}をラヂオに聴^ききて眼^{がん}に描^{えが}くなり

歴史家は徳川末期にたぐへてぞ蓋しや書かむ幾とせの後

六月十九日

多摩川べりの校舎にて

ゴリキーのいのち果てしはきのふにて今日は日食にこころいきほふ
雨蛙庭の立木に鳴きいでて日食の時刻は来向へるらし

流れ飛ぶ雨雲の間に時ありて淡つけき日を見れば虧けたる

日食のラヂオリレーを聴きて

ラヂオリレーは関西の晴を告げながら照りつつ虧くる日をば讚へつ

ラヂオリレーは浜松に来てとの曇り日の隠るへる嘆きを訴ふ

ラヂオリレーは女満別にゆき著きてあたりはいたく昞り来しといふ

月のめぐりに輝くコロナはさもあらばあれまたたきそめし星が恋しも

月のうしろに隠れしもしばし次ぎて聴けば日は右下より照りそめしとぞ

上越国境谷川岳

夜の明に登山客をあまたおろしたる汽車はトンネルに入りてゆきたり

夜をこめて汽車にて来たりそのままに山に向ふありここに立寄るもあり

滝二つ経のぼり来り沢なかの石の河原はしろじろさびし

雪橋は山の映画に嘗て見きこの沢を来てけふはじめてあひぬ

この沢を降り埋めけむ深雪の橋となりて残る激つ瀬の上

いちはやく雪橋の上へのぼり立ちおくれたる友に呼びかく

雪の面の波うてる見れば雪溪を幾たび風の吹き過ぎにけむ

雪のこる岸にまぢかく夏なかば虎杖の芽はふとぶとと萌ゆ

いつの日か土もろともに谷川になだれし雪はけふも融けるる

この上に水なしと聞き雪溪の裾曲に降りてものを煮て食ふ

涸沢を攀ぢのぼり来て前山のうしろに遠き山見えそめぬ

雪解して間なくぞあらむ熊笹も楮もなべて靡き伏したる

尾根に出て上野越後の山々の迫り立つなかに声のみにけり

見放くれば広くなりつつ流るれど利根はいまだも山なかの川

眼のまへに万太郎山そびえ立ちそこにつづく尾根刃のごとし

時ありて霧吹き霽るる谷底にあなかそけしや石の河原の

七月日常吟

きのふけふ山に在りし間に將校らの死刑はいづこにて行はれけむ
將校らの死刑は終へしことをのみ伝へて時と処に触れず
あながちにいのち惜しとにあらざらむ死おくれしは昔もありき
つつましく霊まつる家を今宵しも妻は見て来てわれにいふなる
山行きし昨日の疲れは癒えねども山の映画の会に来にけり
熊狩にいでゆく村の人々のよそほひゆゆし槍も持ちたり
たはやすく弾丸に撃たれて雪山をまろび落つる熊は映画に撮られぬ
撃ちとめし熊を映画にをさむると立たする見ればあはれになりぬ

八ヶ岳高原

七月二十六日、八ヶ岳高原に遊ぶ。鈴木賤、池田勇、長女次女四名同行

沢水に石踏みわたり木蔭より日向に出でて足はずむかも
郭公は遠き木原に鳴きたてど二こゑ三こゑにて止みにけり
蓮華つつじの花過ぎしかどこら辺を占めて生ふる木はみな老木なり
夏草は露うち払ひ折り敷きぬ腰をおろして朝食を食はむ

浅間山に爆発おこり夏雲を凌ぎて凝れる煙ゆゆしも

浅間爆発を誰いふとなく丘の上に遊べる人に伝はりゆけり

峡出づる千曲川の水ゆたけきに水上の山を遠く見放けぬ

千曲川見おろしてくだり行く汽車に立つ川浪を羨しがりつつ

京都洛西西芳寺

八月二十三日、竹村林工藤原田四君の案内にて洛西西芳寺(苔寺)を訪ふ

苔の上にさるすべりの花ちりこぼれ雨のあとにて苔になじめり

おそろおそろ国寶の茶室にあがりしが風爐のかたへに行きて坐りぬ

あけ放つ表障子にしきられて庭の木立の枝組ぞよき

敷きつめて氎と見まがふ青苔は径のうへに伸び出でむとす

ふかふかと青苔生ふるひとところ細き木立は浮けるごとしも

夢想国師

落ち激つ水をありありと眼にゑがき山辺に石を組みし人はや

苔寺の奥の座敷にくつろぎて寄書をかく今日いとまあり

昭和十二年

晩秋初冬吟

庭隅のあかめがしははひと朝の霜に黄ばみて日ごとかがよふ

さげ潮となりてあるらし冬枯の川原のさきを流れのはやく(多摩川)

洲崎には職業野球戦けふもありスタンドより冬の海も見ゆべし

朝よりぬるき風吹き散りおつる鈴懸の葉を街上に踏む

高山に雪にうもるる偃松を寝入るまで床におもひつづけみき

夢のごとく考へみしが早実の野球部に子の入るを許しぬ

蔑めるナチスドイツと防共協定をなさねばならぬ時いたれりや

座談会が表現形式となるまでの時のうつりをわれは見て来ぬ

赤石山系縦走吟

八月五日、田中和平、伊藤憲二郎両君と伊那大島より小渋川溪谷を溯り、同夜小渋湯に泊る

谿間に河原二ところ見えそめぬ今日はじめて見る小渋川なり

雨の日に猿の出づるとふ岩山は荒き川瀬をへだてて仰ぐ

流れ入る鹿塩川の水清くして小渋川を見ればやや濁りたり

山行かばこころせよとわれに言ふ小母よ煙草を買ひに立寄れる店の

村はづれの郵便局のまへ大き樹の蔭する路に憩いて行かむ

岨路をセメント袋負ひてゆく馬のうしろにしばし従ふ

小渋川に注ぐ荒沢が吐き出せし石しろじろと夕かげに見ゆ

翌日小渋川を溯行して赤石岳中腹の荒川小屋に二泊し、その間に赤石岳に登る

河原のほか行くに路なく小渋川の瀬々涉り来てはや幾時か

昼日中小舎守る若もの寝そべりて爐の火も絶やしがちに小舎守る

赤石よりくだり来し若き学生は頂の荒れを息つめていふ

前山の上に時照する穹を木の間より見てのぼり来にしか

二国より吹きあぐる風の渦巻ける尾根に出て吾は死ぬかと思ひき

山馴れし友のあとより遅れじとわれも駆けぬく烈風の中

草原にはりつくごとき山小舎は風くぐり抜けし路に見おろす

山に來れば寝るも爲事のつとぞといふ小舎守の後より寝るも

今宵寝て明日はまだきに山の際に明けゆく富士の山を見るべし

白みゆく空に影たてる富士の嶺に雲は寄りつつ朝焼けにけり

高山のお花畑を夜ゆきて罨にかかれるこの兎あはれ

けだものの兎といへど夜々歩く路きだまりて捕へられける

吹く霧は音に出でつつ岩の間にむらさき深き千島桔梗の花

いただきを均して石に埋めたる三角標さへ霧に濡るるか

下谷へ路よぎり飛ぶ雷鳥の落ちてゆきたり偃松のなかに

八日、駿信国境の尾根を縦走し三伏小舎に泊る

山半ば壊え崩れゆきて押しいづる大ガレの上に声のむ吾は

苔の上にかすかに見ゆる踏跡は偃松帯に入りて失ふ

鳴きなきて木の間づたひに近づける山椒喰をわれは見にけり

木隠れに何うごくやといぶかしみ山椒喰は寄りて来ぬらし

谷の末に貧しき釜沢の家居見ゆ高山にしてなつかしきかな

山奥の貧しき村の釜沢を一昨日過ぎて嘆きたりしか

尾根づたふ今日はゆくゆく霧のなかに見え来る山を幾つか越えむ

谷に向けてなだるる尾根を行く時ししばも霧の吹きあげて来る

水あらぬけふの尾根路や水筒の乏しきミルク分けあひて飲む

山かげにしみ出づる水朝に見て尾根にかかりてよりひねもすあはず

暮はやき外風呂にしてくろぐろと影たちきたる山はきびしき

外風呂を出でかねてゐる真上には狭き夜空に星ひかりそむ

山小舎に今宵餛飩をくふこともまたなき奢りの一つかと思ふ

懸樋より落ちつぐ水のさやさやと聞こゆる小舎にこの夜眠らむ

九日、登路を異にせる両君と塩見岳頂上に会ひ、大井川西俣の櫻島小屋に下る

偃松になづさへる霧の濃くなりて眼の前の岩に雷鳥出でぬ

沢づたひ登りくる友らまだ見え立ち来る霧にこころ痛しも

呼子笛鳴りたる谷にたちこむる霧に向ひて声よばふなり

わが声にこたへておこる呼子笛霧ごもりつつたちまちに止む

眼凝らして待ちまてる友は霧の中岩壁のうへに影あらはしぬ

雷鳥が啄みし青き松毬か風蔭みちの草の上にて

蝙蝠岳のいただきは広き石庭にて霧ひとしきり外れてゆきたり

雷鳥が二羽あひつれて遠ざかる石庭のさきに霧ぞ動ける

大井川のみなもとの谷深くして向ひ嶺にかかる滝を見しのみ

歩み入る針葉樹帯に踏む苔のやははとして路下るらし

仆れ木は捨ててかへりみぬ山なかに実生の樅の木々うひうひし

夕かげとなりゆく山にまつわり来る蚋のたぐひを憎みつつ歩む

大井川の東俣は山の上より見て西俣の谷に日暮くだりぬ

山行きてわれは飽かなくに山小舎の泊も今宵かぎりぞと思ふ

高原行

十一年盛夏、高原列車にて八ヶ嶽高原に赴く、車中にて

うすうすと窓そとのもの見え来れど夜明けの汽車に疲れつつをり

中央線長坂駅にて

フォームに降りまちかき山をあふぎ見ぬ上り列車はいまだ入り来ぬ

柵ちかくおりゆきし人らおのがじしカメラを向けぬ駒ヶ岳の方に

いただきに今朝さす日かげやははしかの駒ヶ岳をいつかきはめむ

機関手もフォームに降り来かたり出づるにぞ八ヶ嶽の方を更に見直す

八ヶ嶽の中腹をけき巻く雲は頂より見ば雲の海とぞ

裾野辺にここはあれども八ヶ嶽は北空にしてなほ遠きかな

歳末歳首吟

夜はただ山旅の歌にかかはりて十日あまり火鉢のそばに坐りぬ

爆撃機つらなり飛べる遠べには雪の富士立てる写真を愛す

飛行機より撮れる写真をよく見れば地震を避けて畑に人むらがれり

中流にけさも浮ぶは渡りきてこの多摩川に住みつける鴨か

向う岸の人のおもてはわかねどもわが如く鴨を見て立つらむか

いきいきと児童心理をあつかへる小説を読み夜半も飽かずも

み冬なほ燕住みつく浜名湖の家居をぞ思ふ寒き今宵は

北地より寒さに追はれのがれ来てそこにとどまれる燕なるべし

二日日常吟

節分にやや晴がましき面して豆撒きし日も過ぎにたるらし

昨日の夜の追儼の豆をおもひ出て残り少きを夜くだちて食む

紀元節のけふはやばやとルクザック背負ひて土手をゆく人のあり

書きためし歌論をあつめ今読めばよく書きたりと思ふ節あり

一月にはや咲きそむる白梅の花のさかりはいつにかあらむ

満州よりかへる部隊のけふもあれど行き来帰らぬ兵ありぬべし

某氏の記事を読み

西安に事の起りし明け方に鳴りはためける銃の音はや
西空に夕雲なびき明るきに夜学はじまる季いたりけり

余寒小情

汽車にのりてはや興奮せる渡満兵の一人の甥にいつまた会はむ
渡満兵らとともに興奮せる群衆はいつかわが前に立ち塞がれり
世の更けて会果つるころにけふの昼見送りし甥の顔がうかび来ぬ
嫁ぎゆく姪を送りて自動車にいま馳する道はむかし歩みき
告別式のかへりの路の橋の上にはやき流をしばし見おろす
路の上に群るるをとめらに近づけば映画女優の家の前なる
奥武蔵の知れる山々を春山と眼にゑがきつつ今宵楽しも
この夕べ家並を越えて落ちゆける彼岸すぎの日はいつまでも燃ゆ

神風号飛行

森林より湧きのぼる雲を空たかく避けて飛びしといへば思ほゆ

人住まぬ砂漠の上を日暮まで飛びつづけたることかなしも

東京中央放送局

犬養首相放送記念にこの額を書き十五日後に既に世に亡し
マイクロフォンの前に坐りてわが声のつたはる先をおもふことなし

仲春小吟

結城先生『美術家墓所誌』を書きあげて人のよくせぬ事をし給ふ
表紙にはこほろぎ一つ見返しに二つゑがける書ぞ親しき
抜打にしたる政府の手際をばあやふく吾は譽めむとして止む
彼岸すぎに見かけし燕冴えかへるけふの寒さにいづこに潜む
年々に咲く著莪の花伸びわろき躑躅をめぐり今年も咲けり

五月居常吟

けふ一日ラヂオを前につたへ来る当選者の名を飽かず聴きけり

ヘレンケラー女史 三首

生きぬきて今日ある女史およしとうやまへど講演を聴く心おこらず

をとめ子の鬚撫づる女史の写真をばひと目見て足り再びは見ず

ものいひの華はなやげる女史に比くらぶれば静かなりけり塙保己一はなわほきいち

郭公のむかしばなしは人間にんげんの親子おやこの縁えんを嘆きて説けり

いにしへの如何いかなる人か郭公の前生ぜんしやうを人の親と見にけむ

風荒れてむし暑ごごき午後ごごに今年まだ聴かぬ行々よしきり子の声おもひ出づ

採とる歌の数の少きにいらちつつ今宵また歌稿を幾つか見む

六月居常吟

林内閣更迭 二首

悪声あくせいは耳に入らずとよそほへる内閣もつひに倒たふるる日来ぬ

首相一人を悪むといふにあらねども庄おし来るものにあらがはむとす

帰り来て畳きのうへにのどのどとまろび寝ねるさへ奢おごりに似たり

年へを経てけふ図書館に入り来れば人に気圧けおさるることもなし今は

図書館しらに調べものしてたはやすく疲るる吾や老いづけるらし

小説をむさぼり読める青年のかたはらにして早く倦うみぬる

倦みやすき吾をあはれむこともなくしばしば地下室ちかしつにおりて休やすらふ

玄関に靴をみがける少年がまづ現はるるこの映画ぞよき

盛夏居常吟

一日ひとひおき書きつぐ四十枚はんせつの半切をきほひて夜半に書きをはりたり

妻として旅ゆく汽車に見おろして鬼怒川の水の減りしこといふ

妻として二日ふつかのあひだ旅行りょこうししかへりに思ふは日の永ながかりしこと

けき咲きし白百合の花くれなるの花粉なまなましき雄蕊をしべを吐けり

こもり居て暑まひるき真昼あひるか井戸水を薬罐やくわんに汲みてかたはらに置く

旅行記を書きなづみつつ感傷おに墮おつる言葉をいたく侘わびしむ

道みちを来て脱ぬぎし上着うはぎはかかへもち電車でんしゃに乗りぬはばかりもなく

暑あつき日の夕ぐれどきに客きやくありて水撒まく妻を庭に見にけり

向むかひ家のラヂオを今宵聴きをればあたりにおこるもろもろの音

校正けいせいのルビを夜更よふけに電灯でんとうに近づけ見つつひとりごちつも

庭隅ていごに残しし草生くさふ夏たけて稗草ひえくさが伸び露草つゆくさが咲きぬ

おほよそ
大凡の経過は推して知れれども戦ひといふはまがなしきかも

人に

賜りし藤椅子の上にわが子らやかはるがはる掛けて飽くこともな

晩夏初秋吟

たたかひに召さるる馬か連なりて暑き路上をけふも行きけり

たたかひに出で行く馬は人よりもこころにぞ沁む今の吾には

みなみ風吹ける日ぐれに板縁を踏む足裏のあはれけうとき

既にして葉の裂けそめし茎の上に芭蕉の巻葉抽き立ちにけり

金槐集の句索引を読みあはせあるわが声きけばうつけの如し

戦死者をラヂオが読みあぐる昼つ方われは校正の筆つづけをり

一つ咲きて愛でし水色の朝顔はあまた咲く今になりても飽かず

たたかひに出でたつことをたはやすくおぼゆる年にさかりぬ吾は

こもり居てわが聞かぬ間に流言は遠き国へにもつたはりけらし

昂ぶらず送られてゆく若者を路に追ひ越してかへり見にけり

萩が花まばらに咲けるくれなるは朝明に見ればまぎれなむとす

ことかよ
召されたる友は東京に居らめども言通はねばあまた日を経き

ごひやく
上海に死にし兵の名を新聞に五百とかぞへあまるぞあはれ

すのぼん か めだか
水盤に飼へる目高は一つにて彼岸の今日にいまだ生きをり

つき
次に来るものを何ぞとおもひみればこのたたかひは易しと言はむ

仲秋居常吟

はやい
燈火管制をよきことにして早寝する今宵の吾を咎むるなかれ

を
燈火管制けき終へしかば十五夜の夜わたる月を巷に仰ぐ

つばめ
野球戦にかくまで群るる人見ればゆとりのあるをさいはひとせむ

きのふけふ
をととひは飛びぬし燕あらし立つ昨日今日を前にして帰りけむ

みやま
秋はやも庭に来あさるうぐひすを見つつし思ふ深山の寒さ

しの
クリークに死にし兵らをかなしめば中の一人をまして偲ばゆ

おとうとが告げ来し村の戦死者の家は知れどもその見は知らず

晩秋居常吟

きつづ
傷きてかへる兵らと駅にあひ足をとどめて見送らむとす

夜明^{よあけ}までかかりてものを書きをへぬ今宵は吾は大阪に居^ゐむ

東海道線にて

きほひつつこの線路^{せんろ}をば西行^{にしゆ}きし兵の幾人^{いくたり}か早も死にせる

雪の上を柴はこぶ人^いら息^{いき}つげる絵の前に来^きて今ぞ安らぐ

初霜^{はつしも}は今朝^{けさ}は降りぬと聞きしかど遅く出^いで来^きて路歩^ろみをり

露霜^{るしも}に色づくみれば烏瓜^{いちな}市中^{なか}のこの藪^{やぶ}にありしか

夕雲^{ゆふぐも}の中をくぐりて落つる日は山にうすづく時の間燃^もえつ

流行歌^{りゆうか}にうつつをぬかす人々を蔑^あみたりき過ぎし日おもへば

元義^{げんぎ}のこだはりもなき歌柄^{かへ}をほめて読みつぐ今宵^{ひと}一とき

題平賀元義画像

書きすててあとかへりみぬ歌ながら残りて君が名をとどめたる

昭和十三年

歳暮居常吟

戦地^{せんち}より寄せし葉書^{はがき}に私^{わたくし}のこころは書かずあはれわが友

上海^{シャンハイ}市外^{がい}に对^{たい}する人のなき稲^{いね}を見て長息^{ながいき}しといふ兵^{へい}は農夫^{のうふ}か

この年^{とし}ごろわが見^みぬ雁^{がん}がたたかへる兵^{へい}らの上^{うへ}を飛^とぶといふかな

地^ちに伏^はして二発射^{にはつう}たぬ間に突撃^{とつげき}にうつる兵^{へい}らに生死^{せいし}はあらず

芭蕉^{ばしやう}葉^はは霜^{しも}枯^かれしまま垂^たれ伏^ふして家居^{いえみ}するときのわが眼^め去^さらずも

ひるすぎてまだしと思^{おも}ふ庭^{にわ}の上^ののひかりを見^みれば日はうつろひぬ

うろこ雲^{うろこぐも}はびこる空^{そら}に冴^さえわたる月^{つき}とは聞^きけど見^みずて寝^ねにける

戊寅年頭小吟

友の家^{とものか}まかづる時に元日^{げんじつ}の日光^{ひかり}はさしそめぬいたく傾^{かた}きて

江東にて三首

正月三日^{しょうげつさんじつ}すでに煙^{けむり}を吐^つきてある工場^{こうば}を橋^{はし}の上^のに見^み放^{はな}けつ

河^かの神^{かみ}を齋^いくにかあらむコンクリート^{コンクリート}の岸^{きし}にも今^{いま}に松^{まつ}を立てたる

浦安^{うらやす}に來^きて路^{みち}に踏^ふむ貝殼^{かいがく}のくだけやすきを今日^{けふ}も踏^ふみゆく

或る一つの民間説話を解き得たるこの喜びは何にたぐへむ
この短き民間説話にいにしへの人の息吹はこもりたらずや

葛西浦安風景

田の畔くろのこれらの松のいただきは川むかうより眺めてぞ来し
着装きよひて路につれだつをとめらは古里ふるさとにして見るが如しも
さきほどより白鷺一つ飛ぶ見ればこの田この村の上うへ去らぬらし
海うみごしに霞む品川大森のうしろ辺へに見ゆる丹沢たんざわの山
もろもろの品しな並べ売る店さきは掘割ほりわりにして舟一つ行きぬ
川むかひ家やな竝は低き町なかに冬木に竝ならび火の見ぞ立てる
浦安へわたる渡船とせんにてこの宵の潮時しほどきをきくはいかなる人ぞ
宵更よひふけし川べりを来て終点に待てる電車の灯ひはなごましも
如月小吟

山鳥やまどりの羽はねをしみじみ美しと見て寝ねし夜半よはに地震なみ揺りにけり
いねしまま闇まなこに眼まなこを見ひらきて地震なみやむ時を待てば安けし

雪降れる北沢小舎の写真をばけき新聞に見て一日恋ひをり

たたかひの始まる前まへに死しにたくなる衝動しょうどうを時にもつといふかな
おびただしく死ぬる支那兵をおもほえば土に帰るといふ言葉あり
大黄河に架橋をはりて試運転の貨車に乗り来る兵らは笑わらめり
クリークをたたかひ済みてうつしたる写真しゃしんを見ればいたく明あかるし

早春小吟

慌あわただしくわが知る人ら死しにゆきて今年ことしはや四よたび送りまをしぬ
年たけてうとき友らと知人しりびとの葬ほふりの場にはに会あふもさびしき
晴れつづき後あとに雨降り春雨とおもほゆるまで土しに浸しみぬる
曇りつつ時に雨降りいつしかと彼岸ひがんに入れば慰まなくに
この写真のドイツの子らが薪負ひ山くだる見れば日本に似たり
たはやすく地図うへの上より消えゆける国ひとつありて冬も去いぬらし
ウイーンより伝つたりきたるヒットラーの声をただ勇ましとのみ聴かず
学校の口答試問たちあに立会たちあひてこの子らを皆入れたくおもふ

陽春小吟

時おきてけたたましく起る砲の音朝にききしがあやしみもせず
 軍属となりて征く君を思ふだに取りのこされしごとき心地す
 支那にある君を忘れてをりしとき詩の石刷を送りきたりぬ
 長男を訪ひ来る友をわが客と思ひて玄関に起つこともあり
 けふ初めて勤めにいでし長男の帰りを待てば日の暮るる遅し
 帰り来て勤めのことをいひいづる長男はやや興奮しをり
 こもり居の一日の暮にころぶして投げいだす足の寒からず今は
 兵営に二日とは居ず発つ友を駅に見出でて目交したり

晩春小吟

屍を焼けるけむりののぼり立ち読経のこゑはかすれゆきたる
 靴の音とどろかしつついづち指し行く兵ならむ映画をはりぬ
 水盤に子がとりて来て放ちたる鯰は大方石にかくろふ
 かたくなに老眼鏡をしりぞけて在り経し吾も夜は懸けつつ

林檎ひとつあかくゑがけるポスターを電車をおりむとしつつ見直す

病む父の声音は常と変れどもおだしき顔を見れば安らぐ

茅倉尾根

深谷を埋むる霧が尾根みちに這ひあがり来てたゆたへるはや

甲府にて

富士山の雪の面にさす夕茜しましして上の雲にうつれり

初夏小吟

対校野球に島田に遠くゆく子ろに勝ちてかへれとわが言はざりき

野球戦を見に来む友と恃みつ小沢俊夫君のことを子にいふ

小遣をいささか多く子にやりて島田の町を時のま思ふ

ふる里へ父の看護にかへしたる妻をおもへり夜の更ちに

この四日日ぐれに疲れかへり来て妻ぬ家にしばし坐れり

わが知れる御坂山塊をけふ行きて十一のこゑを君聴くらむか

田植唄今宵ラヂオにききをれば腹より出づる太き唄ごゑ

逆光線に撮れる写真にくろぐろと軍艦見ゆ遠き島見ゆ

東京にいまだも残る藁屋根にそそげる梅雨を立ちて見にけり

嫁ぐ子

わが妻がとつぎ来れる年齢ごろに近づきぬらしあはれ一の子

一の子ををとめさびぬと見しことも思ひ出となりて今は嫁ぐか

この家にい寝るも今宵ばかりぞと嫁ぎゆく子にいひてほほ笑む

一の子を嫁がせてなほ残りある四人の子らと今宵まどみす

一の子を嫁がしめたる気疲れをかたみにもちて妻と坐れり

嫁ぎたる子がはじめてのおとづれを外より帰れるごとく思ひき

孟夏小吟

I君上海戦線より写真を送り来る

頬髯を生やせる君が見てゐるは何にかあらむ机の前に

郷里にかへりて 一首

道のへの楳にまじり咲くつつじ誰かもて来て植ゑたるごとし

朝飯を食すあひだだに汗垂るる吾はワイシャツを憎みて著けぬ

汗垂りて街を帰り来ワイシャツを脱がむほかには思ひはあらず
夜半さめて考へしこと朝床におもひかへせばけむりの如し

信濃市の瀬にて

昭和十二年八月中旬

送られてこの峡いづるつはものの眼には燃ゆる青葉繁山

大陸にわたりたたかひこの峡をまぼろしとしてゑがく日あらむ

たたかひに兵を送りて孟蘭盆の今宵しづけき山峡の村

昭和十二年五月昇仙峡にて

東さし空かけりゆく熊鷹のまぎるる方に雲ぞたなびく

遠江秋葉山行

八月四日、途上にて、天竜川増水

渡頭にてバスをおりたる眼の前を平押しに押しして行く濁り水

高波に乗りかけしぞとおもふ間に舟は瀬を越えて押しながされぬ

天竜をわたす小舟にいのち生きて還れる兵と共に乗りけり

瀬を越えて流のままに流したる舟はおのづから岸に寄り来ぬ

峽を来て天竜川に流れ入る気多川もまた赤濁りせり

みなぎりて峽押しくだる天竜の濁れる水は時に激ちつ

天竜の濁る流れに谷川のそそげる見れば早く澄みぬる

八月六日、秋葉山上

たたなはる奥山竝の上にして入り日のあとを燃えたてる雲

行き遠る川を見おろし気多谷を恋ひつつぞある山の上より

一目だに見放けもせむと尾根を来て信濃路の山は雲がくれたり

天竜の谷をへだてて山の際をしろじろ激ち来る水は見ゆ

晩夏小吟

こころみに老眼鏡をかけてよりかけねばものを読まずなりたり

蝉を襲ふものの名を子がいふ聴けば蝉のいのちも安からなくに

句索引を読みあはせある子らが声をりをりあやし読み直さしむ

或る時のわが表情が亡き父にいたく似て見ゆ鏡のなかに

俘虜の顔にあやにく友を思ひ出て術なかりしといふも畏し

八月中旬、宇都宮停車場にて

出でてゆく兵は皆よき顔だちなりこの一人だに死なしむべからず

見送りの女学生の方に眼はやれど歩廊をゆきてしづけき兵士ら

わが後より停車場を立つといふ兵ら日ぐれの町に別れて立たむ

仲秋小吟

あらしのあと庭に差す日は雲行きのみだをさまらぬ空より差せり

落ち散れる路の青葉をなごり風吹きたててをり家出でくれば

省線電車とまりぬと聞きてひきかへす街はあらしに白けきりたり

慌しく戸をさす店も見つつ来ぬ午後十時すぎてをぐらき街に

秋早も砂丘地帯に降る雪を空より撮れば白浪なすも

下船してただちに伏射する兵の見据うる方はここに写らず

たたかひて行くさきぎきに歌を詠むつたなきものはばからず詠め

風立てば向ひの屋根に吹きつけて落葉飛びとぶ日の差せる中

東海道筋

十月十五日、島田町の佐塚実太郎君訪問

自動車のあかりに見れば雨そそぐ草の啜を走りあるらし
名を聞けば矢倉ヶ岳はあすの朝見ることにして今宵は寝ねむ
夜半に着き君が家居に朝さめて向へば見ゆる矢倉ヶ岳か

十七日、鈴木恭作君と東海道筋を歩む

東海道の或るところを今日友と行く幾日ぶりなる秋日を浴みて
ちかぢかどどろき過ぎし特急車見送りてまた歩みいだせり
山寄の思はぬ辺にも幟立ち秋祭する彼の村この村
山の際に立てる幟をけふ見ればいかなる神を祀るともよし
墓石をきぎむ石屋の店のまへ行き過ぎむとして足とどまりぬ
山方よりひと筋流れ来る水の濁れる川の橋もわたりぬ
たたかひに送りいだししつはものは幾たりならむ静かなる村
常聞かぬ土地の名が道に聞え来てラヂオの天気予報をはりぬ
歴史の上に名をとどめたる幾人かこの道を行きぬ西より東より
静岡を立ちてはるばる来るバスを待つはわれらと村の人のみ

昭和十四年

駿河国瀬戸谷村

十三年十月中旬、島田の人々と藤枝在の新湯鉾泉に遊ぶ

一方を水たぎちゆく河原の清きいさごの上に降る雨
川浪ををりをりバスの中より見て瀬戸谷川の水上に来つ
次郎柿枝もたわわに生りたるを見つつ行くだにゆたけかりけり
田の中の路は石段につらなりて鈴木恭作君が宿れる寺見ゆ
山はままだもみぢに早き頃ながら雨の後にてしづかに暮れぬ
ゐながらに向ひに見ゆる山みちを時には人の通りてゆけり
この奥に村ありと聞けど焼畠の蕎麦の花見てかへる日の暮
夜の更けて先にわが寝るとなり間にいつまで語りつづくる友ぞ

歳末年頭小吟

いね際にももの食ひし夜の夢にして草の茎嚙み口歪めぬき
古里に父が残ししそこばくの畑をいまだ見にも帰らず
祖父のことは知れども年を経て名もつたはらずそのみおやたち

芋銭先生うせんはまだ若くしてこの河童かっぱの眼めをば鋭く糸がきましける

凱旋うみの日はいつぞやと言ひあへる戦友と居て君は歌詠む

講和なきたたかひなれば年老いし兵はしづかに帰還するらし

たたかひの記事のあひだにたべものことに及べばうらなごましも

鹿島砂丘

昭和十三年十月下旬、銚子より帰るさに

利根川を前にして立つ砂丘さきゅう見ゆ二つ並びてしづかにも見ゆ

砂丘もとは因ひぐれよりしづかなれども利根川を日暮に見ればまた静かなり

霞ヶ浦風景 正月二日

籠負をひて橋のてすりに倚る小母をばを舟に見あげてカメラにをさむ

二発にはつほど銃つつこだまして舟の上に見かへる方は黄なる蘆原あしはら

舟の上に音つたはらずなりながら気動車は湖うみに浴ひて走れる

水底みなそこに冬ひそむ鯉わかさぎあみいまここに公魚網うみにあげられにけり

帆を張りていたく傾かしげる舟ごとに人ひとりづつからす貝搔く

街道をしづかに語りゆくだにもものものしけれ冬の小村は

湖うみべりの二階うみにのぼりもの食ふと日のあたる方に皆あつまれり

かはせみは水すれすれに飛びゆきて見きはむる間まもなく消えたり

三月小吟

記き紀きを読み迦具土かぐつちの神をわが知れど火たふとを尊たふとびし親には如しかず

感傷おに墮おつと知りつつ子かかに閑いはる一通いの手紙を書きをはりたり

停車場うらやに受験まぼろしに行く友を送り来て若きものらは常に楽しも

羨うらやまむことならねどもいにしへは同じまぼろし幻まぼろしをとみに見にけり

三月としどしに年々寒き日はあれど大方おほかたは慌あわたたしく過ぎぬ

大阪行途上

木曾川たかむらの石の河原に春日さしながれ片寄る岸のたかむら篋

関ヶ原はだれの山の裾はだれまで斑雪ほどへ降り程かひ経て峡の草家にも見ゆ

杉村すきむらに斑雪はだれはいまだ残りたる近江あふみざかひの美濃の山なか

東海道を日のあるうちに通り来て大阪に著くころにしぐれつ

河内国遊行

ふるくに かはち
古国の河内の国を電車にてゆくさきさきぎの御陵の杜 みささぎ もり

ほうかく
方角を取りちがひみていらだたし大和川の見ゆる堤にのぼる やまとがは

みささぎ どて
大阪へつづく舗装路をよこぎりてみささぎの杜は眼のまへにあり

みささぎ どて
御陵の土堤の枯生に萌ゆるもの土筆はいまだ芝にまぎるる つくし

つか
のぼり立つ前方後円の墳にして河内の田居は平らかに見ゆ たひ

かほち やむら
急行電車ふたたび過ぎて田のなかの駅に見まはす河内の家群

市井漫吟

仙台をひとたび去りてまた行かず三十余年あはれ経過す

を おもかけ
わが居りし三十年前の仙台を面影にして子をば行かしむ

ひるひなまらち
昼日中街の上に来てほととぎす鳴きたたりき今は如何にか いか

うへのやま
図書館に宵見し月は九時過ぎて上野山くだる路を照らせり

よる ろめん
公園を夜ゆく時に路面より湧きのぼり来る地下電車のひびき

おと
地震にもこのごろ馴れて床の上に遠のく音を夢ながら趁ふ お

よべ
昨夜揺りし地震のことをわが妻のいひいづるままに思ひおこしつ

さかのぼ
川の神を問題にしてゐる吾はいづれの世まで 溯るらむ

も こやす
夕かげにかがみて見れば石の面に子安の神はありありといます

きは
いつよりか軍需景気といふ声を空吹く風のごとく聞きをり

しゅつしん
死に際に心しづめて書けるあり『ドイツ戦歿学生の手紙』

なげき
新聞にインテリ出身の兵といふ言葉のありて吾は見つむる

ぬかるみ
『よい本が読みたい』と戦線に長息ける太田伍長もたたかひ死にぬ

たれ
泥濘にたたかひつづけたたかひは汚なきものと誰か言ひたる

むね ふね
海わたる小鳥の群を艦の上にあやぶむ兵も自が行方を知らず ゆくへ

わんない
そそり立つ山が困める湾内に水上機竝ぶこの写真はいつこ

くなん
いかにしても戦線にある兵士らの苦難は吾のものとしがたき

平賀元義歌集編纂以後

ひとまろ
人麿を詠みたる歌があらはれて元義の歌また一つ殖ゆ ふ

元義に人麿を詠みし歌あるをおのれうべなひ声いだし読む

いくしゆ
時をりに見いだされつつ元義の隠れたる歌なほ幾首ありや

去年編める元義歌集に十ばかり歌書き入れてかたへに置きぬ

悼井村英次郎博士

ともどもに高尾山にて鳥が音を聴きし一年後の今日すでに亡し
山に来て鳥が音をきき医博士とおもほえぬまで喜びましき

春より夏へ

春の雪庭につもりてしらしらと四月五日の朝明けわたる
隣り家のラヂオのこゑは今宵降る雨にしめりを帯びて聞ゆる
ブリツヂをなだれてくだる群集にこころいらちて今朝も見あぐる
四月なかば遅れて芽ぶく山椒の木とたのしみが枯れてあしなり
きびきびとはこぶ野球戦を前にして周囲の人をわが忘れみき
つぎつぎに職を得てつひに満洲にわたりて行ける友の誰彼
遠く見て川向ひなる麦畑のけふは昨日より黄ばめるらしも
二年間の浪人生活をかへりみて切なかりしと面伏する子よ
憂鬱に過ぎしとのみは思はねど二年間は子に長くありけむ

幸 木

子に向ひきびしきことを言ひたりし記憶も今は過ぎにけるかも

わが子らがバッテリーとなりてたたかふを群に交りて吾も見てをり
夜のくだち何か訴ふる猫のこゑ名を呼べばちかく寄り来て啼けり
むしあつき二日後のけさの涼しきによみがへりたる如く家出づ
田に引きて水は減りたる鬼怒川を今年もわたるけふは一人にて
上空にみだれたたかふ飛行機が射つ機関銃は音もうつろに
食糧投下のパラシュート開き落ちつつぞ日に照る見ればかくもさやけき

夏日漫吟

花嫁を迎ふる室にたぐへつつ心はもたむ老いづく吾も
わが耳に伝はる噂も大河に立つさざ波の一つなるべし
わが一生日英同盟より東京会談に経行くあひだに盛過ぎたり
出征の前後のことをいささかは興奮して書ける作に親しむ
草むらを猫ぢやらしの穂が抽き立ちてきのふも今日も家居る吾は
わが教へ子、満蒙国境に逝く
北支より満蒙国境にいつの日に移動せし彼か戦死をしたり

在りし日の投球動作にともなひて戦死せし彼が面影に立つ

わが行きても敵をめぐがけて進むより外にあってなき曠野なるらし

東日天文台 二首

天象儀の星ぞらを見てゐるうちに遠のきゆきて吾を囲める

もろもろの象を夜空に忍がきつつ星を見しより年は経にける

弾丸の下くぐらざりきとしづかにいふ法学士にして特務兵の君は

あひつぎて兵はかへるとききしかど日露戦役のかの頃に似ず

村に来てけふはじめてあふ若ものに戦のことは敢へて問はずも

戦地よりかへれる村の若ものにマラリヤの話をききて別れぬ

下野古峯神社行

バスの中にいづくの人か徒歩ゆきし古き記憶を語りあふかな

小山田のいまだ穂に出ぬ稲を見ていひあふ人ら憂ふるに似つ

中の間に神をまつりて藁葺のこの一棟にいつよりか住む

神社にいていただく飯のまづきこと誰もいはねばわれも黙せり

山の端の夜空ひとところ明るきを足尾の灯かと問へば否ちふ

足尾より夜道して来しといふ声が午後九時すぎて寝間に聞こゆる

晩秋初冬

雲の中に月ある燈火管制の今宵は光る家々の屋根

非常管制いまだ解かれず軒下の暗き方にて何かいふこゑ

もみでたるあかめがしはに屋根越しにいまさしきたる朝日の光

日ぐれまで坐りつづけてたちあがるわが眼に沁みて照れる三日月

傾きて光冴えたる三日月を幾たりの人今宵見たりや

中谷宇吉郎博士著『雪』

零下二十度の室にこもりて雪つくり世の常事のごとく記せり

雪つくる話を読み昂ぶれる心にすがりしばし居りけり

雪つくるはなし畏し人生への用不用をば何人かいふ

昭和十五年

常陸四度滝行

十一月十二日、茨城の長谷川、藤田両君等の東道にて袋田四度の滝に赴く

けふの旅つれだつ歌の仲間にはわが長男より若きものあり

山の間をいでて東に流れ去る久慈川を今日はじめて見たり

瀬々の波汽車に見おろし久慈谷を一時間あまり溯るべし

水戸浪士が隠れしといふ家を見ぬいかに思ひて隠れみにけむ

四度の滝こもれる山のつづきには紅葉のなかに巖の秀も見ゆ

四度の滝の上のあたりと思ほゆる空のまほらにかぶ白雲

もみでたる峽に入りゆく鉄道を生きもののごとく吾は見てをり

川なかに巖むらがるどころ見て近づく滝は音に立ち来る

迫りあふ山の彼の面にあらはれて岩の四段を落ちくだる水

巖の面を四段に激ち落ちつる水みあげ見おろす木々をへだてて

時ありて枝をはなるるもみぢ葉のあるものは滝の水に打たるる

人さには山野にあそぶ時にしてここに集へるは水戸あたりの人か

道の辺に蕎麦と棉とを刈り伏せて蕎麦の実は黒く棉はましろし
まむかひの山にのこれる夕明り湯浴むる間にもかげうすれつつ

動乱

たまさかに昼はぬくとき日がありて冬至とならばこころ和まむ

停車場の空地をいつか拓きみきけふ麦の芽のほのぼの白ふ

一つ座に正しくすわりあることの難き世かなといひつつ眠る

二食にも堪へむよわれはと言ひいでて火鉢に寄れる子らに笑みかく

動乱の海の彼方より還り来て気狂ひし人を何とかも言はむ

疲れたる顔して還る列兵はわれと幾何のへだたりなしも

閣僚が居並ぶ写真をひと目見て去りゆくものをこころに趁はず

貨物車の一つの屋根に消え残る雪が目の前を通りすぎたり

友の便り記しおかむと思ふうち人出入して二三日過ぎぬ

高野山金剛峰寺蔵『丹生明神像』

夢に見て丹生明神を描きしとふをみな顔にさす翳はなし

二月居常吟

朝起きて灰の中より堀りいだす燠は何かなにに似てあらずやも
あからさまに口には言はず行爲にて政治を批判するものを恐れよ
世に処しておのが拙なき才能をただに憐れむ時ならなくに
將軍が帰り来ぬものもありといひて帰還部隊を迎ふるぞよき
中学にすすむ子をもつ親ごころあはれと見れどはやく忘るる
風荒れてけぶらす空にかずかずの煙突うかび今日は山を見ず

湖畔

一月二日、霞ヶ浦に遊び藤田君宅に一泊
小ぎかなはかへり見もせず捨ててある冬田の畦うみを湖まで行かず
夕靄は湖うみよりあがる葦原に鴨撃つ人ら入りてゆきたり
日の暮れて田に飛びうつる鴨鳥の羽音はすれどはや暗き空
一爲ひとしごと事をへたるらしき不断ふだん着の藤田君と朝の挨拶かはす

一月三日、茨城県石岡町に長谷川君を訪ふ

相つれて枝うつり来る小雀こがらめに湖うみべの村をゆきてあひたる

目標の煙突をいつか後あとにして冬田の道を歩みやまなく

冬ながら青々とせる曼珠沙華の葉を前にして何といはむか
夕靄の立てる田の面もを見放くればすがすがとしてけふは遊びぬ
夕空に影たちきたる筑波嶺のやや南寄りに日は落ちぬべし
歩みつつ話はつきぬわがどちのしりへにありて夜行くもよし
かくばかりこころ通ひてわがどちと村の夜道をまた行かめやも

甲府市外散策(一) 三月十五日

甲府市を離れし路に雪のこる八ヶ岳やを裾野まで今日こそは見め
はね返す桑の細枝ほそえに注意してわが一行は土手めがけ行く
石河原なかに挟みて釜無と笛吹川の板橋わたる
二川ふたかはを渡れることにこころ足り堤の上に見放けて戻る
板橋に清き流れを見おろして雪代水ゆきしろみづにいままだ間のあり
飛びたてど高くあがりて鳴くとせず雲雀は畑に幾つかるるも

鰍を貫ふ

鰍らは清きまさごを呑みけらし噛みつつをれば齒にさやる音
鬼怒川の清きまさごを呑み吐きて育つ鰍を思はざらめや

甲府市外散策(二) 三月二十四日

前山まへやまのかげより見えて北岳が間の岳と雪の肩並べたる

土堤どての上にむかひの村を見渡してかぎろへる中の屋根々々の波

川下かわしもに電線でんせんがいたくかがやけるひと時ありて土堤ゆき疲る

幾ときか土堤あゆみきて春の日光ひかりに酔へるもしるしおのおの顔

平野へいやより眼めの前の峡にながれ入る富士川の瀬に立つかげり波

鰍沢の町離れたる道を見よ日かげる峡をたちまち高く

この岸に船たむろして富士川をのぼりおりせし世も人も過ぎぬ

許山氏宅

屋上おくじやうにのぼり来りてあなさやけ國かこみ立つ天あめの高山

夏日往来

今宵ふる雨が埃にしみゆきてうるほふ路を思ひつつ寝む

青萱あおあなにからみて咲ける昼顔の花を見てより暑き日つづく

暑き日ひるの午ひるどきになりても音の絶えし小路こうちをわが歩みをり

塩はゆきおのれの顔を意識して帰る巷に西日ぞさせる

夜のくだちい寝ねむとしつつ何すれぞ眼鏡の玉を吾は拭ふきゐる

わが持てる地図に名の見えぬところにて小戦闘に仆るるもあり

大蔵高丸山系縦走 五月十九日

真木鉾泉

寝ておもへば夜道よみちをかけてかへり行く友らの上に月は照るらむ

山の夜よのしらじら明けに見えながら富士はまぢかし峡かひの門との空に

路のなきなぞへをのぼり息づくや若葉を洩れて散りばふ日かげ

分けのぼる萱かやと処とのさきに路あらむ山の背に見えて人ら歩める

枯れ伏せる萱処かやとのうへに寝まるべば顔を掠めてゆく風の音

赤埴あかはにの山にかさなり真木まきしげる黒岳は空の一角いっかくを占む

うち霧らふ甲府盆地を遠く見て山また山の上にいま在り
富士ぎくから五月なかばに咲きさかる蔭に憩ひていのちを延べむ
くんだり来て谷の奥なる家を見ぬここに住む人をあはれまざらむ

阿左美沼

八月二十四日、田村氏の東道にて桐生の阿左美沼に遊ぶ

沼の辺に迫るがごとくとどろきて両毛線を汽車とほる音
沼の面に立つきざ浪を逝く水の如しといひて眼をあそばしむ
この沼に幾千となくある鯉を一つ釣りても吾はよろこぶ
この吾に釣らるる鯉を不運なるものぞといひて一つ釣りたり
必ずしも釣とはいはず又の日にかく静かなるひと時のあれ
なかなかにあがらぬ人はけふの日の暮るる間惜しみ釣るにかあらむ
平より夕日ながれて人ら皆あがれる沼の遠べを照らす

万葉の可保夜が沼をこのあたりに想定せし橋本直香の翁

桐生にて大川壽美子を偲ぶ

たたなはる彼の山の間にはるべき命と知らずとつき行きたり

よろこびも束の間にして山の間に行きてかへらぬ壽美子おもほゆ

鮎 八月二十一日、前橋市外田口の築に遊ぶ

池に飼ふ二三百の鮎一方に頭を向けてうごかぬ時あり
ゆたかなる水の流れを築に堰き更に座敷の下をゆかしむ
川の上の座敷にすわりある吾の眼と平らかに水ながれ来る
わがすわる座敷の下をゆく水の音こそなけれ身にひびくもの
築の簀にうち上げられてくる魚を待つ間は楽し座敷にありて
築の簀にうち上げられし一つの魚飛沫がかかるたびに唸囁ふ
塩焼のつぎに魚田の鮎を食ひ水を眺めて飽くとせなくに
今日のがが奢といへど白飯と数匹の鮎の料理にて足る

晚秋小情

模擬爆弾の吊玉と見ゆる二つ星南東の空に今宵著しも
平凡なる花咲きいでて幾鉢か菊つちかひし妻は笑へる
木炭に話題が触れてゆくとときに何か恥らふごとくいふこゑ

最高の名誉最低の生活といふ語句のひびきが何よりも善し

街路樹を行くゆく見れば根まはりに黄葉きばをこぼせる銀杏の稚木わかぎ

普茶料理に腹充ち足りたて萩外莊の方に足はこぶ十一月十日

十一月十日の午後に萩外莊の門をいで来る公用自動車

昭和十六年

武州金沢にて 十二月八日

昨夜よべに来て宿れる浦をたちこむる狭霧の奥に何がこもるや

ゆうべより今朝につづきて立つ霧に浦はわがゐる辺へのみ明れる

朝霧は吹き剥つぎがれゆく築岸つぎしの上に道ありて人ら往き来す

吹かれ飛ぶ穂絮を見れば一むらの尾花はいたく風にさやげり

霧晴れて宿は出でしが音たてて風ふきこもる道の辺の森

高きより見おろす追浜飛行場に降りる機体は音もなくして

二方より狭められつつなほ残る冬田の中を電車が行くよ

時を得て工業地帯に立ちかはり金沢八景いくつか残る

軽井沢滞在数日 十五年十月

露霜は起きいでぬ間にとけそめてあなさやさやし濡るる庭芝

から松はいろづきながら散るものか枝々が今朝骨だちて見ゆ

すがれたる芒のかげの竜膽は花にひらき切るちから早や無し

傾ける高野の末は黄に枯れてめぐらす山の麓に尽きぬ

山の間に背面を見する妙義の山あはあはとして暮れてゆくべし

高原を夜半過ぐる汽車灯明りを草におとしてほのぼの温し

遠近の宮と呼びつぎ浅間嶺の裾野に齋く木高きやしる

街道に浴へる家村の庭に干す乏しきものを疑ひもせず

甲府市外湯村及昇仙峡 一月五日

田の中に湧きこぼれある湯を惜しと佇ちて見るあり手を浸すあり

惜しげなく湯氣を立てつつ田の溝をながれある湯に面を近づ

濯ぎもの朝はやくよりする見ればいたづらに湧く湯と思はなくに

枯山のいただきの松のやや右にしらしらとある昼の月はや

けふの日が暮れ入らぬさきにかの月は峽の上にて照りいづるらむ

峽の上に来てかの月が照りそむる頃にわれらいづくにあらむ

落葉せる木立をあらみ下谿に見えてこまれる鴛鴦十数羽

いづくより来れる鴛鴦と思ふにぞ清き谿間を飽かず見おろす

夜となれば山にあさりにゆくといふ鴛鴦はいま谿の淀にうかべる

市井漫唸

膝がしら毛布につつみこの夜らをこもるといへどころ勢ふ

店頭にごのろ見えぬくれなるの小豆を珠のごとくに夢む

空地利用に播くは何ぞと思ふだにただならぬ世に在り馴れむとす

貧しくてわが先祖らにはありにきと思ふはあながち自慰にはあらず

老もまたよしと言ひつつ若きにはあらがひ難し若きもの伸びよ

二・二六事件直後に入学せし生徒らをいま送りいださむ

白梅の花を往き来に見て通る或る日は足をとどめて仰ぐ

映画二題

飛行機より撮れる市街に爆弾は見るみるちさくなりて落ちゆく

雪溶けて村一ぱいの子供らの画面に吾は眼をしばたたく

口頭試問

かくばかり集れる兎の親たちは吾より若く思ほゆるかも

口頭試問してゐる吾の抛りどころ崩るるとき瞬間があり

問ひ答へしてゐるうちに兎の顔のほぐれて来るに心なごめる
型のごとく問に応じて来たる兎にわれ面向けてまじまじと見つ
ふた親をうしなへる兎と知りて後何を問はむかと暫しためらふ
この学校を落ちたらばなどと真顔にて惨きこと問ふ吾や何なる
三日ほど口頭試問をつづけたる後の疲れは言ふべくもなし

新芽

二もとの柳の芽ぶく時に来てこの小路を今年も通る
一つにて近く啼くよりも遠くから喚びあふときの仏法僧のこゑ
昨日は見ず今日か萌えでしつまぐれの二つの芽生こもごもに見つ

甲府より下部へ 一月五日夜

去年ここらを通れる時の印象を夜の電車に反芻しをり
山なかに月夜に来たり湯をあみて思ふはけふ一日のことども
朝の霜きびしき峽をくだりくる青年はけふの勤をもつか
家々の石がちの庭あはれみて朝飯前の散歩をはる

幸 木

この峽かこめる山のいづべより差せる朝日ぞ宿の下の路に
山みづが荒れしながらの石河原霜白くしてわがこころ痛し

一月六日 富士身延線波高島にて

川上に空はひらけて見えきたる山はハヶ岳雪の遠山

早川が狭間を出でて富士川にそそぐあたりの河原遠く見ゆ

富士川谿谷を経て駿河大宮へ

富士川をたえず右に見て電車内にもまれつつゆく正月六日
富士川の狭間を来れば稀にある田の面はきよし冬寂びにつつ
彼岸より此岸にうつり来たる瀬の眼にさやさやし冬の川みづ
何時間か後に駿河の海に入る川としもなし瀬々に立つ波
冬枯れてただしづかなる裾野原狭間をいでて今は見るべし
広きひろき冬の裾野の片隅に土に即くなす大宮の町
富士山をまうしろにして神さぶる浅間神社に來たり額伏す
露出せる熔岩のかげに湧きいでて霊ぶる水の止む時なしも
湧く水はひとところのみにあらざらむ池に溢れて川をなすかも

みやしろを罷^{まか}出て来れば冬きぶる富士登山路をゆく人もなく

田子ノ浦 一月七日

富士山と松のはやしが映^{うつ}りあるこの川は既に写真にて知れり
海ちかく二つの川が落ちあひて上げ潮どきの今はよどめる
枯れがれの高草なかに頬白を追ひたつる子らか頭だけ見えて
冬磯の芥を見れば潮みづにきよまはりつつ親しみおぼゆ
麦の芽の瘠^やせしを傷^{いた}むこともなく畑のまさごを手もてすくひつ
砂山のかげにいつよりかある村の街道も古り松並木も古^ふりぬ

上州二日

群馬栃木の県界なせる小流^{こながれ}を地図に見て平野のあひだに探す
織物の作業過程を息^{いき}つめて見あぐる吾は童^{わらは}のごとし
織物の海外進出を説きやまぬこの人がもつ夢をたふとぶ
のぼりゆく眼の前にして差しとほる日すぢのなかの櫛の若葉
つつましき村のをみならの山あそび山の日向^{ひなた}にき蕨を折る

山火事と時のま見えて春山に煙はあがる二^{ふた}ところより

わが知れる谷川岳を北かぎる雪山並^{ゆきやまなみ}の中に求めむ

いにしへの小新田山^{をにひだやま}にのぼり来てあな遠白しいづこの工場^{こうば}の屋根

おしなべてみどりに向ふ野の上に利根の川づらひとところ見ゆ

浅間嶺の北空そめて春の日の落^おつる間惜^ましみ橋にたたずむ

身辺日々

世評高き記録映画を日かず経て人のいひいでぬ頃にわが見つ

歓声も画面^{あふ}に溢^くれ来るときは何の獣か吼ゆるに似たり

まどろめば一停留場^{ひとていりうば}のあひだにさへ頭掠^{あたま}めゆくもろもろの影

荒川美谷本村附近

あゆみ来て憩^いふ堤の片おもて蜂のいとなみを見るべくなりぬ

なかなか流れ見えこぬ堤外の路^{おほね}に大根の花をすがしむ

水落ちて底あらはれし廢川を何にたぐへて吾は見むとや

いにしへのわたし場去らずる店に春のすゑ来て感傷はなし

釣りし鮒魚拓となして掲げたる人の誇はそのまま容れむ

夏日往来

家かげに浴ひてゆきつつ湿もつ風過ぐる間はこころやさしも
庭の面の明るむまでに雲焼けて梅雨もをはりとおもふ日の暮
外米にこだはりもちて在り経たる日さへはるけし馴れつつ今は
やや倦みて吾は見おろす球場に直せめぎあふ少年選手等
若ものはかくぞあらなむ出水田に夜は舟泛けてあそびあるとぞ
河童らを凡なごましき存在とおぼほししかなや芋銭先生
み祖よりもち伝へたるこころばせ疼くがごとく動くことあり
録音せる信濃の国のわらべうたいかななる子等がうたひたりけむ
まぢかくに立てる教会の十字架を嘗て一つの表象と見き
幾分か警戒をして聴きてある人の話題もただならなくに
トーチカを前にして立つといふ譬いまの現に徒に思ふな
立秋とおもへる今日を庭のうへ渡らふ風の木々にひそけく
暑きあつき日の夕暮の安らぎにあはで今年の夏もをはるか

幸 木

乙字滝

磐床の上をたひらに流れ来て阿武隈の水たぎちどどろく
川千鳥いづこにかゝて滝の音とどろく中に一こゑ徹る
汽車にして会津に越ゆる山なかのいたるところに藤波の花
よりあへる山中宿の一たむろ青葉燃えたつなかにしづけし
磐梯の南おもてに筋ひきて残れる雪は幾日たもたむ
西空に低くし見えて飯豊山雪を光らす雲のひまより
湖べりの枯生におそく咲きいでてくれなる冴ゆる翁草の花
藤田久仁夫君宅にて

人々の嘆きはただに聴かねども水底の稲は腐りてあらむ
この家をおとづるる人は塀そとの水渉りくるその水の音
出水田の上を田舟に吾のせて漕ぎゆく友の今は憂へず
遠くにて雷鳴りしあと水の上をたたきて降れる日の暮の雨
水の面に葉をおしあげてほそぼそと伸び立つ蓮は蕾をもたず

濁り波あげある湖うみにいどむがに発動機船沖きして出づ
綸垂るるわが足もとに跳びよりてここの蛙らにものおそれなし
なみなみとひろぐる水は日の暮れてあやしきまでに光を放つ

仲秋日常吟

年ごとに一たび登る高山を同胞ほらからのごとくわれら噂す
青空をあやふく忘れ去るまでに雨と曇が幾日つづきし
風荒れし庭の片方かたへにあをあをと乱るる葦は午後に刈らむか
洋服のままに畳にころぶして畳なき國をおもひこそやれ
國王が亡命をしてゆく先に何が待てりといふにやあらむ
午後十時つたはりてくる音もなき吾家の空の十五夜の月

身辺吟

母の死をいまだも知らず現地より甥のたよりが初めて著きぬ
十月に入りても雲は多くして午後は大方おほかた乳いろの空
一家族あつまり語る宵ありて誰が中心といふこともなし

茹でてある粟一ふくろ買ひもちて夜の街上をしばらくありく
田の草を取れる画面に移りつつわが期待せる唄の洩れくる
高やまに死にし人らをあはれめど國のうごきはしばしも止まず
変貌せる今の日本を思ふにもただならぬ世とつししみ生きむ

昭和十七年

晩秋

わが庭にいろづきそめし藤の葉とあかめがしはの黄と相照らふ
日のひかり衰へてより暮るるまで間の長しこもりて今日は
秋霧の立ちておぼめく宵空にまたたく星の数の乏しく
鶉どりがこの日頃よききへづれる森は用水に浴ひて茂れり
枯尾花なびくかたへに榎木のもみでし見れば浄らけきもの
市中の高きところよりふり放け見て博物館の屋根いつも豊けし
夢の中のおのが卑怯の振舞をおもひ出でても口に難し

弟上京

この夏に妻を死なしし弟に会ひてまづ問ふはその子らの上
浅草に去年のごとくに連れだてる弟は今妻なしにして
博物館に母ときたれる処女子は洋装ながらつつましく見ゆ

病む子

病める子が二階にありてしばしばもしはぶく夜半に独りさめ居り

十一月末帰郷

つぎつぎに見えてくる灯を誰々の家のと知りて村の道ゆく
わが知れる人の孫らも葬ひの座につらなりて吾老いむとす
究極の覚悟をなせる村人を前にしてわれ愧づるものあり

浅春吟

霜枯れし菫の在り処もわかぬまでもりあがりたる庭の乾土か
わが庭の冬木にさがる蓑虫をある日かぞへて記録にとどむ
外の面より闇しくらしと声かけて帰りくる妻よ宵は浅きに
西空に夜に入りてもたなびける春の白雲電車より見ゆ
哨戒機いづくともなく音立つる午前四時ごろに吾はめざむる
この日ごろ朝炊ぎして硝子戸になじむ光を凡にし見めや

疲れつつ帰る夜みちに病みこやる子の面影のしばしは消えよ

逝く春

煙突の遠きは霞む逝く春の空の奥より飛行機の音

つばめ
燕らの巢喰へる家は知らねども今朝も飛びゆく舗装路のうへ

あした
この朝隣の庭に音のして掃き応へある柿の落ち花

利根川を中に挟みて麦の穂の出揃ふ野良を飽かず見て来ぬ

うまこ
ふる里の叔父の孫は今日あたり南に立ちて征くといはずやも

次男克二逝く(一)

みらのり
夜学よりかへる道程のながくして胸いたきまで亡き子思ほゆ

めにし子は病み臥してより草花をいたく愛でにきと妻のいふかも

常の如く部屋に坐りてわがをれど父よと呼びてくる子にあらず

かた
市街地にのこる畠に麦熟れてこの寂しきは遣らむ方なし

坂西博士を悼む

めしひ
盲たる坂西博士と二十年余仕へし夫人とが並べる写真

学究の道もきびしも著述のためなほ二三年は生きたしといひき

偶成

まさき
真幸くけふも在り経て水の辺に飯盒炊爨の兵ら楽しむ

また
いのちの全けき人をことほぎて御身がくりましし日本武尊

次男克二逝く(二)

たの
死にし子を思へば苦しきのふまで何を待みて生き来し吾ぞ

今更に何をか言はむ死にし子をただにあはれと思ふばかりぞ

死にし子にはじめて会ひし夢さめて夜の明方をはかなくなりぬ

すこや
死にし子も健かにして在り経たる去年を思へば夢の如しも

亡き子には吾は必ずしもよき父にあらざりけらし今に思へば

梅雨前後

午過ぎひるて野菜を買ふと集れるをみならの声高くなり来つ

雲多き夜空をうごく幾すぢの探照光は中断なかつたたれつ

梅雨季つゆどきの夜空ににじむ月を見てい寝る今宵の夢田まどかなれ

梅雨の夜の更けてラヂオに響きくる寄席よせの落語にゑらぐ人ごゑ

夏花と見てうたがはぬ庭隅の山吹はいつ返り咲きせし

裸にて寝まるぶ部屋を吹きすぐる風は時をり蒸暑むしあつくして

次男克二逝く(三)

死にし子はおのれ死ぬると知らずして心平らかに臥こやりて居りき

死にし子が幼き時の振舞をあと先もなく思ひいづる夜か

死にし子のあはれきは身をさいいなめど残れる子らを守りてゆかむ

若くしてみまかりし子の面影はわが生よのかぎり消えずあるべし

次男克二逝く(四)

子の骨壺ささげて帰る路にして知らぬをみなぬかの額垂れたまふ

死にし子を由縁ゆかりのふかき母上の辺へに葬りて帰り来れり

父母をおきてかの世よに先立ちし子のあはれさはいふべくもなし

生きてあらば今いかにしてゐるらむとけふの暇いとまに亡き子を思ふ

子のために親は瘠すると今更に亡き子の上にかけて嘆かふ

大凡おおおよそにすこやけき子と見すぐして思へば弱きところありにき

この後は子とゆくりなく道に逢ひ連れだちて家に帰ることなし

路の上に踏みさざれに踏まるる細石にし吾を譬へてなぐさまず居り

故里にて

故里に日暮に帰り子の墓には明日詣でむといひてくつろぐ

この二月兵にぐわつに召されてはやはやも軍曹となれる子を今日は見む

午過ぎひるて幾日いくかめ目にか差す秋の日の光は弱しひがし側がはの壁に

雁来紅

夜々よよ盈みちて九月十三夜に近づける月のひかりはいよいよ冴えたり
たはやすく風にたふれし雁来紅かまつかは色づきてよりあまた日を経ず
夜中より北の風ふき庭の上を落葉は朝もうごきやまなく

昭和十八年

面会

十月十六日 前橋予備士官学校訪問

伊香保呂の相馬ヶ岳のいただきを包める雲は朝よりならし
幾たびも道をよこぎる山水やまみづの源みなもとはみな榛名の山か
赤松のはやしに隣りたち並ぶ校舎を見れば涙ぐましも
いま過ぐる村は高原たかはらの一部にて四五里先さきに日の照れるところ見ゆ
わが前に立てるはもとの子にあらじ五月いつつきあまりここに学まなびて

西空

このごろは夜中よなかの地震なみを次つぎの日に誰たれか言ひいでて思ひいだすよ
東京よりわづかに見ゆる連山れんざんに雪来くるころはわけて見ほが欲し
西のそら黄になるときに二日月三日月と二日つづけて見けり
ただ一首の歌にその名をとどめたるわが下野しもつけの今奉部いままつりべ与曾布よそふ
乏しきを世の常としてつつましく生きし御祖みおやに吾は学まなばむ

小寒

粉炭こなずみに火が燃えつきて程々ほどほどにぬくき火鉢は立ちがてなくに
小夜床に吾は入りつつ足先のあたたまる迄きめてはをらず
長かりし山の常陰とかげを後にして日の照る道を今こそ行かめ
木の洞に潜むが如き一年ひととせを痛みいたて壊やぶることもなかりき
わが家の空を蔽へるくる雲を朝夕あさよひに見て嘆きたりしか
若くして死ぬる命いのちはすべもなし二人の霊たまよこの家を守れ

伊東行

昼風げる冬の入江を見おろして汽車は停まる伊豆多賀の駅
つばらかに入江の波を見るまでに網代の駅に汽車くだりゆく
波の音時に聞ゆることあれど眼のゆく先は冬枯の山
伊東に来て二本古き松を見ぬ蓋し祐親すけちか以後のものなり
天城嶺あまぎねの頂はつか群山の上に見えつつ暮れてゆくなり
この宿の庭くに来る鳥さだまりて低木に目白喬木たかぎに鶉どり

木の宮をゆく先々に祀りたる木地屋きぢやが喬すゑはいかになりけむ

牀上

この真昼下まひるしたの間まに来てわが妻にはずみてものを言ひをるは誰たぞ
枕上まくらがみを移る日かげは午ひるすぎて西斜にしななめよりわが額ぬかに差す
山やまの手ての空を今だに朝なさな渡る鴉あさあかねの声は聞ゆる
晴るる日は寝ながら見ゆる横雲あさあかねに朝茜あさあかねさし夕茜ゆふさす

幻住

人群むるるここの衢ちまたに年を経ていま見るごとく何が残らむ

羽後象潟の佐々木久輔君より餅を贈らる

佐々木君丹精たんせいにして年々に餅もちひを賜ふ羽後の國より

この白き餅もちひを見れば象潟きさかたの田たの面もを埋うめて降る雪思ほゆ

染谷進歌集を戴きて

この人ひとに後嗣あじとなしと聞きかなしめ誰たれか伝ふる『染谷進歌集』
正まさしくも師風を継げる君らちこが歌埒ま越えぬ間に君死しににけり

伊勢行幸 旧臘十三日

いかさまに思ほし召せか大君ろ御輦を伊勢に進めさせ給ふ
大君は御先祖の神に何事か聞えあぐべく御幸したまふ
草葬の臣なる吾も大君の御旨畏こみをろがみまつる

一人の叔父

叔父鈴木平次翁二月三日に死す。地方の隠れたる篤農家の一人なりき
ただ一人残れる叔父と崇め来て八十四歳になり給ひける
をぢと呼ぶ甥姪らすべて十余人おのおのをぢを崇めて措かず
ただ一度國事につきて憂ひ言洩らしし叔父を吾は忘れず
孫二人召しのまにまに一人は去年一人は今年送りいだせり
村のため叔父もいささか尽ししと聞くさへ喜ぶ甥なる吾は
若き日の叔父が憧はこの吾が承け継ぎぬらしつくづく思へば

読書

本読まで一日二日は居らめども十日ともならば寂しからむか

いにしへの人の息吹を身近くに聴く心地して夜半も読みつぐ
いにしへは辛くも人に本を借り写ししからに本を崇めき
たはやすく本を求めて二三日持ち歩きしが後は知らずも
大方は読まであるべき本ながら机上にたまる月に何部ぞ

涓滴

冬されば西向天神の崖の面に夕日の差すも束の間にして
埴輪より脆きいのちに後ありて埴輪を土より掘りおこしたり

明治名作展

『鮭』を描き『いくさがたり』を描きたる明治中期の写実精神
郷土部隊の平時の行軍能力をわが子にききておどろきやまず
冬山に船材を伐ると朝まだきあがる響は天に届かむ
古は昼より夜にうつる間を逢魔が時といひて忌みける
手にもちて久しかりける眼鏡をば懸けて驚くその温もりに
しめやかに降れる小雨を先立てて近づくと春に明日かも会はむ

病棟吟

この一篇を国際聖母病院の小此木博士に捧ぐ

昼も夜もい寝て過ごせばおのづから中心となる三度の食事

寝台の下に夕餉をはじめたる附添家族の二人のをみな

或る患者が夜に氷を噛む音は獣に似たりめざめてきけば

重症の患者入り来て一室の空気が俄かに動揺しはじむ

われ遂にここに寝起して一月を過ごししかども物思はざらむ

朝ひかり地平にはつか差す頃は哨戒機は一つならずとどろく

三冬尽春の彼岸の中日を明日に控へて雨ふりにけり

節分の日よりおほむねよく晴れて今日は四十五日ぶりの雨

桃の花わが枕辺に挿してより葉の萌えいづるあはれなりけり

この室にて自然咲はわが椿のみあとは室咲のとりどりの花

両の脚今宵しきりにたゆくしてこのままに吾はい寝べくもなし

あまたたび患者が出入する中を彼岸過ぎまで臥りつづけぬ

日本風土讃

一年に春分秋分の日をたてて人の心をゆたかならしむ

沈みゆく春の彼岸の大き日は紅燃ゆる燃えつくるかに

春の山大き小さきおしなべて笑へる今日は霞はき吐く

染井吉野真盛りにして市中の高きところをかきけぶらすも

襞々に雪のこる山ちかく見て桜に遊ぶ人はひねもす

咲く花をあはれといひて出で立ちし兵らいつくの陸にたたかふ

湧きかへる春の潮の音きけば常世の國と在り通ふらし

長男宏一逝く

わが妻を励す声がいっしかに吾を励す声に変れる

子の臨終静かなりきと聞くだにも目頭熱くなりて涙す

子のために何一つ手を下さずして告別式をけふ終りたり

長病みて世に経る人を知るからに子らが命は脆くありけり

在りし日の子の面影が或る宵はかなしき迄に吾に迫り来

死にし子は吾に隠れて歌を詠みなかなかよき歌を遺せり
吾のあるところと子らのある処異なる今は言の通はぬ

○
秋出水荒れに荒れたる稔り田の跡を見て佇つ吾にやはあらぬ

風塵

窓近く来りて何かつぶやける一つ雀の朝夕のこゑ

一日の或る時刻には雀らは見ゆるところに一つもをらず
かずかずの言葉の端に世の動き吾に伝えて人かへりけり

予後

春の日を吾は二階にこもりつつ力張り来る時をこそ待て
かへりみて弱くなりたるものかなと恥ぢて思へど吾は臥れる
病み臥して花火の音を聴く時は靖國の神をしぬびまつらく
今朝ひびく哨戒機の音は子をなくして去年聞きし音と異なるや否
この夕べいづくともなく吹き起り浪の寄る如すゆく春の風
屋根屋根のあひだに萌ゆる新緑いたぶる風は今日も止まなく

裸木と見るまでに葉を落したる檜の芽ぶきは何よりも遅し
川を憶ふ

わが知れる川といへども幾たびか面変わりして今に至れる
川水の減りゆく並に水の神いつよりとなくいまさずなりぬ
櫓の音が篋越しに聞えしといふはこの川のいづくなりけむ
いつとなく彼の富士山も水減りて海に真直に流れ入らずとふ
出羽の最上九州の球磨と相並び三急流の一の富士川よ

療養日々

病み臥りかく在る吾は軒にくる雀にさへも劣りたるらし
この真昼二箇月さきの夏雲とまがふしら雲北の方に立つ
病室の午すぎにして沼に似て音一つなき時のありけり
ここに来て既に十日か新聞を絶えて見ねども寂しからなく
いそいと癒えてかへりゆく少年の後姿見れば涙ぐましも
常臥の身には侘びしき長き夜の始まらむとする午後七時ごろ

寝台に平たくなりて寝る吾をあはれとぞ思ふ夜半に目ざめて

寝釈迦仏博物館の硝子戸の中におはしき今もおはすか

のどのどと刻煙草を喫ふ人を迎へて室の空気変りぬ

孫の悖子祖母に伴はれ来て歌をうたひて吾に聴かせぬ

うたふ歌は父の学校の校歌にてむつかしき歌詞も誤らず歌ふ

金星と相連れて西に傾ける月さやさやしきさきさき五日の月

病床詠

しばしだも動きやまぎるうつし世の片隅にしてわが立嘆く

譬 喩

路の上に吾を蹴仆し踏み躪る土足の主を誰とも知らず

小暮理太郎氏稿『東京より見ゆる山々』

東京の高きところに登り立ち見ゆる山々を数へて飽かず

一年に二朝三朝のみ見ゆる山も洩らさず数へたまへり

東京より見ゆる山々百余座と数ふる中に郷里の山もあり

唐人も『樓に上れば山在り』と山見ることを喜びとせり

籠 居

枕辺に小卓据ゑてある吾は別に世帯をもてるごとしも

六畳をわが室として常臥の吾は二階をくだりてゆかず

何にまれわたくし事にかかづらふ時ならねども吾は病臥す

我家よりみなみの方に森ありて梅雨に煙るが屋根越しに見ゆ

庭の萑去年にまさりてふとぶとと茂れる見ればいたくたのもし

西空にうるこ雲立ち夕焼くるこなたを黒き雲流れをり

夜覚めて通る電車に乗りてゐむ人を羨む病床に吾は

早春譜

枯草のあひだに咲きて蒲公英の花おびただし古き土手の上

土手の上に腰をおろして投げいだす足さきの辺の草木瓜の花

マイクrofオンのすぐ近くにて鳴くらしき鶯のこゑ伝はりきたる

わが記憶もおぼろになりぬ奉天の入城は三十八年前の今日か

若きらは日露の役を現代史の一節としてあやしみもせず

初秋

けふ一日いづくを通るとほ颯風の余波なごりの雨ぞしばしば到る
蟬の声待ち兼ねしとにあらなくに聴けば楽しも夏の物として
遺骨受領に去年の暮にゆきこの月も再またゆく吾子よ度つしみ仕へよ
屋あひの間の白きかがやき眼にとめて木槿の花を喜ぶ友は
吾家わきへにも兩隣りやうとなりにも自然生しぜんはえの南瓜の蔓が伸びてやまずも
今年また藍ひと色に朝なさな五十百と咲く朝顔の花
いつの世に誰が人工淘汰してかく細長き畔藤胡瓜
運強すこやくいさをを立てて帰り来よ父は待たむぞ健すこやかになりて

海三題

わだつみの鱗うろこの宮は道遠み神の御代にも行き難てにしき
荒潮あらしほの八百会やほあひにして罪穢つみがれ可か可か呑みたまふ速開都比売はやあきつひめ
海さらはたの幸ひろ鱒さの広さもの狭さものらの差向けちめはあらず沢さに獲えて来こね

清秋

鍊成いとまに暇いとまなき君に吾はいふ当分たうぶん歌などは詠まずともよし
掌てのひらをかへすが如き行動を国の上に見てこの日頃あり
日暮より東の空にたたまりてゆきし雲間に望もちの月見ゆ
関東の今年の稲のよき出来を誰に向ひて吾は祝はむ
蟬のこゑ大方絶えてしんがり殿のつくづく法師鳴くばかりなり
大空に飛び立つさまをまのあたり此子の母が見なば泣かむぞ
庭にしてサルビアの咲くかたはらに莢さや膨ふくらめる枝豆みかぶ三株
町住みに人の氣づかぬ三日月を再び見れば既に落ちたり
家いえびとと粥かをうまらに食ふ時は物の乏ほしきことは思はず
民謡かの多く哀かなしき中にして八木節やきぶしのみぞ朗ほなりける
飛行機ひこうきがもたらししこの軍事便汗あえながら書きにつらむか
十月七日朝あさの程より冷ひえたれば足袋たびなど穿はきて吾は留守居す

病臥

街上を短袖みじかそでにてをみながら往ゆき来くと聞きて見みねば恋こほしも
晴はればれみやこい
晴々と都入みやこいりせし甘あま諸しよらは道みちを遠とほみかここにいまだ来きず

晚秋吟

散ちりがたの楓もみぢの背そが向むに天あまつ日は落おちてゆきつつ光ひかり洩あれ差さす

夏なつ井み川の川上がはにしてももみぢ葉はの名な所ところありと聞きて年とし経へぬ

鷄頭けいとうの花はなに差さしくる日ひのひかり吾われも浴ゆみつつ傍わららに立たつ

ひとたびは漫才まんさいに圧おされ衰おとろへし寄席よせの落語らくごが今宵こんやも聞きこゆ

健すこけき子こを夢ゆめにみてきめしかば子こはそこらべべにある心こころ地ぢしつ

若わかきらがたたかひ死しぬる時ときにして市いちに隠かくるる吾われならなくに

鷄頭けいとうとサルビアの花はなのただ二ふたつついまだも朱あかきわが庭にわの上うへ

わが病やま癒なえてきたれる段階だんかいをかへりみるだに遠とほき思おもひす

わが友ともら東京とうきやうより程ほど遠とほからぬ田舎いんかにありと吾われは恃たのまぬ

昭和十九年

微明

命いのちありて今日は神田かんだに出いでて来きぬいかなる書ほんを吾われは買かはむか
書ふみ読よまば賢さとしくならむことわりを老おいいたる今いまも疑うたがふとせず
灯ひを消けせば硝子戸しょうこ越こしにほのぼのと明あるき宵よぞ安やすらかに寝ねむ

歳晚帰郷

西にしぞらに紅べにを流ながせる雲くも褪あせてふる里さとの道みちはまだなかばなり

この道みちをふたたび吾われの通とほる日ひのありや否いなやと病やまみておもひき

おとうとは供出米かかに閑ひまはりてめでたく事ことを果はたししといふ

晴はれし日は朝あさより照ありてあたたかきこの墓原かぶらに子こらは臥ふせる

この土つちの下したにねむれるわが子こらと墓かぶら並ならべむは幾いくばとせの後のち

露霜

新嘗あたらごめくろごめの祭まつりに炊たけと新米あらたごめ玄米くろごめながら配くばりてきたる

二階にがいより見みおろす庭にわに露霜つゆしもは繁さかくなりつつ吾われ癒なえむとす

山吹の葉は冬にまでもち越して薄黄にぞ染む檜葉垣が下
落葉せし楓の大木に吹きこもる風音が風の間に聞こゆる
木曾谷の秋を描ける絵を觀むと師走の街に吾は出で来し

冬の月

軒並に宵早くより鎖したる巷の上の冬の夜の月

一月の五日の宵に風出でて運びこし雪か夜にもれる

日の沈む小山を見れば眼のまへの冬田の涯に横ほり伏せり

溝川が音たててゐるところあり暗き夜道をひとり来しかば

勅題『海上日出』

ゆらゆらと海を離れてのぼる日の珍の光は常新らしき

嚴冬

多摩御陵

東京の冬晴空をよるこびてわれと連れだつ秋田あがたの友

みささぎは山近くして参り路のさざれの上の粉の如き霜

年ごとにもの寂びてゆく御陵に菊の御紋章一つかがやく

家裏の山のうへまでひらきたる畑にあまねし峡の西日は

双葉山この春場所に四たびまで負けたることも記しておかむ

けふ今宵東京人の幾たりかさつま芋をばわがごとく食む

二月六日、鈴木敬司君宅

百あまりつぼみをもてる盆栽の梅の古木を君はやしなふ

林より苗さがし来て盆栽に仕立つる君が苦心のかずかず

大寒前後

臥処にて手さへこごゆるこの朝は零下何度といふにやあらむ

軍神の母のひとりか年老いて夜はさすがにさみしいひき

照りそむる旧正月の三日月をわが前をゆくをとめらは見す

中ぞらに絶えず音するこがらしが巷の上に吹きくだるとき

伽羅の木はみ寺の庭に繁れども冬深くして埃かむれり

碁将棋の記事が新聞の紙面よりいつ消えしとも知らで在り経き

季 冬

明治神宮 一首

知る人に吾は逢はねどこの宮に詣づるは皆大御宝ぞ

をとめらは至るところに働きて既にきのふの東京に似ず

大君の宮居の濠を鴨どりはいまだ去らねばみ雪散り来も

風花が降りて濡らしし街上をまぼろしなして日が流れたり

いま降れる雪は野菜に麦作に好しと賞めつつ眺めて飽かず

この冬は去年と異なりて雪多し農作によく人にも好けむ

い寝むとて湯婆の湯を沸かすこと三月つづけて冬過ぎむとす

世に活くる道に拙き友どちにこころは寄りてしばし眠らず

春日帰郷

故里を通へるバスのなくなりて徒行く今日は晴和もあるか

わが子らの墓に手向けむ花を無み春の川辺に柳をぞ折る

重なれる山々に昨夜雪降り遠山は濃く近山は淡く

春 寒

夜は冷ゆるわが洋室に差入りてはや寒からぬ十六夜の月

庭の上の一つ萌えたる路の臺わが知らぬ間に妻が摘みける

五 日 月

わが影が路上に淡くうつるまで五日の月は光りそめたり

旅行し子が帰り来ぬ夢を見てさめし朝明に亡き子偲ばゆ

小綬鶏が喚びたつる声市なかの森におこりて時の間あやし

埃かぜひねもす荒れて日の暮におとろふる頃吾は疲れぬ

山吹の花の一むら木の芽だつ下蔭にしてゆふべ明れる

相つぎて知人ら死にゆく見れば何に急ぐといふ心地する

梅雨めける今日はまがなし死にし子の形見の靴をはきて出でつつ

或 夜

玄関に立てばただちに声のして子は現地より帰りてゐたり

帰り来て子がいふ故に比律賓のヅマゲエテといふ土地も知りぬる
東京は寒しといひてみんなみの国を切りに子は思ふらし
この眼もて吾は見ざらむみんなみの島々の名を子は挙げていふ
相寄りて飯は食めどもわが家に今宵宿らむ子にあらなくに

穂 麦

夕月に待ふごとく明星の照りいづるにぞこころ和まむ
色づける穂麦が上に降る雨のあなほそぼそし街の一隈
工場街に窓はむかへる二階にて海の方より吹く風の音
見る海は十年前に変らねど今日来しは工場へ出勤のため
葦切の頻鳴く方に行く道は海ちかくして海の香ぞする
いづくにて生れたるものか東京の吾家の庭を過ぎる螢は

信三を偲ぶ

七月一日は陰曆五月十一日に当り朧なる夕月空にありき
報道を聴きたる後にわが息を整へむとぞしばし目つむる

生きてあらば彩帆島にこの月を眺めてかゝるむ戦ひのひまに
つはものの数は知らねど相次ぎて声を絶えたる洋中の島

独して堪へてはをれどつはものの親は悲しといはざらめやも
胸騒ぎしきりにしたる彼の日より生ける心地は吾になかりき
みんなみの空に向ひて吾子の名を幾たび喚ばば心足りなむ
わが日々は夢と現の間行きていづれに即くといふにもあらず
彩帆はいかにかあらむ子が上を昨日も憂ひ今日も憂ふる
彩帆にいのち果てむと思はねば勇みて征きし吾子し悲しも

子らに後れて

若きらが親に先立ち去ぬる世を幾世し積まば国は栄えむ
人は縦しいかにいふとも世間は吾には空し子らに後れて
大君に子をば捧げて悲しみに堪へたる人ぞ尊かりける

渡り鳥

百舌鳥の声いづくにすると言はなくに窓を開きて四方を見放けつ

樹の上にくれなる吐ける柘榴の実つゆ霜は昨日あたりより見つ
 たはやすく雲のあつまる秋ぞらをみなみに渡る群鳥のこゑ
 渡り鳥のこゑの聞ゆる昼つ方淡々としてわれはありける
 草花はけきの朝明に抜きすてて狭庭の土を日に曝すなり

床上詠(一)

夜の更けて流の音の聞えくる大河の辺に家居らましを

木枯は今宵はじめて吹きいでて幾たびとなく雨戸を鳴らす

吉植庄亮兄に

印旛野の君が賜ものいまの世に得難てにすとふ珍の賜もの
 いたつきの吾をあはれと心より思ほす君を吾はよく知る

木村捨録兄に

きのふまで相模の海に泳ぎあし魚ならずやもこの賜ものは
 生けるがに青笹の上に並びある渡津海の魚は見れど飽かぬかも

歌友某君に

畑つもの葱人參のたぐひをば賜れる君は常に親しも

九月三十日

大空を月は行けども国民ら深き憂ひに籠る今宵ぞ
 汝が性の拙きに泣けといふ言葉吾に移して慰むべきか

昭和二十年

床上詠(二)

サイパンに生き残りと思はねば今宵は繁しじに吾子ししぬばゆ
この夜よはをわが知る人ら壕ほにしていかに思ひてゐることならむ
壕ほのうち夜よはは冷えつつまるび寝ぬる枕まくら上がみより地ちひびき伝つふ
大浪なみに乗りたる如き心地して揺りくる地震をどこを小床こどに堪へつ
人ならば吾をさいなむ『運命』にをどりかかりて咽喉のど締めましを
茜あざぐもちりばふ空そらに五日月ごげつひかりそめつつ寒しゆふべは
今は亡したき子の下着したぎをば身につけてかく在り経たむといつか思ひし

一月中旬詠

白飯しろいが放つ光ひかりのまばゆきに小床こどにありてしばし眺めつ
大寒おほふゆに近きこのごろよく晴れて日ぐれはしばし夕焼ゆづりの空
音盤おんぱんに遺せる声こゑはいつの世の人ひとも聴きくらむ涙垂りつつ

二月上旬詠

食物しょくものにかかづらふとにあらねども乏ひしき時は思ほゆるかも
わが耳みみに伝つはりきたる街々のむごきことにも堪へてゆかむか

二月中旬詠

中空ちゆうくうに日はめぐり来て北側の屋根の雪にも差すべくなりぬ
水みづふむ雪ゆきとわが見て日のひかりあまねき庭にわにしばらく向ふ
春立ちて幾日もあらねどわが額かぶを照らす日かげは異ちがしく思ほゆ

二月下旬詠

日のなかば壕ほにこもりてゐる吾をいかにと訪まひてくる人もなし
天あまづたふ日の入る空そらはいや日ひけに北きたに寄りつつ春はるし来きぬらし

三月上旬詠

言こと挙げを吾はせねどもうら深く国くにを憂うれふる者の一人ぞ
一夜いちや寝ねば明日あしたは明日あしたとて新あらたしき日の照あるらむを何か嘆なげかむ

昭和十一年

日原谷

焼原小屋に泊り偶々鹿の啼声を聞く

谷川の音もけ遠き山なかにめざめて聞けば鹿の鳴くこゑ

夜半さめてわが聞きし鹿の二声ふたの先にも二こゑを友は聞けりとぞ

鹿の声聞きておもへば日原にっぽらの奥の溪間にここはありける

鳴く鹿はこゑ惜しむがに四こゑ鳴きあと次がずして夜の更くだちけり

古いにしへの人もたやすく聞かざりし鹿の鋭声とこえをいまぞ聞きける

鹿の声夜半に聞きてより毛布着てい寝る友をまた羨まざ

幸木以後

暮秋居住吟

山旅の三日を過ぎてかへりたる街を厚着してゆく人殖えぬ

本箱ほんだなに貫ひし柿を並べおきて昼も夜も食へば数減りにけり

山旅にひろひ来たれるナイフにて柿をむきて食ふ今日は留守居して

庭さきの杉をはづれて傾ける秋の日ざしをねもごろに浴む

夜学より戻りの道にあすの朝の冷えを告げぬるラヂオ侘びしも

身まはりの用事に追はれ明け暮れて秋の長夜とおもふこともなし

われに似ず器用に生れつきし子か版画を刷るときのみも今日も

日のあたるベンチをえ選りて乗換の電車待つ間も腰をおろしぬ

昭和十二年

二月日常吟

夕つぼみ朝にはひらく福寿草開きしままに二月に入れり

生垣に雀にまじりあさりある藪うぐひすは笹鳴くとせぬ

蘭の鉢日当る縁に持ち出でて蕾かぞふる朝の間楽し

霜解に荒れしながらに日のさして乾ける庭を猫の踏みゆく

わが庭の細木の杉に傾ける日はあはあはと縁にとどけり

晩夏初秋吟

二百十日事なく過ぎし日のゆふべ支那にたたかふ兵をしぞ思ふ

昭和十三年

陸軍始観兵式 一月八日

われ若く捧げ銃つして迎へたる聯隊旗がいま前過ぐるはや

宮庭に出で来る聯隊旗を見てさへや初年兵のわれのこころ揺らぎき

支那の子ら画面にあふれ現はれて日本の唱歌をうたひをはりぬ

村うちに召集令がまたくだりぬと朝まだきより聞え来にけり

徐州さして包圍陣形にうつりたる軍の進みは神のごとしも

孟夏小吟

祖先みおやより受け継ぎこて来し畑土をよく耕して草生ひしめず

この見ゆる畑を死ぬまで耕ひとよして一生を終へし父の尊さ

I 君上海戦線より写真を送り来る

山ひと重向うに敵は屯して停車場もを守る日がつづくことや

晩夏小吟

けふもまた日和つづけと思ひをればあらしめく風朝より吹き来

仲秋小吟

凱旋の日はいつぞやといひあへる戦友と居て君は歌詠む

昭和十四年

空

人皆が己が物とし仰ぎ見て心足らへり広き青空

青空は常によけれど静かにも澄みきはまれる冬空ぞよき

春より夏へ

戦線の写真は常にほほゑましあとかへりみず進む兵士ら

かくしつ々われのある間も重慶へ爆撃機隊は天翔るらむあまかけ

「建設戦記」読みつつありて敵襲を怒りてゐるは吾にあらじか

床の上に眠り足りたるをさなごは瞳をあけて何を見つむる

死に近き仔猫はあはれあどけなき瞳を向けてわれを見るかな

満蒙国境

越境の敵を撃ち撃つ砲声の銜をかへす山さへもなし

夜も昼も蒙古につづく草原をまも瞻りて立てる兵は畏し

ポーランド分割

ポーランドを二つに分くる予定線新聞にそそぐ眼を撃ちきたる

ヒットラーの硬ばれる顔をえりえりて掲ぐるかきのふけふの新聞

いつの間に彼等ひそかにポーランドを二つに分つ相談をせし

○

屈原が入水せしといふじゆすゐ泪羅の名新聞に見えてわが軍迫る

動乱

敵前上陸せしといふ間に南寧になだれ入りたる軍は今いかに

わが軍があけくれ敵と対峙してこゑなき時は思ほゆるかも

大和協力

記元二千六百年を前にして時の長さをただに言はむや

常の如く飲食をしてたたかひの三年にわたる年暮れむとすおんじき

飲食の不足はいふな斯くてさへわが親たちのそれに勝るを

大和協力を心構へとして進みゆく日本の歩みとどまるなけむ

いついかなる事にあふとも振り起つ雄心はもてもたずば止まじ

昭和十五年

二月居常吟

硝子戸を今宵も鳴らす風いでぬ汪兆銘が立ちあがるはいつ

日高見の国の呼び名をひむがしに押し進めたる国ぢからはや

煙

立ち並ぶ煙突は煙吐き初めてけふの営みはじまりにけり

汽車にして幾年ぶりか夕ぐれの炊ぎのけむり見つつ旅ゆく

栽 培

大き実の生りなも生らずなも茄子の苗日ごとに伸びて楽しきものを

わがものと互かたみに言ひて茄子苗やに水遣る子らは楽しかるらし

夏日往来

たたかひにつながりのある為事してこの一劃にけふ奉仕をす

吾のあるこの一劃が直接に戦場とつながることをうべなふ

晩秋小情

二すぢの探照燈が交叉して逃ぐる飛行機を照らしいだせり

昭和十六年

仲秋日常吟

大敵を屠りてただちに引返す「反転」といふ語のひびきよし
みいくさは須叟もとどまるところなく長沙を落しまた鄭州を落す

新 秋

い寝し間にところ変れるおもひありきのふの暑さけさの涼しさ
朝づく日清き舗道に差す見れば昨宵のあらしは遠く去りたり
ジャンダークの奇蹟を昔語として潰えし国を何とか言はむ
独軍の機械化部隊を今の世の奇蹟といひて止むべきことか
新しき語がつぎつぎに生れ来て廃れ古りゆくものは是非なき
公益優先の語を案じつつわが思惟は幾たび壁に衝きあたりけむ
一介の語学教師として今かへりみる三十五年の吾の来し方

農繁期

日の暮れていまだ畑より帰り来ぬ母待ち兼ねて門に立つ子よ
みいくさ
皇軍につかはしし子に負くまじと野良にいそしむ父もあるらむ

○

節分の追儺の豆を今年よりやめていくさに勝ち抜かむとす
みこと
すめろぎの詔かかぶるたたかひに憂ひ喜びを猥りにはすな

聖戦四年

正しきを阻むものらとたたかひて年の四とせを超えむとぞする
たたかへば必ず勝つといふ信念の焰と燃えて皇軍すすむ
みいくさ
たはやすく国は興らぬ道理をまのあたり見て振ひたたむぞ
ほのぼのとわが眼に見えてまぎれなし大亜細亜の夜明のひかり
一億のいのち捧げて大東亜共栄圏の基築かむ
もどろ

時局緊張

松岡外相喚び迎へらるる画面よりあがる歓声は今のいまのもの
よ
瓦斯マスクと鉄兜をつくる画面もてたたかふ二つの国を対比す

太平洋戦争（一）

畏きや天の岩門よりさしいでし御光に似て御詔勅
いはと
神磐余彦の命のいにしへを眼に見るごとし進むみいくさ
かんいはれひこ

堪へたへて今日に及べる日本を何とかも見る亜米利加よ英吉利よ
にっぽん
大君の詔勅のまにま飛びたてる機上の兵はずでに神なり
時おかず布哇の島に迫りゆき撃沈したる敵艦三隻
せき

敵軍を脆しといはず皇軍が挙ぐる勝鬨にただ声を呑む
荒御魂天翔りつつ敵陣の上にとどろく夜を日を舍かず
お
きのうけふ地軸揺らぐと思ふまで西南太平洋に勝鬨あがる
大御代にいのちを享けし喜びを幾たびかしてまた今日にあふ
皇紀二千六百年を境として世界史は大いなる転換をせむ

太平洋戦争（二）

雲の間にハワイの島を見しときの胸とどろきは吾も頌たむ
航空魚雷発射ただちに上昇する機のはたらきは神を哭かしむ

一機対一艦といふ信念におのれ火と燃えて神隠りせり

航空魚雷がつくる波紋のうつくしく伸びるまにまに国力も伸びよ

十日経ていまだ帰らぬ飛行機をこころのうちに吾は喚ぶかな

香港の燃ゆるけむりを下に見てとぶ飛行機や天の鳥船

逃げまどふレパルス号のあはれさよ撃沈さるる数分前の写真

○

わが胸にとどこほるもの今はなし大詔勅をささげて起たむ

一瞬にたちあがりたるいきほひを今こそ見よと敵を撃ちうつ

街上のラヂオの前に人群れて沸るおもひをかたみに交す

東アジア一つに起るいきほひは誰か阻まむはばむものなし

国富みて驕るものらの敗退をまのあたり見てゆゆしかりける

香港陥ちマニラ潰えし今にしてシンガポールを恃むといふや

天が下一つの宇となる日まで抗ふものは撃ちてしやまむ

昭和十七年

太平洋戦争（三）

胸ぬちに滾るおもひをつつみたる山本提督の横向きの顔

征くものも見送るものもあひとともに航空母艦に並ぶ束の間

水底をあひだをおきて伝はりくるレキシントンの爆沈の音

赤道をつひに越えたる皇軍はラバウル・カピングに上陸をせり

潮風を右よりうけてつき進むジョホール・バハルへの海ぞひの路

故里の島見るときこちしてシンガポールを見て佇ちし兵よ

一億がかくる期待にこたへつつシンガポールへいまぞ迫れる

太平洋戦争（四）

湿地帯の泥を軍靴に踏みつけてシンガポールへの第一歩なり

戦場はまさに煙の中でありつづくシンガポールもまた同じとぞ

シンガポールの空かきみだすとどろきが八日つづきて勝鬨のこゑ

無条件降伏を説きて山下中将彼パーシヴァルの言葉を抑ふ

会見を終へし一室ひとへやにやがてしてかがやき出づるわが和御魂

会見の記事をし読めばたたかひて勝ちたるものは言葉みじかし

浅春吟

兄弟あにおととしばし別れし挨拶をかはすかたへにわれは立ちゐる（三男入営）

清水君見習士官の服を着てあな稚わか々し吾子にかも似る

溝口みそのくち奥一里ほどの処にて若きいのちを預れる君か

命めいあらば明日にも出動せむといふ君の決心をききつつ黙もだす

あめりかの俘虜の話してふてふてしき彼等の一面に触れてゆきたり

太平洋戦争（五）

いくさ神九このはしら柱と読みあげて写真を前に吾は額伏す

三十九年の時を隔てて光り合ふ旅順閉塞隊特別攻撃隊

今日ありて明日さへ知らぬ益良雄は明き心もちて行きける

のぼりくる月待ちかねて敵艦に迫れるこころ神みそなはず

「襲撃に成功せり」と打電せし後のことどもは偲びまつるのみ

白木綿の花と見るまで中ぞらにひかり散りばふ落下傘部隊

落下傘地に著かむとしてつはものの姿大きく時の間映る

つぎつぎに地におり立ちていつの間に隊伍整へし落下傘部隊

音絶えてしばしありける皇軍みいくさが声あぐるときラングーン陥つる

敵艦を飽くまで屠れりスラバヤ沖バタバヤ沖に相競ふがに

ひとたびは遁れし艦を追ひし及きて次の日の朝に撃ちて沈めき

第二次の祝賀日ことほぎのひにかくばかり早くあはむと誰か思ひし（三月十二日）

逝く春

わが前に新兵として立てる子は三十年前の吾にあらじか

新兵の子とともどもに営門を出づるあひだも胸があつしも

市中まちなかに二時間あまり吾とみて別れゆく子は見かへりもせず

太平洋戦争（六）

ビルマより支那を衝きたる作戦に瞠目しつつあやしみもせぬ

山の間の援蔣ルートにあがりたる雄叫をたけびを聴けや神のいくさの

重慶は雲の彼方とゆびさしてすすむ皇軍はみむなみよりす

身を固く甲ふといへど空ゆ見れば一つかみほどのコレヒドール島

飛行機の前に立ちたる和おもて軍神とあるを忘れて瞻る

真幸くしけふも在り経て水の辺に飯盒炊爨を兵ら楽しむ

洋遠くたたかはれある海戦をいかに思はばこころ和ぐらむ

初日の出満洲にしてをろかまむつはものの中にわが甥もあり

二男克二逝く（三）

たたかひにいのち燃えたつ時にして畳の上に子を死なしめぬ

太平洋戦争（七）

ガダルカナルにブナに敵をばひき寄せて底ひも知らぬ大き作戦

水域何万平方哩を確保してわが海軍は微動だにせず

レンネル島イサベル島沖に索敵して十日に亘る爆撃行よ

第一次ソロモン海戦にはじまりて皆かがやかし七つの海戦

みむなみの海の防衛と一万六千七百の御魂神留まりたまふ

つはものの遂のいのちは燃えたちて国を導く浄き火炎ぞ

ソロモンに幾たび目かの勝鬨の揚らむ時を待てば苦しむ

○

前過ぎて見るみるうちに遠ざかる軍用列車に思なからめや

示子

父子二代軍籍に名をつらねたる誇も一に今日の日のため

昭和十八年

面会 十月十六日前橋予備士官学校訪問

既にして校出身者の幾はしら合祀せし雄健神社を拝す

初秋

三男を前線に送る時の来て病死せし長男二男が惜しき

小寒

上聞に達せし兵等の勲をその時のみのことと思ふな

共産匪を正面の敵として戦へる君若くして歌に詠みけり

大君がみそなはしましし直後にも飛行機偏隊を畏みあふぐ

太平洋戦争（八）

小賢しく千島を南鳥島を敵機襲ひし夏逝かむとす

新しく制定されし旗を見て声立てて誦むリパブリカ・サ・フィリピナス

遍くし山崎保代大佐の御名伝はれる時すでに世に亡し

幸木以後

飛行機にて戦死の跡を覽たまへと終の願ひを言ひ添へ給ふ

屍を収めかねたる口惜しきは胸にたたみて語り継がなむ

ファシズムを空しきものと誰かいふ興る亡ぶる時に依りけり

ムツソリーニ何処にありや新聞に見れば伊太利は少し騒がし

きのふまで学徒たりし君等一兵となりて清しな軍服に更へて

ありとあるものを放下して一兵となりて起ちたる君等し吉しも

吾よりも年わかき友既にして子を皇軍に送りいだすとか

キスカ島を撤収したる報道は 瞭熱く吾も聴くはや

シドニーにデイエゴスワレスに荒御魂とどめたまへる十柱の神

時にあれば頭れたまふいくさ神ただ九柱十柱といはず

海渡り飛びこむ醜の奴らをいついつと待つ邊ひ撃つべく

大神は現人神にましませば靖国の神に御拝を賜ふ

痛み臥して花火の音を聴く時は靖国の神をしぬびまつらく

艦もろとも海に潜ぎて益良男のゆくべき道を明めたまふ（山口加来西提督）

昭和十九年

太平洋戦争（九）

かなしみはうちにつつみて古も大き御業を成し遂げましき

檀原の聖の御代ゆ二千まり六百とせの今日のいきほひ

海彼岸の西に南に紅毛の敵蹴散らして皇軍すすむ

みむなみの洋に雄詰ぶつはものは建甕槌の神の末裔か

国興すこのたたかひに勝たずして命生むと誰か思はむ

このままに吾いつ迄か在り得むやわが周囲より人ら出征つ

食む飯に腹充ち足りて在りし日を既に思はず国はたたかふ

喻ふれば泥靴のまま玄関に押しあがらむとする彼を撲て

信三を偲ぶ

信三は既に少尉になりぬらむいづくに在りて戦へるらむ

遙かにしへだたりぬれば前線の吾子を忘れてゐる日の多く

炎立ちあたら命の燃えつきしその日の状は永遠につたへむ

昭和二十年

太平洋戦争（十）

戦に遂には勝つと決めてゐる彼等洋鬼を飽くまでたたけ

日本軍の勇猛にして常徳を攻めおとすまで七日費えき

洋中の二つの島に四千余のいのち火と燃えて神上りましぬ

大君に捧げしいのちいついと待ちて碎けぬ悔いあらめやも

年老いし吾さへ後につづかむと思ふ聖戦に君は出でたつ

南の島のことごと底ひより鳴り轟くをいつとか待たむ

何ものにか憑かれし如く動きゐる学徒出動前の幾日

工員と一つ工場に働きて豈劣らめやわが学徒らは

ここに来て何ためらはむ工員と見まがふまでに遅しくなれ

天雲をくゑはららかし差しきたる日のみ光如すこの大き勝や

沸立ちて波くつがへる海原の和ぎなむとして勝のとどろき

還り来ぬ三百十二機もともどもに挙げし戦果ぞをろがみまつれ

わが生ける間といはず来む年はサイパン島を奪ひ返さね

この夜もつづけて敵の飛行機が来むか来じかと思ひつつ寝る
東京を遂に襲へる敵機らをただに憎みて在りがてなくに
たたかへる硫黄島より通信のとだえむ時を吾はおそるる

三月上旬詠

たたかひの烈しき島ゆつはものが詠みけむ歌を伝へ来にけり
あす知らぬ命をもちてつはものが詠み棄ててけむ歌かもこれは
戦のをはりを見ずに今死ぬる人のあはれを誰と語らむ